
Friends ~ モンスターハンター ~

シルバ ~ ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Friends〜モンスターハンター〜

【Nコード】

N9605S

【作者名】

シルバ〜ナイト

【あらすじ】

東の国出身のハンター『シュウト・オオサワ』と『キョンファ・ヤン』

傍若無人な変人、シュウトと組む事になったキョンファはポツケ村を中心に活動するハンターとなる。

オリジナル小説『Friends』シリーズのキャラを使ったモンスターハンターシリーズの小説。

原作の世界観に合うように比較的真面目な物語。

他サイトで書いている物の転載です。
更新停滞が多いですが必ず完結させます

前書き&更新修正近況報告履歴

↳更新、修正履歴↳

12月27日 5章更新

6月6日 4章更新

5月14日 プロローグの「初心者」を「自分の装備では」に修正

5月12日 前書き&履歴掲載。各章後書きを一部修正

2011年5月3日 投稿開始。

↳近況報告&制作日記的な物↳

12月27日

5章更新。二部執筆中。

12月26日

5章執筆状況75%

オリジナル小説とのリンクがありますが、出来るだけ正統派のモンハン小説目指しています。しかし、丸々原作通りでは広がりがないのでオリジナル要素をいくつか組み込む予定。

8月20日

5章執筆中。ちなみに先月よりオリジナル小説の

『Friends』スペースオペラ編』を掲載中。

こちらでもシユウトとキョンファが主人公。

〜前書き〜

どうも、

シルバ〜ナイトです。

この作品は自分のオリジナル小説『Friendsシリーズ』の
キャラを使用したモンスターハンターシリーズの二次創作となりま
す。

Friendsシリーズ主人公である変人シユウト・オオサワと
メインキャラの一人であるキョンファ・ヤンを中心の物語。

・更新速度が遅い。数ヶ月に一回とかよくある。

（中には一章更新に一年以上かける物も）

他にも書いている作品があるのでなおさら。

ついでに言い訳すると身体が弱いので体調崩しやすい。

・ただし必ず完結します。

・オリジナル小説であるFriendsシリーズとの関係性、
リンク設定はいずれ本文で。

・途中から修正する可能性あり。

- ・ シュウトウ作者。人は他人にはなれないからこの視点に。
- ・ 娯楽としての面白さや技術を追求した小説というよりも、「このキャラがこの状況に立たされたらこんな行動を取る」といった

リプレイ日記の様なある意味現実的な物語。

・ 『『ラトウーニは俺の嫁』』

以上を踏まえ、用法用量を守ってご覧ください。

なお、私シルバークナイトが特定の物や者に向けて悪意、敵意、嘘などを含む行為を行なう事はありません。本作品閲覧中に気分を害されたと感じる方、それはおそらくあなた自身の勝手な解釈であります。

読者の皆様方も、悪意、敵意、嘘を含む行動。

および他の読者様の迷惑になる事を行なわぬよう落ち着いて閲覧をお願いします。

では、また後ほど……

プロローグ

時間帯を間違えたか。

ハンターのシュウト・オオサワは
荒れ狂う吹雪の中、そう思った。

東方の都会出身である彼にとって、
雪山の吹雪と言う物は珍しく興味を引かれるが、
実際に体験して見ると苦痛以外の何物でもなかった。

服装はモコモコした雪国用の服であったが、
それでも寒い物は寒いので
自然と足が速くなる。

この足が遅くなる時が
本当に危険な時だろう。

そんな事を思いながら、
ひたすらに山越えを目指していたが、
山頂付近に到達した時にその思いはいつそう強くなった。

何故なら、竜に喰われたとおぼしき草食獣の死骸が複数、
地面を紅く濡らして横たわっていたからだ。

それを見たシュウトは、
大してそれを調べようともせずに通り過ぎようとした。

だが、ふとその草食獣『ポポ』の近くに一人、人が座り込んでいるのが目に入った。どうやら死骸を調べているらしい。

「あー」

話しかけると、相手は即座に振り向いた。

女性であった。それも、かなり美人の。

「あなたは登山者？それともハンター？」

美人に驚いて二の句が継げないでいると、その女性から話し返してきた。

「んあー、はい。」

登山中のハンターなんで、両方ですね」

冷静を装って答えると、
女性はきりりと引き締まった　それでいて可愛げも感じさせる
顔で少し俯き、ポポを見遣る。

「このポポは竜にやられた様です。

喰いかけの様ですが……

この環境で活動可能な竜と言えば、

『フルフル』辺りだと思われます。

早々に立ち去った方が良いでしょう」

フルフル、と言えば

変わった見た目をした竜だ。

強さとしては、動きの鈍さを狙ったとして
少し手を焼く、ぐらいの者だろうか。
もちろん、それなりの実力を持つハンターにとってだが。

「あなたもハンターでしょう。狩らないんですか？」

「私はまだ駆け出しなので。

あなたが狩ったらどうです？」

どことなく嫌味な言い方だったが、
今は指摘している場合ではない。
自分の装備では、フルフルとやりあうのは不利だろう。

「あいにく、こっちもそんな強くないんでね。

自分は降りますよ。行き先はポツケ村ですが……？」

「ポツケ村……では、あなたも派遣された」

言い終わる前に、シュウトが驚いた顔をする。
ハツと口を開けて山頂を見ていたシュウトに
女性がならうと、褐色を中心とした虹色の様な迷彩柄の竜が山頂に
鎮座して
こちらを見ているのが見えた。

（少し話しすぎた　！

奴が何故ポポを喰いかけで止めたのか。

そりゃあ新しい獲物を見つけたからか！）

（あの竜は見たことが無い……

新種の竜？それとも私が知らないだけか　？)

二人は別々にパズルのピースをはめる様な考えをし、
そんな場合ではないと気がつく。

だが、竜は山頂から飛び降りてこちらの地面から直線状に陣取った。

「まずい……逃げろ！」

そんな暇も無く、竜がこちらへ突進して来る。

前足だけで這う様にはあったが、

その速度はかなり速かった。

シュウトは、反射的に女性の前へ飛び出し、
盾を竜へ向ける。

盾の大きさは対人用だとすれば十分であったが、
胴体だけで5メートル以上ある竜にとっては

それを吹き飛ばす事……

それどころか、爪で貫く事すら

造作も無い事であった。

シュウトは自分の判断が間違っていた事を、
女性に背中を引っ張られた事で気付く。

そのおかげで竜に貫かれる心配は無くなった。

何故なら、攻撃を外した竜の手は

シュウト達の足元を叩き、

その衝撃でシュウトと女性は崖下に転落して行ったからだ。

残された竜は、幾ばくか身体を揺らした。
そして何を思うのか、雄叫びを挙げた後に
ポポへ向き直るのであった。

1章 『東と東』

シユウトが目を覚ますと、
見知らぬ天井があった。

ぼやけた意識から覚めるのに数秒ほど要したが、
何があったかを思い出すという作業は、
隣に居た女性が答えてくれた。

「起きましたか」

抑揚の無いと言うか、無感情と言うか。
そういった意味での冷たい言葉で目が覚める。

「ガウシカが食べたい……」

女性は意外な言葉を聞き、しばし固まる。

「とりあえず、自分が何をしたか思い出してもらいましょう」

そう言うとき女性は、

シユウトが持っていた盾を取り出した。

中心よりやや右にずれた所に、

二文字の爪痕が残されていた。

一つは長く、二つ目の傷は短く浅い。

「そのまま受けていたら、盾ごと貫かれていたでしょうね」

「頼むから……」

シュウトはそんな言葉に耳も貸さず、
ひたすら食べ物を探め続けた。

呆れた顔をした女性は

言う通りにガウシカの肉と棍棒ネギ。

村特産の温泉の湯を運んで来た。

意外にも、おとなしくちまちまと食べていたシュウトは
今までの経緯説明を女性に求めた。

「竜に吹き飛ばされて、あなたは気絶したんです」

「ほうほう」

もぐもぐ。

「それを私がこの村まで運んだんです。」

この村はポッケ村。私はこの村に派遣されたハンターです」

「ほうほう」

むしむし。

「……聞いてます？」

「ん？いやあ、ガウシカって美味しいね。」

次は串焼きがいいな」

女性は溜息を吐き、不安な気持ちになった。
もし予想通りなら……

「あなたも、もしかしてこの村に派遣されたんですか？」

シュウトはここまでの会話で食事の

半分以上を平らげながら、背伸びをして明るい表情になる。

「そのとおり。」

自分はシュウト・オオサワ。

東方の国出身のハンター。

狩った事があるのはドスランポスぐらい。

武器は何でも使うよ。」

不安通り、この男は自分と同業。

しかも、派遣元のハンターズギルドからの指示では、
これから相棒となる予定の者であった。

「で、あなたは？」

見たところ、黒髪黒目だからお仲間さん？」

一呼吸置いた後、きりりとした表情で
女性は答える。

「私はキヨンファ・ヤン。」

ハンターランクは1。

あなたと同じく、ポツケ村へ派遣されました。

武器は双剣やライトボウガンが主です。」

すらすらと答えるが、

生まれた国と狩れるモンスターははっきりとは言わなかった。だが、シュウトはすぐに気づく。

「その名前、お隣さんだね。

いやあ、良かったよ。

異国の地で出会って命を共にする。

これほど素晴らしい事はないだろうね」

東方、と言ってもそれは大まかな分け方であり、

多くの国が存在するのだが、

シュウトの国とキヨンファの国は

古くから敵対関係にあった。

現在でも、顔を合わせれば流血ぎたになるような状態である。

「私は、できればあなたの国とは

死ぬまで係わり合いになりたくなかったのですが」

冷たい表情でキヨンファ。

それに対して、シュウトは

嬉しそうな表情をしている。

「良いじゃない。

本来敵同士がこうやって巡り会って、

協力して他国の為に尽くす。

素晴らしい事だと思うがねえ」

キヨンファは、シュウトと組む事を

心の底から嫌がったが、

しかたなく仕事と割り切る事にした。

となれば、こいつには
せいぜい役に立って貰わなければならない。

まずは、状況の整理である。

「こちらのギルドによれば、
負傷したこの村のハンターの代わりに
村の警備やその他依頼を
あなたと組んで請け負うと言う事でしたが」

シユウトは温泉湯を飲み、
ぷはぁ、と息を吐いてから返す。

「まあ、そうだな。
にしても、ギルドも気が利かないよなあ。
あなたの事だって、女性ハンターとしか
教えてくれなかったんだから。」

即席で組むんだから、相手の情報は欲しかったよなあ」

それにはキヨンフアも同調した。
ただし、敵意は込めていたが。

「私も、あなたが何人か知っていたら
受けなかったでしょうね」

その嫌味をさらりと受け流して、
シユウトはベッドから立ち上がる。

「うーいー」。

よくあれで骨の一本も折らなかつたねえ。

にしても、盾は使えないなあ。」

やる気の無い声に、
キヨンファはますます不安になる。
一人でもやっていける自信はあるが、
その根拠となるハンターとしての技能は
まだまだ未発達なのだから。

そんな事は露も知らず、
シウトは爪痕残る盾を
ベッドの頭の方にある棚へ乗せた。

「こりゃあ飾りにでもするか。

『正体不明の竜が残した爪痕!』
ポッケ村ハンターヒストリーの1ページには
まあまあだろ」

「恐らくそいつは、『ティガレックス』という
奴だろう。最近発見され、飛竜の原始と言われている」

不意に家へ入ってきたその人物は、
ハンターらしき防具を纏っていた。
武器は持つておらず、腕を組んでいる。

「あなたが、この村のハンター……
だった方ですか」

銀髪に柔和な表情をしたハンターは、
ニコリとしつつ頷いた。

「君達が見ただろう飛竜……
そいつに左腕をやられてね。
こうして腕を組んでないと、
垂れ下がったままなんだよ」

先輩ハンターが腕組みを外すと、
左腕がまるで骨すら入っていないかのように
だらりと垂れ下がる。
恐らく、筋肉をやられたのだろうか、
指先すらまったく動かない。

「こんな手じゃ、剣どころかフォークも握れないからね。
潔く引退させて貰ったよ。」

そのせいで君達に迷惑がかかったかも知れないが……」
先輩ハンターがすまなそうな顔を見ると、
シュウトはニヤリと笑いながら否定した。

「まさか。こんな相方に出会えて、
仕事まで貰えるなんて
ある意味贅沢ですよ。」

そう言った意味では、レックスとやらに感謝ですかね」
そう言うと、先輩ハンターは少し苦い顔をした。
ティガレックスに対する憎悪も、
もちろん残っているのだろう。

だが、シュウトは次にこう続けた。

「まあ、恩は仇で返させて貰いますけどね。」

1〜2ヶ月くらい掛かるだろうですが、
あいつには腕だけじゃなく全身をあなたに捧げて貰いましょうか」

何の根拠があつてか、
自信たつぷりに言い放つ。

先輩ハンターはキョトンとした顔の後、
大きく笑い出す。

柔和で若そうな見た目に対して、
笑い声は意外と低かった。

「ハツハツハ！威勢の良い事だ！
だが、仮にもそれなりの経験を積んだ
私を倒した竜だ。油断だけはするなよ」

キツチリ忠告も済ませるところは
さすが先輩である。

「なら話は早いが」と言うなり、
片手でシュウトのボディチェックをする。

一つ唸ったところで、
先輩として評価を下す。

「君はもう少し鍛えた方が良いな。
それでは大剣など、重い物は持てないだろう。
外傷が無かったのは運が良かったからかな」

「いえ、持てますよ？」

そう言うとシュウトは、
壁に立て掛けてあった大剣、
『ボーンブレイド』を片手で持ち上げて見せた。

シュウトの身長ほどある剣にも関わらず、
片手で持てたのがキヨンファや先輩ハンターには
信じられなかった。
見た感じ、シュウトは筋肉とは無縁の
中肉中背の身体なのだが。

「これは驚いた。
意外と力があるな！」

シュウトは少し得意げになる。

「もっと強力な大剣でも、
ガンランスでも持てますよ。
まあ、片手で竜を狩って言われたら
さすがに無理ですがね」

先輩がなるほど、と頷くと、

「では、私のお古だが、
武器をいくつか君にあげよう。そして
」

都会育ちのシュウトには信じられない言葉を言ったのである。

「今日からここは、君達の家だ」

「まさか、家までくれるとはなあ。
さすが田舎は違う」

村の主要施設を回りながら、
シュウトは呟いた。

「そっちのように

狭い国だと、土地も高いですからねえ」

キヨンファが相変わらず嫌味を言う。

シュウトは、いつになっただら友好的になっってくれるのだろうか
少々残念な顔をした。

お前の国だって、俺の国と大差無いだろう。

その言葉は口に出さない事にした。

シュウトは嘘が嫌いだが、

ハッキリ言っただら相手を怒らせるくらいなら、

言わない方が良いという考えの持ち主であるからして。

「でも、田舎は活気があっていいね。

俺達も歓迎されてるみたいだし」

ハンターはモンスターをぶち殺す野蛮な人種だ、
と言う輩も少なくはない。

だがこの村人達は、ハンターが行う行為には
理解を示してくれている方であった。

もちろん、村の警備や食料調達。

その他雑用までも含めて、重要な労働力だとも

思われているかも知れないが。

しかし、作物や鉱石が取れる農場の一部を無償で貸してくれたら、自分達を見かけるなりにこやかに話しかけてくれたりと、村の一員としても認めてくれているところを見ると、そうそう裏がある訳でもなさそうだ。

その夜、二人は今や自分達の物となった家で夕食を取っていた。

シュウトは、朝言っていたガウシカの串焼きをむしむしとかぶりついていた。次は、と言っていたが、すぐ食べたいと思ったのだろう。村を回ってすぐ、肉を買いに行ったのである。

「何で私の部屋に来るんですか」

少し怒り口調でキヨンファ。

彼女はキッチンがある食卓ではなく、自分の部屋に食事を持って行って食べようとしたが、何故かシュウトまで付いて来た。

「俺の国では、食事は大切なもんでな。重要だ。もちろん、食べるだけじゃなくて食事中の団らんも」

「私は一人がいいんです」

もう少しで感嘆符が付きそうな勢いで
キヨンファが言い放つ。

だがそれをシュウトはまったく気にせず、
串焼きを全て胃に押し込む。

そして憐れむ様な目でキヨンファを見た。

「お前ねえ、国、国って言うけど、

そんな線引きが要るの？

確かにそつちとは仲悪いけど、

友好的な奴だっているんだぜい？」

シュウトの『口説き』を無視して、
キヨンファは立ち上がり、
タンスへ向かう。

着替えを取り、

風呂場へ向かう途中も

シュウトは喋り続けていた。

風呂場の前に着き、

やっとシュウトへ向き直る。

「どこまで付いて来るつもりですか」

その嫌味を込めた問いに、
シュウトは正直に答えた。

「できれば、一緒に」

言い終わるとすぐさま、股間に蹴りを喰らった。

床へうずくまりつつ、

キョンファが入っていった風呂場へ向けて力無く怒鳴った。

「レックスより傷が深いぞ、このやるお〜！」

次の日、シュウトとキョンファは早くもハンター活動に取り掛かった。

二人とも、レックスによる大きな怪我は無かったし、村から歓迎、優遇されて何もしない訳にはいかなかったからだ。

と言っても、実力が大した事ないので、最初は簡単なクエストからこなす事になった。

雪山の中腹へ登った二人は、ポポやガウシカを狩り食料などを調達。また、鉱石や野草の採取をしていた。

「狩りは男の仕事！」と、意外にも古い考えであるシュウトは片手剣でポポやガウシカを狩り、死骸から肉や骨を剥ぎ取る。

本当は汚れるのは嫌いなのだが、

女性の前で恰好をつけるところだけ
妙に男らしい。

雪山草や氷結晶を採取したキヨンファが戻る頃には、
あらかた狩りを終えていた。

「……意外に手際は良いですね」

シュウトは少し驚く。
そして嬉しく思った。

キヨンファも、意外にハツキリと物を言ってくれるんだな、と。

「何笑ってるんですか」

にやけ顔を隠せなかったので、
じゃあ帰ろうか、と話題を変える。

荷物をリュックに入れ、
山を降りようとした時、
頭上から言葉にできないような
咆哮が轟いた。

この声を聴くのは初めてじゃない。

上を向くと果たして。

先日出逢ったティガレックスが
こちらへ向けて飛び降りて来た。

「まずい！逃げ　　って、おい！」

逃げるぞ、と言う前に

キヨンファは洞窟へ向かって全力でダッシュしていた。
おい待て、俺を置いて行くな。

必死に後へ続き、

洞窟の中へ転がり込む。

中は寒かったが、そんな文句が言える状況ではない。

「いつまでここに居るつもりだ……？」

これはシュウトとキヨンファの事ではなく、
レックスの話である。

昨日、酒場で見た情報誌によると、

レックスはポポを好物とするらしいので、

あいつは雪山に生息するポポを狙って来たと考えられる。

だが、いつまで居座るのかと言うと

まったく分かん。

「居なくなるのを待つしかないでしょう。」

少なくとも、私達の手に負える相手じゃない」

キヨンファが悲観的な説を立てるが、

これは現実的でもあった。

二人はランポスクラスのモンスターを狩った事はあっても、
飛竜種との戦闘経験はまったくくない。

もっとも弱いとされるイャンクックとすら

戦った事はないのだから、

先代ハンターを引退へ追い込んだ奴を相手にするには、

無謀以外の何物でもないだろう。

そう話していると、後ろからズシン！と音がする。
よくもまあ、こんなデカイの相手に後ろを取られたもんだ。

再び咆哮を挙げられると共に、
二人はまた走り出す。

一本道の洞窟に出た二人は、
出口目指してひたすら駆けるのだが、
後ろからレックスが前足を振り回して
そこら辺の岩を破壊しながら迫ってくる。

やばい。マジやばい。
どのくらいかって言うと、
ガウシカの突進10頭分？とか
そんなレベルじゃない。

キョンファが一瞬立ち止まり、
振り返って何かを投げつける。

シュートは、
自分の後ろから光が広がってゆくのが見えて
キョンファが投擲した物が分かる。

あれは閃光玉だ。
強い光を発し、一時的に相手の目を眩ます道具。
対飛竜戦ではよく使われる道具である。

レックスが悲鳴を挙げているが、

振り返る余裕など無い。

そのまま出口から飛び出し、
雪山の斜面をゴロゴロと転げ落ちる。

キヨンファもそれに続き、
斜面を下ると身体を起こし、
次の逃げ道を探す。

だが、思わぬ早さで回復したレックスが
洞窟から跳躍し二人の前へ立ち塞がった。

「しつこい！」

シュウトとキヨンファ、
どちらが言ったとしてもおかしくはないセリフ。

レックスは白く吐息を荒げながら、
こちらを舐める様に見ている。
そう、まるで上級ハンターが
弱いモンスターを狩る時の様に。

(狩るか、狩られるか、とはよく言ったもんだ)
シュウトはそう思い、
腰の剣を抜いた。

「キヨンファ！先に逃げとけ！
後、閃光玉もう無い？」

「な　！？

勝てる訳ないでしょう！」

キヨンファの前へ出て、

レックスを引き付けるシュウト。

キヨンファは、シュウトの身体が震えてる様に見えた。
それは寒さか、恐怖からか。

「ちょっと引き付けるだけだ。

とつとと言う通りにしないと死ぬぞ」

キヨンファは苦しい顔をして、

残りの閃光玉をシュウトに投げ渡す。

「では、殺し合おうか」

シュウトは、レックスに対し

片手剣を両手で持って構えた。

「掛川城城主、備中守朝比奈が元家臣、大沢修斗。
推して参る」

シュウトの言葉を理解したのかは知れないが、
レックスは軽く叫ぶと地面を前足で蹴り上げた。

雪が宙に舞い、シュウトへ降りかかる。

それをまったく気にも留めず、
シュウトはレックスの頭に肉薄し顔を斬りつけた。

だが、シュウトの持っている下級片手剣

『ボーンククリ改』では、例え急所であっても
一撃では致命傷にはなりえなかった。

顔に手を出されたレックスは怒り、

そのままシュウトを噛み砕こうとしたが、

シュウトは懷まで飛び込むと

腹から後ろ足を刻み始める。

その手際に、キヨンファは逃げる事も忘れて

戦闘に見入っていた。

(嘘……！？イヤンクックすら狩った事のないあいつが、

あんなのと互角に　！！)

内側に入られたレックスは、

身体を回転させて振り払う。

間一髪で伏せたシュウトは、

足に剣を突き立てようとするが、

思いの外皮膚が硬い。

一旦態勢を立て直す為、

身を引いた時、棒立ちのキヨンファが目に入った。

「バカヤロウ！何で逃げん！」

よそ見をした隙に、
レックスが腕を振りかぶる。
大振りだが素早い奴の攻撃を喰らえば、
骨が砕け散るのは確実だ。

シュウトはそれを横に飛んで避ける。
次の対応を思考していると、突然レックスが悲鳴を上げたので、
思わず耳を塞いだ。

何事かと思やれば、
レックスの目の近くからうっすら血が滲んでいる。

その直後、後ろから何か飛んでくる。
レックスに当たって地に落ちたそれは、投げナイフであった。

(これはいける！)

後ろを振り返らず、キヨンファに感謝し、
レックスの顔につけられた傷へジャンプ斬りで
剣を突き立てた。

耳をつんざく悲鳴の後、レックスは後ろへ飛びのく。

見事に、奴の顔にボンククリ改が突き刺さっていた。

「今だ逃げろ！」

レックスがもがいている内に、
シュウトとキヨンファは山を駆けつけて降りる。
ついでに閃光玉を投げつけておくのも、

忘れてはいない。

今度は、レックスは追いかけて来なかった。

「さあて、これからどうすっかな？」

あれから村へ戻り、事の顛末を村長と先代ハンターへ報告した。

先輩は、心配しつつも嬉しそうに褒め、

そして二度と無茶をしないように注意をしてくれた。

そしてキヨンファは、

帰りからあまり口を利かない。

ちょっとは褒めてくれてもいいんじゃないかと、

シュウトは思う。

実は、あれからずっと手足の震えが止まらないのだ。

半分は恐怖から。

もう半分は冷めやらぬ高揚感から。

初めて見た飛竜相手に、あれだけの戦果を挙げたのだ。

これは十分快拳であるだろう。

それでも、キヨンファがシュウトを褒める事は無かった。

その日の夜、昨日と同じく

キヨンファの部屋で二人は食事を取る。

先程まで自画自賛をしていたシュウトも、
いい加減口を慎んだ。

「ボーンククリはあのままだから、

次は太刀でも使うか。

幸い、取った鉱石で鉄刀が作れるし。

もちろん、キオンファがあつて良いって言うんだけど」

キオンファはもぐもぐと肉を噛みつつ、
別に良いですよ、とそっけなく返した。

「ん。じゃあそうするよ

……後」

シュウトは意地悪そうな顔で、
キオンファの頭に手を置き、
にんまりと笑いながら言った。

「助けてくれて、ありがとう」

キオンファの身体が一時停止する。

数瞬の後、彼女は俯きながら小声で答えた。

「こちらこそ」

シュウトは、それで満足であった。

1章『東と東』（後書き）

全ての始まりがブログで書いていたこの短文。

投稿前の初期設定では相手はキョンファではなく別キャラでした

ティナ・アーガイル。自分のサイトから見れる

オリジナル小説『Friendsスペースオペラ編』の浅野理納です。

と、内輪ネタですが、Friends本編見て無くても

このモンハン編は楽しめる様になってます。

何故主人公がシュウトとキョンファになったか。

単純にキョンファが好きだっただけです。

ちなみに、シュウトは作者なので物凄く書きやすい。

逆に言うと、2部でシュウト以外を

主人公にした視点も考えていますが難しい。

2章 『諦めと期待』

ティガレックスは雪山に現れなくなった。

それはシュウトとキヨンファが与えた傷が元なのか、それともまた別の理由かは誰も知れないが、一時的に脅威は去ったのである。

その代わりに、レックスが居なくなった事を察知したのか他のモンスターが次々と雪山へ戻って来る。

その中の一匹、『ドスギアノス』の
駆除依頼を受け入れた二人は、
再び向かった雪山の中腹にて
それと出くわした。

同じ鳥竜種のドスランポス程度なら狩った事のある二人は、
危なげも無くそれを討伐する。

だが、危なげも無く、というのはモンスター相手の話であって、
シュウトとキヨンファ。

この二人のパーティーとしての連携は
とても危険な物である事が、
二人が組んで数回目の戦闘で判明した。

ドスギアノスとの戦闘。

シュウトが『鉄刀』を振り回し、引き付けたところでキヨンファが側面背面に回り込み双剣『ツインダガー改』で斬りつける。

ある程度傷を負わせたらキヨンファが後退し、シュウトが攻撃範囲の広い鉄刀で薙ぎ払う。

シュウトが使った鉄刀は『太刀』と呼ばれる種類で、『大剣』を細身にしたような物だ。

斬るだけでなく大重量で叩き潰す事も目的とされた大剣と比べて、太刀は切れ味を重視している。

長さは大剣とさほど変わらないが、細身な分軽量なので広い範囲を連続で攻撃できる。

主に飛竜の尻尾を斬る時や、雑魚敵を薙ぎ払うのに適した武器だ。

だが、その長さで切れ味故、

使い手は障害物に刀が引っかからないように、そして味方を斬りつけないように注意しなければならない。

もちろん共にする仲間も同じで、常に距離感を意識しなければ自分の首が飛ぶ。

キヨンファはそれを理解し、

シュウトの攻撃時を見計らって後退するが、肝心の使い手であるシュウトは

周りをまったく目にせず太刀を振り回していた。ドスギアノス以外は眼中に無い、と見える。

キヨンファの双剣は片手剣を両手に一本ずつ持つ武器であり、狙いを付けるまでも無いほどに接近して

二つの剣を振り回し切り刻む武器なので、敵に最も近づくキヨンファは太刀に巻き込まれる可能性が高かった。

それをキヨンファは知っていたので自分から身を引いていたのだが、シュウトは内心、キヨンファを邪魔に思っていた。

敵にある程度近づき、

太刀を振り回せばまず確実に当たる。

だが、その敵に双剣使いがまわり付いていたとなると邪魔以外の何物でもない。

パーティーでの狩りは経験した事があるシュウトだが、その狩りへ太刀を装備して行った場合、毎回仲間を斬り付けそうになる。

と言うよりも実際、味方を斬った事がある。

左上から右下へ太刀を振り下ろした時に、仲間の左足を巻き込んでしまったのだ。

幸い足を切断するハメにはならなかったが、傷が完治する事はなく

そのハンターは引退を余儀なくされた。

だが、それも狩りの一部分である。

いつ何が起こるか分からない。

味方に斬られる事故、または事件。

そんな物、ハンターの世界にはゴロゴロと転がっている。

問題は、それを悪用して

パーティーの仲間を事故に見せかけて謀殺する輩がいる事や、そもそも自分がしている行為の危険性に気づかない者、気づいても直さない、直せない者が存在する事である。

シュウトは半ば故意で太刀を振るっている。

普通なら仲間を斬った時点でトラウマを負い、太刀が使えなくなるか消極的になるのが普通だが、それが無いのは「太刀の範囲に居るお前らが悪い」という発想をいくらか持っているからだろう。

それには、「どんな形であれ自分の邪魔をする仲間など要らない」という意味が込められているのだが、狩りに出て行動で示されるのは堪った事ではない。

ドスギアノスを狩った帰り道、

キヨンファはシュウトに文句と注意を示す。

「あんなに武器を振り回されたら、こつちが近づけないでしょう！」

それを予想していたシュウトは、事前に用意していた言葉で答えた。

「なら、次からボウガンを使うと良い。

……後ろから撃ってるだけだ。

ライトボウガンが使えるんだろ？

だったら、援護してくれるだけでも良い。

正面からぶつかる役目は、俺がやる」

今回のシユウトは無意識に、

キヨンファに支援役に回って欲しく思っ

この行動に出たのかも知れない。

だが、キヨンファからして見れば

間合いの掴めない上に、

無謀なほど前に出たがる初心者ハンターと組まされて

怒りと恐怖が込み上げて来る事しか

分からなかった。

「太刀をやめて、他の武器に代えるべきです！」

シユウトは溜息を吐き、

それに反論する。

「同じ事だ、片手剣でも大剣でも双剣でも。

なんなら、ガンランスやハンマーを使ってみようか？

その方が悲惨な事になるかと思うがね」

キヨンファはさらに怒りを増し、

「ならあなたの意識を変えるべきです！」と食い下がる。

彼女は意外と、感情が豊かであった。

普段の外面が冷たく見えるだけであって、

内面では様々な感情が渦巻いている。

彼女の意見は正しいのだが、
シューウトは耳を貸さない。

自分では聴いているつもりでいたが、
心のどこかでは自分の気持ちを守っていた。

キヨンファが背中を守ってくれて、
自分は目の前の敵を全力でぶった斬る。

そんな事を漠然と考えているのには、
半分だけ気づいていたのだ。

ともあれ、自分の意識を変えるよりも
キヨンファに折れて貰う事を考えていたシューウト。
何の根拠も無いが、キヨンファがパーティーを解散したがるという
発想は一片たりとも重い浮かんでいない。

反対にキヨンファは、
組んでから今までの戦闘で
自分達の連携が非常に危険である事を危惧していた。

「 組めないってのあ、
どづいづこった? 」

いつも通り、キヨンファの部屋で
食事を取っていた二人。

シュウトが『サイコロミートの粉吹きチーズがけ』からフォークを離して聞き返したのは、キヨンファがパーティー解散を言い出した事に対してである。

『スライスサボテンとスネークサーモンのサラダ』にほどよくネンチャクリームをかけながら、キヨンファは目を合わせず答えた。

「あなたの戦い方は、シングルのやり方です。パーティーとして成り立つ物ではない。私だって、斬られるのはごめんです。それもモンスターにでもなく、人間相手ならなおさら」

それを聞いたシュウトは、激しい落胆と怒りを覚えた。

「だったら！ボウガンや弓で出て」

そう言い出した言葉を、キヨンファが遮る。

「それが間違いなんです！私がそうするのは簡単。……でも、あなたの意識が変わるわけじゃない。そんな考えの人と、私は組みたくない！」

それだけ言うと、キヨンファは食事を途中で止め、残る皿に蓋をしてキッチンへ出て行く。

そして戻つてくると、
シュウトが居るにも関わらず着替えを始めた。

ここで着替えを見ているのは簡単だが、
それは何故か卑怯な気がした。

シュウトは黙って自分の部屋に戻る。

一人で食事を再開するのだが、

好きなはずの肉とチーズの味が分からなかった。

思わず床に突つ伏し、低く唸った。

本当ならそこら辺の物を投げ飛ばしたり、

先代ハンターから受け継いだ片手剣辺りで

適当な物らをズタズタに切り裂いたりしたかった。

だがキヨンファにその音を聞かれるのも

気分が悪いので、必死に耐えた。

普段のほほんとしているように見えるシュウトだが、

実は怒りを抑える事が苦手である。

それでも耐えられたのは、

キヨンファが自分を切り離れたとは思えず

まだ信用していると思ひ込んでいるからだろうか。

そんな考えがシュウトの頭を過った。

このままでは頭がどうにかなりそうだったので、
イラつきを発散させる口実として
クエストを受ける事にした。

『マフモフシリーズ』の服を着て、
村長の所へ向かう。

何か依頼が無いか尋ねると、

『ドスファンゴ』の狩猟依頼があると言われた。

そして、キヨンファが一足早く

ギアノスの群れの駆除依頼を受けて

先ほど向かった事も知らされた。

理由を聞いたがる村長を無視し、

黙々と狩場へ向かった。

現場でかち合う可能性もあったが、

それよりもこの怒りを誰かへぶつけたかったから。

キヨンファは、雪山の洞窟で息を潜めていた。

上段の通路から、下の広間をうかがう。

このエリアは大型モンスターの寝床にもなるが、
ギアノスやブランゴのような小型モンスターや
ランゴスタが居る時もある。

今回も、ギアノスが数匹うろついていた。

一人の時でも、小型モンスターなら何回か狩った事がある。
数により油断は出来ないが、苦戦する事は無いだろう。

そう思い、双剣を構え

上からギアノスへ飛び掛る。

一匹の胴体に突き立てた双剣を、そのまま左右に切り裂く。

多少血が飛び散ったが、気にしなかった。

断末魔に気づいた残りのギアノスが、キヨンファを指して飛び掛ってくる。

後ろへステップし、立ち位置に右手を残したまま身体を左へ傾ける。

ギアノスが右手の位置に近づくと、左手の剣と右手の剣で上下から首を挟み、跳ね飛ばした。

一見冷静な行動に見えるが、心の中ではシュウトがどうしたら改心するか。またはシュウトが何故自分の心を理解しないのかでいっぱいであった。

その為、ギアノスが一匹逃げたのに気づかなかったのである。

あらかた駆逐したと思ったキヨンファは、洞窟を抜けて中腹のエリア6へ着いた。

ここにも数匹のギアノスが居たので、早い内に片付けようとした時だった。

ギアノスの鳴き声が増え、数を増してゆく。

(仲間を呼ばれた……？)

一歩後ずさりすると、
後ろからも鳴き声がする。

ここで初めて、状況の危険さに気づいた。

(囲まれた　！？)

10匹前後のギアノスが

四方を囲んで来るのが分かった。

先ほど逃げた一匹が仲間を呼んだのだろうか、

キヨンファはそれに気づいていないので

突然現れたギアノスの群れに驚きと恐怖を感じた。

本来なら、一方を強行突破して逃げるのが得策なのだが、

まだ未熟なキヨンファはそれが実行できない。

言うほど簡単では無いのだ。

人間ほどではないが、

連携の取れたギアノス達が

キヨンファへ飛び掛る。

(こんな時、あいつがいたなら……！)

キヨンファは、一匹の爪に

マフモフの服を裂かれつつも、

双剣をギアノスの群れへ向けた

一方シュウトは、崖のツタを登りつつ採掘に使うピッケルを持ってきた事を後悔していた。

(このツタが切れたら俺は死ぬわけで)

今、彼が掴んでいるツタは丈夫な種類であり、同じく丈夫なクモの巣と合わせれば落とし穴の素材になるネットが出来上がる。

人間三人四人ほどの重さでも十分耐えられる物だが、このツタを登っている時は毎回生きた心地がしなかった。荷物が多い時ならなおさらだ。

登山家はある意味ハンターより危険なんじゃないかと考えながら、ツタを登りきると山頂に近い場所へ辿り着く。

そこには、廃棄されたベースキャンプが半ば雪に埋もれていた。モンスターの襲撃を受けたのか、それともまた別の理由なのかは分からない。

たまにペイントボールなど、アイテムが落ちている所を見ると、今でも小休止に使っているハンターがいるのだろうか？だがここはモンスターが出るのでどちらにしても長く休憩できる物ではない。

そんな疑問を持ちつつ通り過ぎた時、目の前にドスファンゴが無防備に歩いてくるのが見えた。

反射的に鉄刀で突きかかり、
ドスファンゴの目を潰す。

巨大なイノシシ型モンスターであるドスファンゴは、
不意打ちによる驚きと痛みにより身体を暴れさせた。

しまった、と思う暇もなく、
暴れた奴の牙がシュウトに当たる。
尖った先端ではなく、牙横が当たったのは運が良かった。

だが、倒れたシュウトに
ドスファンゴの足が当たる。

蹴っ飛ばされる様になり、シュウトは一瞬呼吸が止まる。

咳き込んでうずくまるシュウトに、
ドスファンゴは追い討ちをかける。

前足で踏みつけられ、胴体の骨が砕けそうな感覚に陥りながらも、
シュウトはハンターなら誰もが持っている剥ぎ取り用のナイフを突
き立てる。

怯んだドスファンゴから命からがら逃げ出し距離を取ると、
そこで初めて、太刀がファンゴのそばへ落ちたままなのに気づいた。

自分の情けなさを笑う余裕もなく、
シュウトは奴を睨みつけ、口に出して叫んだ。

「『あの』俺が、下位ファンゴ相手になんてザマだ!！」

そして剥ぎ取りナイフを構え直すと、
ドスファンゴに横から回り込む軌道を取ったのである。

キヨンファの援護があれば。

そう考えた自分に、
少し嫌悪感を抱きながら

「すまんかった」

キヨンファの部屋で、
目を逸らしながら言うシュウト。
その言葉を聞いたキヨンファは、
しばしの無言まま、続きを聞いた。

「やっぱあれだ。

仲間って良いもんだね。

それをみすみす失うところだったよ」

シュウトはその後ファンゴを討伐し、
一つの事実に気づいた。

それは、キヨンファと組む事を誰よりも喜んでいたのは
自分自身であったという事。

自分がしていた事が、
キヨンファと組める事を喜んでいた感情と
まったく逆の事を示していた事である。

彼の辞書の譲歩という文字はほとんど日の目を見る事がなかったの

だが、

ここに来て久しぶりに、彼はそれを受け入れた。

「確かに俺がやってたのは一人での狩り方だ。

パーティーでの連携なんざ考えて無かった。

それを今、謝り、正そうと思う」

それを聴いたキヨンファは、

普段通りの冷たい表情。

だが、少し柔らかい雰囲気を漂わせながら

「解れば、いいんです」

と、目を合わせずに答えた。

「ところで、お前のマフモフが

ひでえ事になってるんだが……」

見れば、壁に掛けられているもこもこした寒冷地用の服が
あちこち切り裂かれてボロボロになっている。

「ち、ちよつと油断しただけです。

ギアノスが10匹以上まとめてかかって来たから……」

そう言うと、シュウトの返答を待つ。

そのシュウトは、ある予想を口にした。

「あのさあ、普通これだけボロボロになったら

捨てるか武器屋に直してもらうかするじゃん？

それを部屋に……目立つ様に置いてるのは

俺の心配を誘ってるわけ？」

「な　！？」

どもりつつ、「そ、そんなわけないですよ？」

と言うが、おそらく凶星なのだろう。

こちらとしても、実は本当に心配していたのだが、見る限り大丈夫そうだ。

ちよつと焦った感じのキョソフアを

面白げに眺めながら、一日は過ぎていった。

「おお、やっと届いたかー！」

そう言つてシュウトが開けたいくつかの大きな箱には、この村へ派遣される前に使っていた武具が入っていた。

彼はマフモフシリーズにボーンククリという装備でこの村へ来たのだが、

それは移動を楽にするためであり、主兵装やその他アイテムは個人的な

『つて』をつかった配達で送る手はずになっていた。

「『黒刀【零ノ型】』と『バトルシリーズ』ですか。けっこう良い装備を持ってたんですね」

「いや、これは『黒刀【弐ノ型】』だよ」

それを聞いたキヨンファは少し驚いた。

黒刀と言えば、甲虫種モンスター

『カントロス』や『ランゴスタ』の素材に

鬼人薬やドスヘラクレスを混ぜて鍛えた太刀であり、

かなりの切れ味を持つ武器だ。

弐ノ型は零ノ型を強化した物で、

その刃は飛竜の甲殻にも太刀打ちできるだろう。

「『寄生』でもしたんですか？」

寄生とは、強いハンターに付いて行って

自分は戦わずに報酬と素材だけを貰う行為を指す。

語源は寄生虫を示した物で、

この行為はハンターの間では恥ずべき物として有名である。

「まさかあ！安物のボウガンに毒弾詰めてって、

毒けむりだまとかも使えば素材は取れるだろう！

これは意外と簡単に作れる武器だよ」

ランゴスタなどの甲虫種モンスターは、

要するに巨大な虫のモンスターである。

この甲虫種は硬い甲殻を持つクセに

身体自体が脆く、攻撃するとバラバラになりやすい為

毒で徐々に弱らせて動かなくせねば上手く素材を剥ぎ取る事が出来ない。

だが、毒属性を持つ武器で狩れば簡単に素材が集まる。

（装備によっては多くの素材が必要な為、多少時間はかかるが

それでも飛竜を狩るよりはたやすい)
それを他のハンターが気づいているかはしらないが、
甲虫系の装備は結構優秀なのに
あまり人気が無いのをシュウトは不思議に思っていた。

「そういえば、キョンファはそれが一番の装備？」

シュウトがキョンファへ目を向ける。

彼女はツインダガー改と『ハンターシリーズ』を装備していた。

「ええ。まだ初心者なので」

確かに、大きな特徴も無く

初心者が使う装備であるが、

ツインダガー改は飛竜である『イヤンクック』

(正確には鳥竜種だが、小型モンスターではなく

空を飛ぶので飛竜種と混同される事が多い)

とも十分やりあえる武器であるし、

村の武器屋で売っていたハンターシリーズも

大型モンスターの素材を使った防具には劣るが、

大型モンスターの位置を察知できる

『自動マーキング』のスキルが付く事から

上級者ハンターが弱めのモンスターを狩る時に着る事もある。

ちなみにスキルとは

装備に付いている特殊な能力の事で、

例えば傷の治りが早くなったり

調合の成功率があがったりする。

何故そのような効果が現れるのかは

装備それぞれに理由があるのだろうが、大抵は説明されていなかったり誰も気にしていなかったりする。要するに『そういう物なんだ』と置いておけば良い。世の中、細かい事は気にしないほうが楽なのである。

「にしても、初『イヤンクック』か。

俺も昔は苦労したもんだよおー。

ま、死なない程度にやる事だね。

ネコタクシーに乗れる位の余力は残して逃げた方が良いでしょう」

ネコタクシー。

これはギルドに雇われている『アイルー』

ネコ型の獣人モンスター　　が

ハンターが倒れた時に救出してくれるというサービスだ。また、一部のクエストでは狩場から帰る際にも使われる。

これはハンターをむやみに死なせない為のシステムだが、実際にモンスターの前で倒れているハンターを助けるにはかなりの勇気と実力がある。

もちろんアイルー達にも報酬は支払われるのであり、クエストの報酬はこのネコタクシーを使用する度に引かれる。一回で三分の一減らされるので、三回利用した時点でクエストの報酬はゼロだ。

だが二回まで利用してハンターがクエストをリタイアしたとしても、アイルーにはギルドから報酬が支払われる。ギルドとしても限度を超える金は払えないし、何回も失敗されてはそのハンターはクエストを達成できぬと判断さ

れる為

三回ネコタクシーを使った時点でクエストは失敗扱いとされる。

死んでしまつては元も子もないし、

二回までなら失敗扱いにはならず

クエストを達成すれば三分の一でも報酬は貰えるのだから、
危なくなつたらネコタクシー。

ハンターの間ではよく重宝がられる物である。

そんな事よりもキヨンファが気になったのは、

まるでシュウトは飛竜であるイヤンクックを狩った事があるかのような
言い方をしたことだ。

確か、狩った事のあるのはドスランポスくらいだと
言っていたはずだが。

「イヤンクックを狩った事があるかのような物言いですね」

そうキヨンファが言うと、

シュウトは少し考えた素振りを見せて、
それから驚くべき答えを返した。

「あるよ。クックにリオレウスにガノトトスに

モノブロスに……キリンとかラオシャンロンとかの古竜も」

そこまで聞くと、キヨンファはまず絶句してから
シュウトの全てを疑った。

ティガレックスとやりあつたとはいえ、

この男がそれほど強くは見えなかつたからだ。

モノブ羅斯は強力な飛竜でありながら、この地方ではパーティーでこれを狩る事は許可されていないし、キリンやラオシャンロンなどという発見だけでも困難な古竜を狩った事があるなど、信じられるはずがない。

「それはどういふ冗談なんでしょう」

その言葉を予想していたシュウトだったが、やはり疑われる事は面白くない。ふう、と溜息を吐いてから説明を始める。

「狩ったのがドスランポスマでつてのは、最近の話だ。数年前は一人でも飛竜を狩つてた。

でも、ラオシャンロンを殺しちゃったりして

飛竜の保護団体に批難されたり、

他のハンターやギルドとのいざこざがあったり、

まあその他諸々があつて今は

ランク1ハンターとして活動してる訳だ。

G級ハンターの仲間だつているし、

武器だつて今言つた理由で取り上げられた奴や

猟団に預けてある奴、自粛してある奴がある。

後、重要なのは！自分嘘吐かない！」

ここまで聞いてキヨンフアは額を押さえた。

にわかに信じられない話であり、

シュウトがこんな嘘を吐いたとしたら

それはどんな理由なのかを考えた。

「とりあえず

それが嘘か本当かは置いておきます。

「実戦に出れば、それは分かりますから」

シューウトは「疑り深いねえ」と不満を隠さないうたが、実際実力を偽るハンターは多い。

自分は何々を狩った事があるとほらを吹く奴。

有名な装備のレプリカを作り、

それであたかも有能なハンターに見せかける奴。

そんなハンターも少なくはない。

だが、実戦に出て飛竜クラスのモンスターと戦えばその力はおのずと知れる。

この業界、少し戦い方をかじった位でそうそう上手くいく物ではないからだ。

どんな豪傑でも所詮は人間。

飛竜の攻撃を受ければただではすまない。

また、モンスターには本能的な攻撃パターンが存在するが、それを書物で知っていたとしても

理解しているのと避けれるのは別である。

結果、実力は実戦でいかに敵の攻撃をかわし

どの程度までなら安全に攻撃を当て続けられるかで判断される。

レックス戦でシューウトが行った攻撃は

驚くべき物であった。

レックスと出会ってからの行動で

大まかな攻撃パターンを予測したとしか思えない物だ。

一歩も退かずに正面から立ち向かった事からも、それなりの度胸と場数を踏んでいるのかも知れない。

キヨンファは、シュウトを人間としてもハンターとしても『普通ではない』としか思えなかった。

レックスと互角にやりあった時点で

ただの初心者ではないと思ったが、

太刀の扱い方はまるつきり素人の物だったのがさらにキヨンファを混乱させた。

それだけならばパーティーでの狩りが苦手なソロハンターと言われれば理解はできる。

だが、パーティーで太刀を使い仲間のハンター生命を絶ったこの話を聞くと、

余計にシュウトという人間が分からなくなった。

とりあえずキヨンファは、

シュウトが完全に信用できるまでこの件は保留にする事にした。

「では、私は行ってきます」

そう言っただけ彼女はその装備の他に

閃光玉や音爆弾などの補助アイテムをいくつかポーチに入れて家を出て行った。

しばらく自分の装備を弄っていたシュウトだったが、

何だか落ち着かずに村長の所へ向かう。

いつも村のシンボルである大きなマカライト石のそばで

たき火に当たっているのです、今もそこに居るだろう。

家を出て村の入り口まで行くと、

案の定村長がたき火の前に突っ立ったままうつらうつらとしていた。

シュウトが声をかけると、

杖についてこちらへ向き直る。

シュウトは杖なんて持つ必要あるのか？と思った。

村長はシュウトの腰ほどしか身長もなく

そうとう年を食った人物なのだろうが、まだまだ元気だ。

村へやってくる行商人のばあちゃんも、

自分の何倍もある大きな荷物を背負って歩く。

もしかしたら、その状態で走れるのかもしれない。

そう考えると、おばあちゃんという者は

思っていたよりも色んな意味で強い生き物なのかもしれないと思った。

「シュウトか。ひゃう、今日も冷えるの」

「だったら家の中に居ればいいのに……」

それより、キヨンファがイャンクック狩猟のクエスト受けたでし
よう」

そう。キヨンファは初のイャンクック狩りを果たさんとしていた。

イャンクックは飛竜の中ではもつとも弱いとされているが、

この生き物はあるあだ名を持っていた。

別名、『クック先生』である。

イヤンクックは火炎ブレス、噛み付き、突進など

あらゆる竜の本能的行動パターンを一通り揃えている。

このクックのパターンを理解し、避けられるようになったならばそれはもっと強力な飛竜との戦いで役に立つ物になるだろう。

だからイヤンクックは上級ハンターの練習相手として、

下級ハンターからは乗り越えるべき第一の壁としての役割を果たす事から

敬意を払って先生と呼ばれているのである。

まずキヨンファは、イヤンクックを

単独で狩れる様に成長する必要があった。

それが出来なければ、ティガレックスを狩るなど夢のまた夢であろう。

村のハンターとして、

村人や村全体に害をなす可能性は取り除かなければならない。それが出来る実力を身に付けるのも義務だ。

「おお、さっき受けて行ったの。

なんじゃ、気になるのか。

ええのう、若いもんは」

「茶化さないで下さいよ。

場所は森丘でしたよね？」

「ああ、そつだの。」

ただ、一つ言い忘れてた事があったな」

村長はそう言うと、

いつもと変わらぬゆったりした調子で続けた。

「あそこ、『リオレウス』も出とるんじや。

集会所の方に依頼が出ておつたんじやが」

「ばあさん。それまじい」

シユウトは大きく溜息を吐いた。

このばあさんは何て事してくれるのか……

すぐさま集会所に向かう。

村長が居るマカライト石からすぐそばだ。

村長から請け負う依頼もハンターズギルドを通した物だが、

この集会所はギルド直属の仕事を斡旋する所である。

管轄は微妙に違うが、やる事は同じだ。

ただし、ここでの依頼はポケ村自体に関わる事ではない。

都会の街にあるギルドの出張所だ。

村の依頼で手一杯なシユウトとキョンファにとって、

今はまだ用事の無いはずの場所であった。

「あら〜いらっしやい。」

またレックスに襲われたって聞いたけど、

元気そうで良かったわ〜」

ギルドマネージャーのお姉さんが優しくそんな口調で声をかけてくれる。

集会所を見渡すと、何やら帰らぬ主人を待ち続けているというアイルー。

集会所の一角を占有している珍しい宝が好きなトレジィ、それに暇そうな受付嬢達が堂々とあくびをしている。

「どうも姉さん。」

こっちにリオレウスの依頼が来てるって聞いたんですが、場所は森丘で」

「あゝ、リオレウスの依頼ならあるわよお」

マネージャーは近くの受付嬢を促す。

受付嬢はパラパラと書類をめくり、二人へ返した。

「はい。森丘でリオレウスの依頼。」

確かにあります。レベルは2ですね」

「そうそう、リオレウスにしては珍しい

レベル2の依頼なのよ」

ハンターランクにより、

受けられる依頼には限りがある。

今のシュウトはランク1なので、

受けられるのはレベル3までだ。

高ランクになると、『上位』や『G級』などの

レベルの高いクエストも受けられるようになるが。

「良かった、受けれるか」

シュウトはほっとする。

だが、クエストボードと呼ばれる掲示板の傍に居た女ハンターがそんなシュウトを見て突っかかってきた。

「わざわざギルドから来て崖から落っこちたアンタが、
リオレウスなんかには勝てると思ってるの？」

またか、とシュウトは思った。

この女ハンターは先日村を回った時にも会ったが、
どうもこちらを敵視してるらしい。

「ようツンデレ。」

何だ、じゃああなたが受けるの？」

「誰がツンデレよ！」

私は……ほ、他のモンスターを追ってるのよ！

リオレウスなんかには構う余裕は無いの！」

彼女が追っているモンスターが

下位のドスギアノスという事は知っていたが、

シュウトはそれを口に出さない代わりに苦笑いで返した。

「ま、それで良いよ。」

「この依頼を受けるのは」

森丘のキャンプに到着したキヨンファは、
まず装備を徹底的に点検した。

ツインダガー改。

これは大丈夫だろう。砥石でちゃんと研いである。

『チェーンブリッツ』。

これは『鉄鉱石』と『円盤石』という鉱石から作られたライトボウガンである。

キヨンファはこれも持ち込んでいた。

通常、一回のクエストに二種類の武器を持ち込む事は少ない。

荷物がかさむなどの問題もあるが、

第一にハンターという者は一種類の武器を使い続けるのが普通なのである。

こころる武器を変えるのは結構な値段がかかる。

それに双剣なら双剣、ボウガンならボウガン。

どっちつかずよりも、一種類の武器に精通した方が良い。

ただキヨンファの場合、彼女は全種の武器を使うとはいかないまでも一人です手くやる為に万能なハンターを目指していた。

双剣だけでは手に余るモンスターと出くわした場合の為に、ボウガンの扱いにも慣れるようにしていたのだ。

初の飛竜戦となる今回は、

念の為に両方の武器を持って行く事にした。

とはいえ、両方を担いで戦えるわけがない。

メイン武器が双剣なので、チェーンブリッツはキャンプに置いてお

く事にする。

（大丈夫。装備面では問題無い。

チェーンブリッツまで持ち出すほど苦戦はしない）

どこからその自信が来るのか分からんが、とにかくキヨンファは冷静になる。

腰に付けたポーチにギルドから支給された応急薬、

携帯食料、携帯砥石、ペイントボールなど。

その他にも回復薬や閃光玉、音爆弾などを入れるだけ詰め込んであるのを確認すると

キヨンファはキャンプ地を後にした。

地図を確認しながら丘の頂上まで登って行く。

途中、ランポスが3匹ほどうついていたので

念の為に狩っておいた。

キャンプへ戻る際に襲われかねないからだ。

死骸はそのままにしておこうかと思っただが、

ハンターとして生物の命を無駄にする事は出来ない。

ちゃんと全て剥ぎ取り、袋に放り込んだ。

キヨンファは丘の頂上。地図ではエリア3と書かれている場所に辿り着く。

ハンターシリーズの防具のスキル、

自動マーキングでイヤクックの位置は分かっている。

ただ、今奴が居る場所は森の中で視界が悪い。

とりあえず、ここで隠れて待つのが正解だろうか。

そこまで考え、自分の冷静さを感じた。
だがそれと同時に、どうも気が張り詰めている感覚も感じる。

（大丈夫。ちよつとした壁を乗り越えるだけ）

念の為に、もう一度だけ荷物を確認する。
ランポスの素材を入れた袋は邪魔なので途中で置いてきた。
ポーチの中身も、何ら問題は無い。

（俺の国では、食事は大切なもんでな。重要だ）

中身を確認している時、
携帯食料が入っているのを見て
ふとシュウトの言葉を思い出す。

「むう」

奴の言葉はあまり認めたくないが、
こればかりは正しい。
携帯食料を一つかじり、水で流し込む。
これが最後の食事かという思いが頭を過り、
キヨンファはふるふると頭を振った。

「……来る！」

イヤンクックが飛び立ち、
このエリアに向かってくる事が分かると
近くの茂みに伏せった。

ほどなく、クツクがバサバサと翼を羽ばたかせながら降りてくる。

桃色の身体。大きなクチバシ。

個性的な顔立ちは『怪鳥』の名の通りである。

大きな耳は閉じていて、あれはこちらに気付いていない証拠だ。

キヨンファはクツクが着地する瞬間を見計らって、
ツインダガー改を両手に駆け出した。

「わっ……！？」

クツクの傍まで駆け寄り、

先手を取ろうと思ったのだが

羽ばたきの風圧を受けて思わず後ずさる。

その際にクツクはキヨンファに気付いた。

向き直ると、耳を大きく広げて鳴き声を上げる。

「くっっ！」

威嚇に怯まず、キヨンファは突進する。

しかし、クツクは身体を回転させて

その尻尾でキヨンファの身体を薙ぎ払った。

「が、あっ！」

吹っ飛ばされ、地面を転がるキヨンファ。

マズイ。早く立て直さなければ。

立ち上がったキヨンファにクツクが突進を仕返して来る。
横っ飛びにそれをかわし、態勢を整える。

イヤンクツクは飛竜の行動パターンを網羅しているが、
隙は多い竜である。

くちばしによるつえばみを数回避けている内に
攻撃を叩き込める状態を発見した。

ツインダガー改でクツクの足を斬りつける。

だが、思うように刃が通らない。

(硬い！ドスギアノスとは比べ物にならない！)

斬りつけてはいるが、表面の甲殻に傷をつけるのが精一杯だ。
クツクはまったく怯まずにつえばみや尻尾での攻撃を続けてくる。

(落ち着け！基本は分かる。)

相手の攻撃をいかに避けるか。

そして自分の隙を作らない程度に、弱点に攻撃を仕掛けられるか)

キヨンファは身体を大きく捻り、
回転して下からクツクの翼膜を斬り上げる。

すると、足への攻撃では出なかった血しぶきが飛び散る。
やはり、翼が弱点だ。

(後は、頭か)

攻撃が当たる度に気分が高揚する。

だが同時に、冷静さも失われていない。

クツクのどこを斬れば有効打になるのか。距離がどの位離れていれば突進してくるのかなどを冷静に分析していく。

これが、キヨンファの長所を活かした戦い方であった。

そう思った瞬間、クツクが近距離から突進してくる。クツクの片足がキヨンファの身体を吹き飛ばした。

(わ、分かるのと避けれるのは別だ　！)

背中から地面に叩き付けられ、一瞬呼吸が出来なくなる。フラフラになりながら必死に立ち上がると、クツクが何やら首を大きく反らせていた。

反射的にキヨンファは横に跳ぶ。

今まで居た場所に、クツクの炎ブレスが炸裂しその辺りに生えている草を焼いた。

「こんな装備で、あんなの喰らえない！」

口に出して叫びながら、クツクに接近し翼を斬る。

だが、血が噴き出ているというのにクツクは怯む様子を見せない。

思い切つてクツクの足元へ潜り込み、飛んできた尻尾をかわす。

そのまま尻尾を振り回し続けるクツク。チャンスと感じたキヨンファは、

双剣をジャランと交差させ、全力を込めた。

いわゆる、『鬼人化』というやつである。

これはアドレナリンの問題だとか、人間が本来持っている普段出す事のなかった力だとか諸説あるが、双剣の使い手はこの技法を扱い身体能力を大幅に上げる。

防御を捨て、敵を斬り倒す事だけを考える。

身体全体で遠心力を使って、双剣をめつたやたらに振り回す。その他の事はお構い無しだ。

この『乱舞』と呼ばれる剣技が、クックの身体に次々と炸裂してゆく。

さすがにこれは堪えたのだろうか。

クックは怯むと、キヨンファから逃げるように飛び立っていった。

ぜいぜいと息を吐きながらキヨンファは鬼人化を解除し、地べたに寝っ転がる。

「はぁ、はぁ……つく」

尻尾でやられた打撲が、今更痛み出してきた。

呼吸も怪しい。

ポーチから応急薬を取り出し、ゆっくりと、だが一気にあおる。

それでも身体に先ほどまでの力は無い。

ツインダガー改を見ると、かなり刃こぼれしている。

あの乱舞は甲殻の硬い足にも当たっていた。

下手な当て方をしたのだろう。

(チェーンブリッツ、持ってこなくちゃ)

だが、この丘をまた降りるのか。

幸いにも、モドリ玉も持って来ていた事を思い出した。それを地面に叩き付けると、緑色の煙が噴き出して気付いた時にはキノコはベースキャンプに立っていた。

(相変わらず変な道具)

モドリ玉は、閃光玉や麻酔玉などの元になる素材玉にドキドキノコという不思議なキノコを混ぜる事によって作られる。

このキノコも食べると体力が回復したり逆に毒になったりもする得体の知れない物だ。

まあ、防具のスキルも然り。

この世の中には不思議な物が蔓延っているので疑問には思えど大して気には留めなかった。

ツインダガー改は一応砥石で軽く研いだが、これだけ刃が欠けていると不安が残る。

チェーンブリッツと弾薬も持ち、フル装備で再度丘へ向かった。

身体はもう一度戦えるか分からないほど疲弊しているが、そうそう休んでもいられない。

モンスターの自然治癒力は高く、しばらく寝ているだけで傷も塞がってしまうからだ。

マーキングスキルではクツクはまだ飛竜の巣とされるエリアに戻ってはいない。

だが、もし休息の時間を与えてしまい持久戦となった場合にはキヨンファに勝ち目はない。

先ほどの丘の頂上を超えて向かいの森へ入る。

足音を殺して進むと、少し視界の開けた場所にでる。そこでクツクはよろよると歩き続けていた。

(何故巢に帰らない?……いや、どの道チャンス)

キヨンファは力を振り絞ると、

これが最後だと自分に言い聞かせてクツクへ走り出した。

クツクがキヨンファに気付き、

威嚇の鳴き声を上げる。

だが、あの大きな耳は閉じたままである。

普通なら再び広げるはずなのだが。

「弱ってる!」

キヨンファの気持ちに余裕が生まれる。

クツクは弱ると耳をたたむ。

それぐらいの特徴は事前に学習済みであった。

ついでみを避けて翼を狙う。

身体を捻った回転斬りが当たりはしたものの、着地の際にバランスを崩す。

攻撃が大振り過ぎたのだ。

そこへ尻尾が飛んできた為、
思わずキヨンファは双剣で受けた。

だが、双剣は防御の出来る武器ではない。

ツインダガー改の刃は欠けた部分からちぎれ飛び、
キヨンファもまともに喰らい地面を転がる。

クックも満身創痍のようで、
追撃をせずに息を吐きながら鳴き声を上げている。

キヨンファは何とか立ち上がると、
最後の力を振り絞って背中中のチエーンブリッツを構える。
それと同時に、クックがブレスの体勢に入った。

(もう、相打ちでもいいかな)

キヨンファはボウガンをクックの頭に向ける。
運がよければ、ブレスを吐かれる前に
顔に直撃させられるだろうか。
この距離なら外すほうが難しい。

と、その瞬間。

「耳を塞げ！」

どこからともなく聞こえてきた声に、
咄嗟にキヨンファは従う。

直後、何かの玉がクツクの目の前に飛んできて破裂。
甲高く大きな音を響かせた。

耳の良いクツクは聴覚をやられ、
ふらふらと身体を揺らす。

ブレスは見当違いの方向へ飛んでいった。

「
っ！」

キヨンファはボウガンを持ち直し、
もう一度クツクの頭へ狙いを定めると
立て続けに引き金を引いた。

装填されていたのは威力の低い『LV1通常弾』だが、
このチェインブリッツには『速射』という機能が実装されている。
LV1通常弾に限り、連射が可能だった。

何発もの弾丸がクツクの頭に直撃する。
近距離から連射を受けたクツクはそのまま前のめりに倒れこんだ。

「あ……っ」

勝った。いや、『狩った』。

あのイャンクツクを、初心者ハンター第一の壁を。
今やっと狩る事が出来たのである。

キヨンファはぺたりと座り込んだ。
半ば放心状態である。

「出来た、私にも」

「そりゃあ、それくらい出来てもらわんと困る」

キヨンファは横の茂みを見やる。

すると、一匹のアイルーがぺたぺたと歩いてきた。

「えっ」

「ん？」

アイルーである。

一般的に多く見かけるクリーム色のアイルーではなく、全身真っ白の毛並みをした綺麗なアイルーであった。

何故、アイルーが単独でこんな所にいるのだろうか。

普通、大型モンスターを見つけようものなら逃げるか集団で立ち向かうかするだろうに。

しばらく呆けていたが、気を取り直す。

もしかしたらこのアイルーはイヤクツクの素材を奪いに来たのかも知れない。

特に手癖の悪い黒毛のアイルーは『メラルー』と呼ばれ、ハンターの持ち物や倒したモンスターの素材を盗んでいくと言われている。

ボウガンをアイルーへ向けると、そいつは呆れたような顔をした。

「何だ、命の恩人に銃を向けるんじゃない」

「恩人？」

アイルーは片手を顔の前で振る。

「音爆弾だよ。」

さっき投げてやっただろう」

「えっ」

キヨンファはまたも混乱した。

何故アイルーが自分を助けてくれたのだろう。

てつきり、シュウト辺りが見かねてやってきたと思っていたのだが。

「あー、申し遅れた。」

私はシュウトのオトモアイルー。

『クー』だ。よろしくな」

オトモアイルー。

それは聞いた事がある。

最近になって生まれた制度で、

獣人モンスターでありながらもハンターを目指すアイルーをハンターに付き添わせるといふ物である。

アイルーは人語を理解出来るので、

人間社会にもさほど苦労なく溶け込んでいる。

中でも、最近ハンターを目指すアイルーも増えてきてるのだから。

そう言えば、アイルーが人語を喋る時には普通語尾に「ニャ」が付く。

このアイルーはそれが付かないという事は、それほど深く人語に精通している証明なのかも知れない。

「あ、ありがとう。」

「おかげで助かったわ」

やっと信じてもらえたと分かったクーは微笑を浮かべた。

キヨンファはアイルーのこんな笑い方を初めて見たので少し驚く。

アイルーとは、もう少し子供っぽい気まぐれネコかと思っていたが。

「分かってくれたか。」

まあ何だ。シュウトの方からちよつと様子を見てくるよう頼まれたんでな。

「死なない程度に見張らせてもらった」

やはりシュウト。

その名前を聞き、不意にキヨンファは暖かい笑みを漏らした。

「しかし、良いのか？」

「ゆっくりしている暇はなさそうだが」

ふと、キヨンファはもう一体の大型モンスターの反応に気付く。

「まだ何かいるの!？」

「ああ。『リオレウス』らしいな。」

「村長が言い忘れてたと聞いたぞ」

冗談ではない。

イヤンクツクだけでも死にかけたというのに、
『飛竜の王』と呼ばれるリオレウスを相手にできるはずがない。
モンスターの強さには個体差があるものの、
チエーンブリッツ程度の下級武器で
リオレウスを倒したという話も聞いた事がない。

「さつさと剥ぎ取って、帰ろうか。
ほら、袋も持って来てやったぞ」

見れば、キヨンファが途中で置いてきた素材袋を肩に担いでいる。
イヤンクツク狩りの前からずっと見ていたのだろうか。

クーの言葉に頷くと、
手早くクツクの甲殻やらの素材を剥ぎ取りにかかる。

「自動マーキングのスキルがあつて良かった……」
まだいくらか素材が残っていたが、
早々に切り上げてキャンプへ戻る。
帰り道、ふとクーがキヨンファのポーチを指差した。

「そついえば、何故閃光玉や音爆弾を使わなかったんだ？」
それを聞かれて、やっとキヨンファは自分の持ち物を思い出した。
まだポーチの中にはアイテムがほとんど手付かずで残っている。

「あ……ええと、イヤンクツクは
道具無しで狩れて一人前だと聞いたからよ」

「フ……そうか」

言ってる事は正しいが、

実際はあれだけ苦戦したのだから苦しい言い訳である。

結局のところ、クーが音爆弾を使わなければやられていただろう。

とはいえ、ただ単に忘れてましたというのも

自分らしくなかった失態なので胸を張れない。

またもや微笑するクーに、

少し恥ずかしそうにジト目で返すキヨンファ。

キャンプに着いた二人は

荷物を整理し、足早に森丘を後にした。

「行ったか」

とある人物が、丘の頂上からキヨンファ達が見えなくなるまで見送っていた。

あれだけ離れれば、リオレウスの縄張りではない。

声からすると、男である。

青いヘルムと鎧に身を包み、素顔は見えない。

これは甲殻種である蟹型モンスター、

『シヨウゲンギザミ』の素材から作られる防具である。

そして彼が担いでいるのは、鉱石により強化を重ねたハンマー。

『激鎚オンスロート』である。

これらの装備は並のレベルでは手に入らない。
オンスロートというハンマーは作るまでに
多大な鉱石と予算を費やさねばならないし、
ギザミシリーズの防具も、所々彩色されている。
モンスターの中でも上位と呼ばれる強力な個体を倒して作った、
『Sシリーズ』の装備の証である。

「さて」

男が振り返ると、

リオレウスが上空から降下してくるのがハッキリと見えた。

全身は赤い甲殻に覆われ、

強靱な足と巨大な火球ブレスを持つ空の王者。

「もう帰ってもいいんだが」

リオレウスは男を見つけると、

降下を止めて上空を旋回し、男に狙いを定める。

急降下しつつ爪で仕留める気なのだろう。

男はハンマーを構えると、

気だるそうに走り回避軌道を取った。

「こいよチキンレウス！」

羽なんて捨ててとっと降りて来い！」

リオレウスは咆哮を上げつつ、

爪を立てて男へ飛びかかって行った。

「では、改めて。

オトモアイルーのクーだ」

「キッチンアイルーのシズカですニヤ」

リビングで食卓を囲みながら、二匹のアイルーは挨拶をした。クーは片手を上げて。シズカは両手を膝に当てておじぎをする。

キョンファとクーが帰ると、

もう一匹のアイルーが食事の準備をしていた。

アメショー柄のアイルーで、名をシズカと言った。

この二匹は、シュウトが前から雇っていたアイルーだそうだ。クーはハンターを目指すオトモアイルー。

シズカは食事を中心とした身の回りの世話をするキッチンアイルーだ。

用事を出かいていたシュウトが帰り、

夕飯の時間になると二人と二匹はリビングに集まった。

今まで使われなかった食卓につき、

シズカが作った料理を囲む。

今日はキョンファの初イヤンクック狩猟記念と称して、

少しばかり豪華な食事である。

大きなミートワゴンには西国パセリや激辛ニンジン、棍棒ネギが添えられ、

シュウトは既に七味ソーセージとヤングポテトをおかずに

ウマイ米をかつこんでいる。

「ウマイ！米だけでもうマジウマイ！シズカまじ天使！」

「ニヤ！まだ挨拶の途中ですニヤ！」

ぺちぺちとシュウトの手を叩くシズカ。

クーはそんな様子を見つつミルクをくいっとあおる。

「まあ、そんなもんだ。

私達は前からシュウトに雇われてたアイルー。

それだけだろう」

ま、これからはよろしく頼む。

と、キヨンファを見やるクー！

「あ、うん。よろしく。

でも、シュウトにアイルーを雇う甲斐性があったって

初めて知った」

キヨンファの言葉を聞いたシズカが

ぴくりを耳を動かしてからボソツと呟く。

「甲斐性ニヤア……」

メスアイルーだけでハーレムを作るのは甲斐性がニヤア……」

むぐ、と口の中に物を入れたまんまシュウトが唸る。

「ニヤ、ジャスミンにイズミにベロアにシヴァに

アニーにナタリーにランマルにリンにヒナタにミイに

アップルにケーナにミスティにフェルミにサイレンに……

私だって、いつ用済みになるか分かったもんじゃないニヤ」

「いや、そうだけど！連れてきたのはお前だけだけど！

あいつらだって契約解除したわけじゃなくてだなぁ　　！」

何だか知らんが、シュウトはまだ雇ってるアイルーが居るらしい。

それはそれで凄いのだが、給料はどこから出てるのだろうか？

それよりもキヨンファが気になるのは

「変態ですか」

ネコハーレムとは、変態の極みである。

いったいアイルーにナニをやらせてるのであるのか。

想像しただけで詳細も聞きたくなくなる。

いや、逆に聞いてみたくもある。

ネコの舌はヤスリのようにザラザラなわけだからして。

「違ぁーっ！？」

ネコが可愛いだけだから！犬よりネコ派だから！」

「好きなのはメスだけだがな」

クーのツッコミに、

シュウトはゴンと食卓に頭を打ちつけた。

返す言葉もないのだろう。

そんな光景が繰り広げられ、

思わずキヨンファは笑みが零れる。

相変わらずシュウトの事はよく分からないが、

まあそれほど悪い奴では無いだろう。

少し安心したキヨンフアは、
食事に手を伸ばした。

「
で、これがナストからの報告書だ」

夕食の後、シュウトの部屋にやってきたクー。
渡された書類をパラパラとめくり、
シュウトは溜息を吐いた。

「やっぱり、ランクは戻れそうに無いか」

「また最初から信頼を積み重ねるしか無いな。
ギルドナイトに消されなかっただけマシというものだ」

「俺の装備は？」

クーは腕を組んでベッドに腰掛ける。
その目はあっけらかんとした表情で、
相変わらず読めない奴だな、とシュウトは思う。

「取り返すよりも、新しく作ったほうが手っ取り早いな。
『それ』も、結構苦労したらしいぞ」

「もうすぐ強化出来るはずだったんだけどなあ」

二人の見やる先には、

青い鎧と薄明るい茶色のハンマーが壁に立て掛けられていた。

「皆に伝えといてくれ。それほど時間はかからないってな」

2章 『諦めと期待』（後書き）

イヤンクツク戦。

この小説を書く時は実際にその装備でゲームをやって、それを元にして書いています。

何やらシュウトを中心によく分からない流れが渦巻いています。といっても、シュウト当人は達観者的に理解しているのですが。

3章 『信用と信頼』

「耳を塞げ！」

どこかで聞いたような台詞。

前のイヤンクック戦を思い出しながら、キヨンフアは両手で耳を塞ぐ。

直後に音爆弾が破裂し、キインという大きく高い音を響かせた。

すると砂中から巨大な物体が飛び出してくる。それはバタバタとのたうち回った後、ひょいと立ち上がりキヨンフアに向き直る。

その生物の形状を説明するのは難しい。

ただ言えるのは、それは竜と名がついていながら魚の様な外見としている。

魚竜種という種類に分類される竜である。

全体は黒ずんだ土色であり、翼はあるが空を飛ぶ為の者ではなく機能的にはヒレと呼ぶべきである。

背ビレや尾ビレも付いていて、

足には水かきが存在する。

顔は平べったく、船のイカリの様な形をしている。

そこにある小さな目が、キヨンファを睨んだ。

魚竜は大きく頭を反らすと、
勢いをつけるようにしてキヨンファへと砂のブレスを吐き出す。

大抵竜というモンスターは、
体内にブレスの為の器官が存在する。

この魚竜のブレスも、飲み込んだ砂を排出する目的と共に
外敵を攻撃する為の方法でもある。

たかが砂のブレス。

キヨンファは最初、そう思っていた。

「……………うえっ!？」

だが、避けたブレスが砂漠の大地に突き刺さるのを見て、
キヨンファは驚き苦い顔をする。

ブレスが砂漠に当たれば、砂塵が舞うと予想していたのだ。

予想に外れ、ブレスは砂の大地に命中すると
巻き上がる砂は最小限に。

そのまま砂地を鋭く貫く様にして突き進んで行ったのである。
あれがもしキヨンファに命中していれば、
かなりの距離を吹き飛ばされたかも知れないし、
ハンターメイルを貫かれたかも知れない。

「どこが雑魚ですか!」

「この程度じゃ大物とは言えんよ!

上位ガノス以上だ、大物つてのは!」

キヨンファの文句にそう返したシュウトは、
黒刀【式ノ型】を抜き放ち魚竜の。
『ドスガレオス』の首をめがけて振り下ろした。

「ドスガレオス、ですか」

数日ほど前。

ポツケ村の自宅で話を聞いたキヨンファは
とりあえず悩む素振りを見せた。

キヨンファの部屋に全員が集まり、
今後の予定を会議していたのだ。

「まあ、まずはそんなところだろうなあ」

シュウトが話を続ける。

「採取も良いが、大型モンスターを狩ってなんぼの世界だ。

金は俺の『つて』でどうとでもなるかもしれんが、

素材や経験、信頼と実績は現場に出ねえと」

そう、先日イヤクツクを狩ったキヨンファだが、
その後特に大型モンスターの依頼を受ける事無く
採取だとか採掘だとかをしていた。

農場の拡張もだ。

まあ、それにはもちろん理由がある。

イヤンクツク戦でツインダガー改は完全に折れ、使い物にならなくなってしまう。

その為、新しく作り直す為に雪山や農場で鉱石を採掘していたのである。

シュウトはより強力な双剣である

『食いしん坊セット』を勧めたのだが、

外観がナイフとフォークなので却下された。

その双剣はいわゆる『ネタ武器』と呼ばれている。

明らかに見た目が武器ではなく、

飾りのような扱いをされている。

他にもただの扇子の様な双剣、

巨大な骨付き肉のハンマーなどがあり

これらの武器は実際の性能的にもあまりよろしくない。

呼び名の通り、ネタの為の武器なのである。

だが、この食いしん坊セットに限っては

見た目はただのデカイナイフとフォークではあるが、

双剣としての性能は下級ハンターにとつて

そこそこ頼れる物だとシュウトは知っていた。

ちなみにシュウトはそれを所持している。

生産への素材は、アイルー食券・並という

アイルー族が利用するチケットを必要とする以外は

鉄鉱石とポポなどから取れる獣骨で簡単に作れる。

シュウトもキヨンファの様に各種武器を扱えるよう、

双剣を含む様々な武器を集めていたのだった。

ただ、アイルー食券・並をシズカにねだった為、お返しに魚を釣って来る事を約束させられた。その日の内に『サシミウオ』を釣ってあげたのだが、前に居た街を発ってからしばらくシズカに構ってやれなかった事もあったので

それに気付く理由にもなった。

そして完成した食いしん坊セットも、キヨンファがこの前新しく作った双剣を上回る性能に仕上がった。

(それでも、見た目って大事なんだなあ)

ネタ武器を好むハンターも居れば、かつこいい武器を手にする為だけにハンターになる輩もいる。武器って奥が深い。

改めてそう感じるシュウトであった。

ちなみに、ツインダガー改から強化できる『インセクトオーダー』という双剣がある。

シュウトの黒刀と同じで、甲虫モンスターの素材を使った物だ。虫と侮るなかれ、高い斬れ味を誇る武器である。

そちらへ強化する事もキヨンファに勧めたのだが、何故か却下された。

虫武器が嫌いなのだろうか？

と、言う訳でも無く。

キヨンファとしてはただ単純にシュウトと同じ虫系の武器を使いたくなかっただけである。

何だか真似をしているみたいで、二人で同じ系統の武器を使っているのを想像すると気恥ずかしい感じがした。

当面はツインダガー改を別方面に強化し、早い内に『オーダーレイピア』という双剣を手に入れようと思っている。

武器の強化とは不思議な物で、

途中で見た目が大きく変化したり属性が変わったりする。

先日キヨンファはツインダガー改をオーダーレイピアに強化する為の通り道である

『デュアルトマホーク』へ強化したのだが、

それは今までの剣状ではなく

二つの斧となっていた。

同じ双剣であるのは間違いないが、

形状が大きく変わったので当然扱い方も異なる。

とはいえ威力は増しているし、

万能型のハンターを目指すキヨンファとしては

どんな武器の扱いもこなせるようになる必要があった。

「分かりました。デュアルトマホークも試してみたいですし、

砂漠にも行っておきたい」

「なら決まりだな。準備にかかろう」

方針が決まれば、後はそれに向けるのみである。

シューウトはさっそくリビングにある共有のアイテムボックスを開けて

道具類をチエツクする。

(それにしても、そろそろキヨンファの敬語もどうにかならんかな……)

組み始めてまだ何ヶ月と経たないが、キヨンファが未だに敬語を使うのに違和感を感じるシュウト。クーやシズカとは普通に喋るのだ。それは相手がメスでアイルーだからかも知れないが。

「それで、ドスガレオスってどんなモンスターなんです？」

シュウトの思いを余所に、キヨンファが尋ねる。

シュウトは溜息を吐くと、振り返って言い放った。

「ググレカス」

シュウトが言うには、自分で情報を集め知識を蓄えるのもハンターの仕事の内なんだそう
な。

なのでとりあえず、二人して先輩ハンターの所へ向かった。シュウトは前まで高ランクハンターだったので、ドスガレオスなど何頭も狩った事があるのだが、キヨンファ自身に行動させた方が自分の為になると判断した。

まあ、元々キヨンファも下調べはかかさなないタイプでシユウトに言われずともやるつもりであったのだが。

「ふむ、ドスガレオスカ。

まあ単純な実力で言えばそれほど脅威ではない。

ただ、奴は砂漠に潜り砂の中を魚の様に泳いでいる。それが魚竜と呼ばれる所以だな。

奴を地上に引き出す方法は、砂上の獲物を察知する為の聴覚を刺激する事だ。

近くで音爆弾や小タル爆弾を爆発させればいい。

弱点は背ビレや腹、首だ。

泳いでる最中に背を攻撃するのは難しいが、地上に出ればその動きは緩慢だ。

弱点を狙っていけば君達でも倒せるだろう」

すらすらと特徴と対策を並べ立てていく先輩ハンター。

さすがに、ハンターを引退したとはいえ経験と知識は失われていない。

キヨンファは聞いた情報をしっかりとメモする。

どうやら、それほど強力な相手では無いらしい。

「……はい、ありがとうございます。

とても参考になりました」

礼儀正しく返すキヨンファ。

シユウト相手とはえらい違いである。

「うん。油断しないで冷静に行けば大丈夫だ。

……シユウト君もいるしな」

何やら意味ありげな目つきでシユウトを見る先輩。
シユウトは軽く笑って返す。

「ハハ、あまり買い被らないで下さい。

じゃ、どうもでした先輩……あれ？」

そういえば、とシユウトは思いつく。

「先輩、今更ですけどまだ名前聞いてませんでしたっけ」

「ほ、ほんと今更だなあ……」

先輩は苦笑いをしてから、
気を取り直した様子にした自分の名を告げる。

「私はアルスト。

アルスト……マジョピーだ」

「マジョ ……!?!」

何だか間の抜けた名字に、
思わず吹き出しそうになるキョンファ。
慌てて表情を整える。

「笑わんでくれよ！

名字はどうしようもないだろう」

生まれてからずっとネタにされてきたのだろう。

半ばもう慣れたという顔をするマジヨピー。

一方シュウトは、別の意味で驚いた顔をしていた。

「あの、マジヨピーさん。

兄弟っていますか？」

「だから名字で呼ばないでくれって！

え、兄弟？家は子だくさんだから、兄弟姉妹と全部居るが」

やっぱり、という顔をするシュウト。

「ああ、じゃあコソット村に居るハンターはお兄さんですか。

自分、前にあの村に居た事があるんで」

「何！？兄さんに会った事があるのか！？」

「そりゃあ、マジヨピーなんて変な名字

そうそうありませんでしょう」

ほお、とアルスト・マジヨピー。

「世界とは狭い物だなあ。

兄さん、どうせ偉そうな事言っつてて実力が伴ってなかったらどう

「いや、それなりでしたよ。

片手剣を強化してたらいつの間にか双剣になったとか言っつてまし
ただ」

「相変わらず知識も無いんだなあー」

何やら意外な所で接点があったらしい二人。

話に加われないキヨンファは自分の居場所がなさそうに佇んでいる。

「つと、じゃあそろそろ俺達は行きますわ。

ココット村に寄る事があったらよろしく言うっておきますよ、

マジョピーさん」

「アルスト！アルストと呼べい！」

シュウトはからからと笑いながら、

キヨンファを連れてマジョピーに後ろ向きに手を振り集会所の方へ向かった。

「え、あんた達もドスガレオス……」

次に話を聞きに行ったのは、

何故かシュウト達をライバル視している女ハンターだった。

「そう。何か注意点とか対策とか知らないかなくて」

シュウトが言うと、女ハンターは

胸を反らせて言い放った。

「ま、聴きたいってんなら教えてあげなくもないけど。

アイツはまず、砂に潜ってるのよ。

だから音爆弾は必須ね。

それが無いと、ひたすら上がってくるのを待つだけになるわ。

あつつい砂漠の中で上がれ〜上がれ〜って

追いかけているから見ただけなのは辛いなんてもんじゃない。

後、周りの『ガレオス』にも注意ね。

ドスガレオスばかりに気を取られてると、

横からビヨーンと飛び出してきて体当たり喰らうのよ。

それがまたウザくてウザくて

」

そこまで言って、シュウトとキヨンファから

ジト目で見られているのに気付いた。

ハツとして声を荒げる。

「べ、別に私がそれで負けたとか、

そういうんじゃないんだからね！」

「オーケーだ、ツンデレ。

よおく参考になった」

キヨンファはメモに書き足しながら、なるほどと思った。

アルスト先輩が言わなかった初心者目線での体験談も役に立つ。

こうやって色々な人から情報を集める事も大切なのだろう。

「あ、そういえばあなたの名前、聞いてませんでしたけど」

キヨンファが思い出した様に言う。

この女ハンターの名前も聞いていなかったのだ。

実力も近いみたいだし、これから共に狩りに出る事もあるかも知れない。

名前ぐらい知っておいてもいいだろう。

「ふん！馬鹿にして！」

「知りたければ私を超える実力を持つてから来なさい。
そうすれば、教えてあげない事もないわ」

馬鹿にしてるのはそっちだろうと、
キョンファは心の中でツツコミを入れる。

「ドスガレオスに負けてるお前に言われてもなあ」

シュウトの方は、ハッキリと口に出して突っ込んでいた。

「じゃあ、俺のギルドカードをお前に見せよう」

シュウトが言うと、女ハンターは焦った顔になる。

ギルドカードとは、ギルドに登録しているハンターの
身分証明書である。

これには名前やランクの他、クエストを受けた回数や
狩ったモンスターの数などが書かれる。

つまり、これを見ればそのハンターが

どれほどの実力者なのかが一目瞭然というわけだ。

そしてギルドカードは普通、交換して見せ合う物である。

相手のカードだけ見て自分のを見せないのは

ハンターとしてマナーの悪い行為だ。

とすれば、この女ハンターは

自分のギルドカードが見られれば

名前だけでなく狩る事の出来たモンスターまで

全部知られてしまうという事だ。

「わ、分かったわよ！」

「言えはいいでしょ、言えば。」

「イネア・ラジエナオーエよ！」

観念したようにイネアは言う。

ギルドカードを見せないという事は、

逆に自分の戦績が芳しくないという現われであるのだが、
それには気付いているのだろうか。

「なんだ、ここでマジョピー妹とか言ったら面白かったのに」

「なんでよっ!?!」

すかさずツッコミが飛んでくる。

そしてキヨンファはまたもやノリにノれず
しょぼーんとした顔をしている。

「まあ何だ。助言は参考になったよ。」

「ありがとな、ツンデレ」

「名前で呼びなさい名前です！」

先ほどのアルストと似たような会話をしながら、

またもや後ろ手に手を振りながら集会所を後にした。

(情報は得た。雑誌でも調べた。

事前学習は完璧、と)

アイテムボックスからアイテムを取り出しつつ、半ば既に勝った気にいるキョンファ。

シュウトはそんなキョンファを見て少し心配そうな表情を浮かべる。

(クツクに勝ったから自信がついたのは良いが、油断してくれるなよ)

「余裕そうだな。あいつがいつまでも新人だと思ってたら、いつか本当に追い越されるぞ」

不意に、クーに言われて気がつく。本当に油断していたのはシュウトの方である。

下位のドスガレオスなど簡単に狩れると思っっているが、前にドスファンゴに殺されかけた事を考えるとたとえ下位でも慢心は出来ない。

装備も以前使っていた上位装備ではなく、黒刀にバトルシリーズである。

「そうだな。」

「こっちも強い引き締めて行くか」

シュウトは部屋に戻り、

自分の分の音爆弾やクーロードリンクを用意する。

ちらつとギザミメールとオンスロットを見たが、

何事も無かった様に黒刀とバトルシリーズの装備を身にまとつ。

(初心忘るべからずってな)

本来なら、一番質の良い装備をするべきであろう。

下位装備で狩りに出て死んだとあっては元も子もない。

だが、自らの戒めとして。

なおかつキヨンファに合わせる為、

過去ではなく今現在の行為に見合った装備を選んだ。

思えばランクを落とされる以前まで、

猟団の仲間達と狩りをする事はあった。

だが、それで太刀を初めとする武器の扱いが直るわけではなかった。

もちろん自分の武器の扱い方を注意された事はある。

だが、それを見ても仲間達はシュウトを見捨てる事をしなかった。

キヨンファもそれと同じく、

例え自分の太刀の扱いが乱暴でも

パーティーの解散を提案するなどするはずがないと思っていた。

キヨンファの行為は逆に、シュウトを更生へ導いたのである。

(なるほど。まだ成長するか)

クーは今のシュウトと昔のシュウトを比べて、そう感じていた。

奴とて素人ではなく、元はG級ハンターである。

G級のモンスターは手強い。

たとえイヤンクックでも、

下位や上位のリオレウスを凌ぐ攻撃力とタフさを持っている。

シュウトは一人でG級のイヤンクックを何とか倒せるというレベルであるが、

頭の固さや雑な動きを更に変える事で

さらに上へ行けるのではないか。

少なくともクーにはそう見えた。

キヨンファもキヨンファで、
冷静さと攻撃的な面をあわせ持つ才能のあるハンターである。
この二人のコンビは意外な結果を生むのかも知れない。

「おーし行けるぞー」

準備を完了し、部屋から声を上げるシュウト。
キヨンファも用意は出来たようだ。

「よし。今回は私も行くぞ」

クーがそう言うと、キヨンファが不思議そうな顔をする。

「『今回は』って?」

「まあ様子見という事だ。

人間二人のコンビを邪魔するつもりも無いし、
地域によっては人間パーティーにアイルーを連れる事自体
禁止されている所もある。

この辺りでは大丈夫だろうがな」

「そもそも、パーティーが4人制限って事自体が間違ってる。

ギルドもそういうところ、宗教的な意味抜きでやってくればなあ」

シュウトが言ったのは、いわゆる『ココットの英雄』の伝説である。
5人パーティーで狩りに行ったココットの英雄と呼ばれる高名なハンターが、

その狩りで恋人であったハンターを失った事から

ギルドは一部の例外を除き5人以上でクエストに出る事を認めてい

ない。

他にも様々な規則は存在する。

そういう物は徐々に見直されていつているのだが、その辺はちゃんとしてもらいたいとシュウトは思っていた。

「ニヤ。では皆さん行つてらっしゃいませニヤ。

留守は私が適当に預からせていただくニヤ」

「適當つて……」

シュウトは苦笑いする。

昔は真面目と礼儀の塊みたいだったシズカだが、シュウトと付き合うにつれていくらかくだけた様子だ。

(……私も、感化されかけてるかも知れない)

キヨンファは、密かにそう思った。

それから三人は目的地の砂漠へ向かう。

ちなみに、シュウトはアイルーをほぼ人間扱いしているので、今回のパーティーも『三人』という数え方をしている。

今回向かう砂漠。

『セクメーア砂漠』と呼ばれる地域は

ポツケ村からかなり離れた場所にあった。

前回キヨンファが行った森丘も相当だが、今回は到着までに数日を要した。

恐らく、ポツケ村を中心とすれば
地続きで行ける場所で一番遠いのではないか。

モンスターが多く生息する場所は限られている。

そもそもモンスター自体、生態系を破壊しないように
ギルドが数を管理しているのだから、

正式な手続き抜きで狩りを行う事は少ない。

少ない、というのはつまりところギルド自体が国に認められた機関
ではないからだ。

それどころか、王国政府はギルドを敵視している様子まである。
腕の立つハンターが集う、

ギルドという武装組織の扱いに困っているとの噂もあった。

法的に認められた機関ではない為、

それに所属しないハンターも少なからず存在する。

ギルドの規律を守る必要が無い為、

モンスターやその卵などを乱獲して売り飛ばすのだ。

そのようなハンターはギルド直属のハンターである

『ギルドナイト』によって逮捕、またはその場で肃清される。

ギルドは法的機関ではないにしろ、

実質国立組織と同等の権限を持っていた。

今回行く事になったセクメーア砂漠は、

ギルドの管轄にある狩り場である。

そこら辺の近所で狩りをするわけではない。

ポツケ村の村長を通して、正式な依頼として向かうのである。

やりたいからと言って、近場の雪山で
ドスギアノスやドスファンゴらを狩り続ける事は出来ない。
基本的には、それらモンスターによる被害などが発生しての
依頼という形でなければ狩りには出かけられないのだ。

だからハンターはわざわざ遠方まで足を運ぶ。
狩りを行っている時間より移動の時間の方が長いくらいだ。

前回キヨンファが行った森丘も相当な距離であった。

道中が暇な物である事を知っている三人は、
途中立ち寄った村や街で本などを買って暇つぶしにする。

それらを読み終える前に到着出来た三人は、
さっそくベースキャンプで狩り支度をする。
支給品の入ったボックスをチェックし、
その中にあったクーラードリンクを飲み干す。

砂漠や火山といった場所は当然気温が高い。
通常では熱気に数十分も耐えられないであろう。
また、砂漠には昼と夜とで大きな温度差があり、夜は逆に冷える。

こういった場所には体温を通常に保つ為のアイテムが必須となる。
代表的なのが『クーラードリンク』と『ホットドリンク』だ。
雪山ではマフモフシリーズの防具が防寒になり
ホットドリンクを必要としなかったが、
暑さをやわらげるような装備を二人は持っていなかった。

対策ではあるものの、それだけで砂漠の暑さが
完全に消える物ではない。

二人は汗を拭いっつ、ドスガレオスが居るエリアに向かったのだっ

た。

黒刀がドスガレオスの首に突き刺さる。

この魚竜の首は他の部分に比べてだいぶ柔らかい。

動きもそれほど素早い物ではないので、

ここを集中的に狙えば短時間で狩れるはずだ。

「キヨンファ！反対側！」

シュウトが言うや、キヨンファはドスガレオスの右側に回りこみ、その首をデュアルトマホークで斬りつける。

斧状の刃で首を叩き斬り、

柄の先端にある突起で突き刺す。

弱点を集中的に狙われたドスガレオスは、

怯んだ後に砂漠の中へ飛び込む。

そして背ビレだけを見せて砂中を泳ぎだした。

「もう一丁！」

シュウトが背ビレの近くに音爆弾を投げ付けると、

再びドスガレオスが飛び出してきて

陸に上げられた魚の様に飛び跳ねる。

いや、一応『魚竜』だからしてこの表現は比喩ではないのだが。

「たたみかけるぞ！」

暴れ回るドスガレオスに、
るくに狙いもつけずに斬りかかるシュウト。
ただし、尻尾の辺りに陣取っており
首付近に居るキヨンファの動きは阻害していない。

ドスガレオスが立ち上がると、
キヨンファは一度離れる。

それを見計らって、シュウトは太刀を大きく振りかぶって
遠心力をかけ、右上段から斬り下ろした。

双剣使いの技が鬼人化なら、
太刀使いの技は『気刃斬り』である。

刀人一身。
練り込まれた気と共に刀と一体になり、
流れる様な剣さばきを連続して相手に叩き込む。

斬り下ろしから返す刀でもう一度。
そして力を入れて大きく踏み込み
右、左、とどめに全力で縦斬りを放つ。

それを喰らったドスガレオスはたまらず悲鳴を上げ、動きを止める。
その隙を逃さず、キヨンファが首に近づいて斬り上げた。

砂上では敵わないと判断したのか、
ドスガレオスはまたもや砂中に逃げ出そうとする。

「ほいつ、と」

潜った瞬間、今度は火薬による爆発音がドスガレオスの耳をつんざ

く。

距離を開けて二人の連携を見守っていたクーが、小タル爆弾を投げ付けていた。

「上手い……！」

キョンファが呟きつつ、双剣を擦り鬼人化を発動させる。首下で乱舞を叩き込み、シュウトはそれを邪魔しない尻尾付近で斬り続ける。

今度は、ドスガレオスが起き上がる事は無かった。

「まあ、それほど手強くはなかっただろ。

音爆弾が無かったら苦戦しただろうけど」

剥ぎ取りをしつつ言うシュウト。

剥ぎ取った素材を近くに隠しておいた荷車に載せる。

ギルドに要請すればまた別個に輸送用の車を回してもらえる。

馬車であったり、アプトノスやポポが引く車であったりだ。

だが今回は生きたままの捕獲でも無い。

自分で出来る分は自分でやるのがハンターである。

「……まあ、そうでしょうね」

そう返すキョンファも、狩りの順調さに驚いていた。

確かに、今まではシュウトの太刀の扱いが悪かった。

だが、少し意識するだけでこれほど大幅に変わる物なのか。

事前に特徴を調べていたとはいえ、キヨンファ一人ではこれほど楽には勝てなかっただろう。元々一人でも強力であったシュウトの太刀に、キヨンファの相手の弱点を狙った双剣も加わる事で上手すぎるくらいにドスガレオスの体力を削れたのだ。

今までキヨンファは自分一人で何でもこなせる万能なハンターを目指して来たはずだった。

だが、実際この様な結果が出ればパーティーでの連携にも魅力を感じる。

それと同時に、シュウトの事を見直さざるをえない。少なくとも、以前感じた素人臭い立ち回りではなかった。さすがにラオシャンロンを倒したというのは信じられないが、それなりに実力のあるハンターだったというのは真実かも知れないと。

「シュウト、今の立ち回りは本気だったか？」

不意に、周囲を警戒していたクーがシュウトの傍にやって来る。

「え？少なくとも真面目にはやったよ」

それを聞いたクーは、そうか、とだけ返して二人の傍を離れる。

(収穫もあれば問題もある、か)

クーが気付いたのは、シュウトとキヨンファの連携はまだ完成されてない。

それでもこの戦果を叩き出せるのなら、このまま組み続ければ二人はG級ハンター並の力を手に入れられるだろう。

思えば、シュウトと獵団の仲間の連携は正確には連携と呼べる物では無かった。

シュウトが独りよがり過ぎたのだ。

仲間は誰もがシュウトを立てて、

他の誰かが狩りの主役になる事は無かった。

それ故、獵団の仲間達は個々の実力を発揮出来ていなかった。

シュウトもそうである。

1 + 1 は 2 になる。

今まで単純に1だったシュウトは、

キヨンファと組み連携を覚える事で

それを3にも4にもする事が出来るはずだ。

ただし、シュウトの自己中心っぷりはまだ

完全に消えたわけではなかった。

今回の戦闘で、シュウトはキヨンファが入り込む場所を空けた。

それがキヨンファの為かというところでもない。

邪魔をしない様に動いたのは事実である。

だがそれはどちらかといえば『自分の動きを邪魔されない為』だとか

『またキヨンファが解散など言い出さない為』であり

心の底からキヨンファの事を思っていたわけでは無い。

クーが見るに、シュウトはそれに自分では気付いていないだろう。

多分、無意識の内である。

だとすればこの二人、

このまま狩りを続ければ危うい場面に出くわすはずだ。

(やれやれだ。これが私の役目なのか?)

クーはそつと溜息を吐く。

相変わらずこの男は問題呼び込む奴だ。

どんなもんかと黙って見ていれば、

相変わらず太刀の扱いも力任せである。

本来太刀とは、威力よりも連続攻撃を主体とした武器なのだ。

先ほどの気刃斬りも、流れる様な途切れない攻撃の為にある技だ。

だがシュウトはあれを単純に必殺技と見ている。

そうではないのだ。

気刃斬りは決して単体で使う必殺技では無く、

通常の斬撃に織り交ぜて扱う連係技だ。

ここぞという時に当てればいい物では無い。

重心の移動だとか、そういった技法もまだまだ稚拙だ。

本人はまったく意識していないのかも知れない。

前にクーは有能な太刀使いを目にした事がある。

人の身長ほどもある長大な太刀を軽々と振るい、

縦斬り、突き、斬り上げと一瞬にして数回の攻撃を竜に叩き込んだのだ。

まさに太刀の真髄である連撃は、見ていて美しくもあった。

その時はシュウトも居たはずなのだが、

あれを見てもまだ理解していないのだろうか。

とりあえず全力でぶった斬れば良いという、その発想はどうにかならない物か。

(元々向いてないのかもしれない)

シュウトは様々な武器を扱う。

中でも使用回数のもっとも多い武器が、ハンマーであった。

前に、何故ハンマーを主に扱うのか聞いたことがある。

それにシュウトはただ一言、こう答えた。

「早いから」

要するに、扱いの難しいガンナーだとか、

威力が高くとも動きの鈍い大剣だとかは向いて無かったのだ。

シュウトは罾や爆弾などの道具もあまり使わない。

手っ取り早くハンマーで叩き潰すのが

彼のハンタースタイルである。

今はこれといったハンマーが無いので、

黒刀を使っている。

別にまったくの素人というほどでもないが、

どの武器でも「とりあえずぶん殴ればいい」という発想がある為ハンマー以外の武器は上手く扱えていないのが現状であった。

クーの苦悩も露知らず、

シュウトとキヨンファは剥ぎ取りを終える。

「うーし。じゃあ一旦戻るか」

シュウトが荷車を引いてキャンプに戻るうとする。

「一旦つて？」

キヨンファが聞くと、

シュウトはあっさりした顔で返した。

「もう一匹、ダイミヨウザザミのクエストも受けてきたから」

「は!？」

驚くキヨンファと何やら笑顔のシュウトを見て、

クーはもう一度溜息を吐いた。

(だめだこいつ。早く、何とかしないと)

「たつたら、たらら、たつたら、たらら、

たららつたららつたららつたららつ

たつたつたつた……っソイヤ!

上手に焼けました〜ってなもんでえ!」

ベースキャンプに戻った三人は、

とりあえず食事を済ませる事にした。

携帯食料だけじゃ物足りなかつたので、

シュウトが人の胴体ほどの大きさがある草食竜の卵を失敬してきて、それにさつと火を通してスクランブルエッグにした。

何故か持ち込んでいた塩と胡椒で味付けをし、
こちらもち込んでいたブルファンゴの肉でこんがり肉を焼いた。

ちなみに、今回使った『肉焼きセット』は大きめの肉を焼く為の道具である。

まず石のかまどがあり、その両脇に二又の支柱が伸びる。

その支柱に骨付き肉を載せ、骨の端っこを取っ手にある穴に入れ固定する。

それから取っ手を回し、肉を回転させるのである。

そうやって肉を炙るのだが、

通常の肉焼きセットはそれ以外の事は出来ない。

なのでシュウトは別個に鉄板を用意し、

それを取り付ける事によって調理出来るバリエーションを増やした。

卵もこれで調理したのだ。

なかなか便利に仕上がった物であり、

既にギルドの方には肉焼きセットの改良を具申している。

肉焼きセットに備えていたナイフとフォークで

卵と肉を人数分に切り分け、

これまた備え付けられていた皿に取る。

心なしか、シュウトが自分の分だけ量を多く取っている気がする。

ブルファンゴの肉をはふはふと頬張り、

満足そうな顔をするシュウト。

(こいつの国ではどんだけ食事が大切なんだ　?)

そう思いつつも、

シュウトにならない肉をぱくりと口にするキヨンファ。

何だか知らないが、シュウトは食べる事が好きらしい。思い返せば、レックスにやられて目覚めた時からずっとそうだった。

とりあえず狩りの後で腹が空いていた三人は、特に会話も無く食事を続ける。

卵と肉の大部分が三人の胃へ消えていった頃に、クーが思い出したようにキヨンファに尋ねた。

「で、ザザミは現れたか？」

「いや、まだね。」

「どこにも反応が無い」

キヨンファは意識を集中させ、自動マーキングのスキルを発動させるがこの狩り場に大型モンスターの反応は無かった。

「まあ、食い終わって少し休憩したら出てきてくれればいいんだけどね。」

「下準備も必要だし」

「ならなんで黙ってたの　！？」

シュウトが言うには、

このクエストはドスガレオス狩猟であった。だが、それと同時に甲殻種モンスターである『ダイミヨウザザミ』の狩猟依頼も受けてきたのだとか。

「いや、どうせ砂漠まで行くんだから

ついでにやっておこうと思って」

しれ顔でそう言ったシュウトの尻に
キヨンファの蹴りが炸裂したのが先ほどの話だ。

「まあいいじゃない、どうせだし。

じゃあ、作戦会議のお時間だ」

シュウトはナイフとフォークをカチャリと置くと、
ダイミヨウザミの特徴を語り始めた。

「あー、まあ、ザザミってのはな、ヤドカリとかカニみたいな奴だ
な」

語り、終了。

「……それで？」

明らかに怒気を帯びたキヨンファに、
シュウトは苦笑いする。

「冗談。まだあるよ。

えーと、モノブロスの頭の骨を被ってる。

それを上手くぶっ壊せばモノブロスの角が手に入るってわけだ。

ただ、奴は砂の中からいきなり角突きをお見舞いしてくる。

潜ったら走り回って逃げるしかないな。

地上でも硬い爪で攻撃してきたり……

他には水ブレスとか、ジャンプして押し潰したりとか」

「まあ、それぐらい知ってますけどね」

キヨンファがあまりにも得意げにそう言ったので、
シュウトは全力でキヨンファをどつきたい衝動に駆られた。
ええい、こいつもイイ性格してるな、と。

そういえばドスガレオスの事も、

実はキヨンファは事前に知っていたのだ。

現場の声を聞く為にアルスト先輩やイネアに確認を取ったのであり、
大まかな特徴は情報誌などで前々から調べてあった。

イヤクツク戦も、それで臨んだのだ。

だとしたらダイミヨウザミの事を知っていたとしても不思議ではない。

「お前はホント……まあいい。

後は、身体を縮こまらせてガードしたら
聴覚に頼ってる証拠だから音爆弾が効く。

弱点は基本、頭を狙え」

「じゃあ、私が頭を？」

「いや、キヨンファは手数が多い双剣だからな。

脚の関節を重点的に狙えば転ばせられるだろう。

俺は正面から頭、もしくは反対側の脚か。

突きで身体本体を狙うつてもありだな」

ハンマーだったらヤドを狙えるんだが、と
最後に付け足す。

ともあれ、大体の作戦は決まった。

後はザザミがやって来るのを待つのみである。

それまでは持つてきた本でも読みながら
時間を潰す事にした。

「あつっう……クーは、暑くないの？」

ベースキャンプのベッドに寝転がりながら、キヨンファが言う。
ここは日陰もあるのでクーラードリンクを飲むほど辛くは無い。
だがそれでもかなりの暑さであるし、
クーラードリンクを飲んだとしても砂漠のエリアでは汗が出るほど
だ。

「アイル一族は適応力が高いからな。

暑い事は暑い、動けんほどじゃない。

クーラードリンクも少し飲んだしな」

ここへ着いてからずっと、

クーは相変わらず涼しい顔をしている。

こういう時ばかりは、他種族の特性がうらやましい。

「……………」

キヨンファはしばらく唸ると、
意を決した様に起き上がり
シュウトに声をかける。

「シュウト、ちょっと外回って来ますけど、

あなたはここから動かないでおいて下さいね」

シュウトは新しい技でも研究していたのか、振り回す黒刀を止めて振り返った。

「ああ？まだザザミいないだろ？

だったら体力温存しとけよ。

途中で出くわしても、ペイント持って来て無いから俺には分からんぞ」

正論で返すシュウトだが、

何やらキヨンファは目を逸らして歯切れ悪く答える。

「あー、だからそのー、

そこら辺は上手くやりますから、

とりあえずあなたはここに居てください。

はぐれたりしたら困りますし。そう」

絶対に動かないで下さいよ！と最後に付け加えてから

キヨンファはベースキャンプを後にした。

向かう方角は南側の砂漠エリアではなく、

岩場の多い北側の方面だ。

しばらくたたずんでいたシュウトだが、

ポーチの中身を確認し装備を整える。

「動くなと言っていたが？」

半ば軽蔑侮蔑の目で見るクーに、

シュウトは胸を張って答えた。

「俺だぞ」

にやりと笑いながらそうとだけ言い残し、
キヨンファの後を追うシュウト。

「あー、そうか、そうだな。

お前はそういう奴だー。うん」

後ろから聞こえたクーの言葉が、
逆にシュウトの背中を押したのだった。

「
ふう」

キヨンファはセクメーア砂漠のエリア7と呼ばれる場所に居た。

ここは開けた場所ではあるが、
砂漠地帯と比べて気温は低い。
ちょうど良い具合の場所である。

このエリアには川が流れており、
キヨンファはその川に浸かって水浴びをしていた。
繰り返す、キヨンファは水浴びをしていたのだ。

もちろん全裸であり、
ハンターシリーズの防具はそこら辺にゴチャッと脱ぎ捨てられている。
る。

実に運良く、ここには現在ガレオスは入り込んでいない。
草食竜のアプケロスが草をはんでいるが、

普段縄張り意識が強く攻撃的なアプケロスも何故か都合良くおとなしいものであった。

他にも水場は二つほどあったのだが、片方は冷える洞窟。

もう片方は砂漠地帯にあり、肉食竜のゲネポスやメラルー達が居る可能性がある。

とすれば、水浴びを出来る環境はここしかなかった。

「るるるるるるるるるるるるるるるる」

キョンファはラオシャンロンでも出てきそうなメロディを口ずさみながら

肩まで水に浸かり、身体を手でこする。

水の中でそのしなやかな肢体が伸び縮みする。

つま先から上へとなぞる様にその手を動かして行き、それが胸まで到達すると、ほう、と溜息が漏れた。

自らの身体を抱きしめる様にしつつ、

上半身を水の上上げてその身を陽に晒す。

白く滑やかな肌が光を受けて黄金色に輝いた。

柔軟体操の要領で、腕を横に伸ばして引っ張る。

んー、と目をつむりながら息を吐き、

意図的では無いにしろ胸を隠すようなその姿勢が見るものに可愛げな品性を感じさせ、

同時に劣情をも催させる。

それから大きく伸びをし、

今まで隠れていた胸をさらけ出す。
大きさはそれほどでもないが、
形の良いそれがふるりと揺れた。

背中の方も洗おうとしたのだが、
垢すりやタオルが無い為手が届かない。

右手は背中はやや上、

左手を腰の辺りまで回して何とか洗おうとするのだが、
その体勢もまた悩ましげな恰好になってしまっている。

さて、ここまでは良い。

だが、髪を洗うにはどうしたものかと考える。

普段はハンターヘルムにまとめているが、

キヨンファの髪は肩まで伸ばしたセミロングだった。

これだけ長さがあると、単に水を被れば良い物では無い。

もう一度肩まで浸かると、

身体を傾けて綺麗な黒髪を指でくすぐる。

その様は女神がハーブを弾いているのを連想させた。

かと思いきや、面倒になったのか

水に頭を突っ込んでガシガシと洗い始める。

ぷはっ、と水から勢いよく顔を上げ、

身体を大きく反らせた。

それだけでも、真っ白な身体が弾ける様に美しく表されているのに、
今度は両手を胸の前まで持って来て

子犬の様にふるふるとふるえだしたのだからたまらない。

「はふう」

普段、他人の前では聞かせない様な息を吐く。
両手で後ろ髪をきゅっと絞っていると、
いつの間にか傍にやって来たアプケロスと目が合った。

(……………むー)

相手はモンスターであるが、
裸体を見つめられていると何だか妙な感じだ。
視線でくすぐられている様な気分である。

それと同時に、見られる事への快感もせり上がって来た。
何気なく、アプケロスの前にポーズを取ってみる。

最初は背を向けて右手は頭、左手は尻を撫でる様に置いて振り向く
妖艶たるポーズを。

次に、横を向いて両腕を頭の後ろに組み
わずかに身体を反らしつつにこりと挑発的に笑う
艶やかで若々しいイメージのポーズを。

それから、ポピュラーな片手で胸を、
もう片方の手で股を隠すポーズなど。
しばらくキョンファのショーが続いた。

もったいない事に
アプケロスにとってはただ人間がくねくねしてるだけにしか見えな
いので、

害は無いらしい、と警戒を解いた草食竜は
キョンファから目を逸らすと水をちゅぷちゅぷと舐め始めた。
キョンファが今まで汗を流していた、水を。

「……ふう」

一通り満足し終わり、
自分は何をやっているんだろうと我に返るキヨンファ。
多分あれなのだ。暑さでちょっとテンションがおかしくなったのだ。

そう自分に言い聞かせ、
そろそろ水から上がるうとしたその時、
ザバアンという大きな音と共に水しぶきが飛んだ。

何事かと振り返ると、
先ほどまでキヨンファを見つめていたアプケロスが
何者かによって水中に引きずり込まれていた。

「な　！？」

慌てて脱ぎ散らかした装備のもとへ向かい、
デュアルトマホークを構える。

と、目をこらさなくても分かるほどの大きな魚影にやっと気がついた。

その大きさはイヤクツクやドスガレオスの比ではない。
一体何メートルあるのだろうか。

「ガノトトス……！！」

いつから居たのかは分からない。
ハンターシリーズを脱いでいた為、
察知出来なかったのだ。

瑪瑙色の皮膚に黒、琥珀色の鱗を持つ

大型魚竜、『ガノトトス』だ。

巨大な体躯を駆使した体当たりで命を落としたハンターは数知れずと言われている。

また、普段は水の中に生息し

そこから水ブレスで攻撃してくる。

ガンナーなら遠距離から攻撃出来るが、

剣士であるキヨンファには水から上がるまで手の出しようがない。

(そもそも、勝てない！)

たとえば水から上がったとしても、

その大きさに見合った強力な力の前では人間など、

ましてはハンターシリーズ程度の防具など

一撃で粉碎されてしまうだろう。

しかも、キヨンファは今やすっぱんぼんである。

本能も理性も「逃げろなう！」と危険信号を発している。

防具と武器を両手に抱え、ガノトトスに背を向けてすたこら走り出した。

「避ける！ブレス！」

どこからか声が響く。

裸足のキヨンファが右にぺたぺたと避けると、

今までいた直線上を高圧の水プレスが薙ぎ払った。
あんな物を裸で受けていたら、確実に皮膚も肉もズタズタにされて
いただろう。

ほうほうの体で岩陰にまで隠れると、

ガノトトスは先に捕獲したアプケロスへと目標を移した。

「はーっ、はーっ！」

まだ胸がバクバクいつている。

まさかあんな状況でガノトトスなぞに出くわすとは思わなかった。
アプケロスが居なければ、先に狙われたのは自分だったろう。

(そう、そうね、アプケロスが私を助けてくれた、

多分私の艶かしい肢体を見てこんな芸術が魚のエサになるのは惜
しいと

自らを犠牲に護ってくれたのねああんて罪作りなわたし)

などと半分冗談な思考が出来るようになった頃、
崖上からシュウトがズザザッと滑り降りてきた。

「キョンファ！怪我あ無いか！？」

「あ、うん。大丈夫」

「そう、か。ふうー」

先ほどのドスガレオス戦や、
今までの狩りでは見せなかつた表情。

心の底から心配したという表情がそこにあるのを見て、キヨンファは何だか暖かい様な恥ずかしい様な気持ちになる。何だかんだ言って、シュウトは結局のところ自分を心配してくれているのだ。

「あー、良かった。

アイツ……ガノトトスは強えからなあ。

あれに限ってはどんな装備しても油断出来る気しないよ。

……えーと、キヨンファなんて、今すっぽんぽんだし」

「ひやうっ!？」

言われて、今思い出した。

服も防具も今両手に抱えているからして、自分は全裸であった。

「な、ちよっ、見ないでよ!」

「やだね」

シュウトは意地悪そうな笑みを浮かべたまま

キヨンファの白い肌と赤い顔から目を逸らさない。

これでは着替えるに着替えられないじゃないか。

「ちよっ!お願いだから……もう……」

しおらしくなるキヨンファだが、

ふと、シュウトのポーチから何やら黒い物体がはみ出しているのを見つける。

服で身体を隠す様にして、それをさっと奪い取った。

「お、い、ちよおまつ！」

それは『双眼鏡』であった。

ごく普通の、変哲ない双眼鏡である。

ハンターの間ではモンスターの生態を観察する時などに使われ

(って、そういう事じゃなくて)

双眼鏡。

って事は、見られてた？

水浴びを、裸を、

アップケロスを前に取ったあのポーズを？

キョンファの顔がみるみるうちに赤くなって、ぶるぶるとふるえる。

目の端には涙の粒が浮かび上がってきた。

「あー、なんだ、一言で言うならな」

シユウトは覚悟を完了した様な、

漢らしいたたずまいで、堂々と大声を張り上げた。

「ありがとうございま」

「いやあああああああん！！！」

言い終わる寸前、

キヨンファの究極キックが股間に直撃し、
何故かシュウトは一瞬だけ満足気な笑みを浮かべてその場に崩れ落ちたのだった。

「お疲れ」

ベースキャンプのベッドで寝っ転がっていたクーが、
何やら興奮冷めやらぬ表情で
ハンターメイルを直しているキヨンファと
ドスファンゴに連続で突進でも喰らったかの様に
ダメージを受けているシュウトを見て、
少し考えてから一言だけ声をかけた。

「ほんと、疲れた……!!」

キヨンファはまだ怒りが収まらない様子で返す。
クーはそれを聞いて珍しくからからと笑い出す。

「ハハハッ、そうだろう。心中察するよ。で」

クーはネコ髭をピンと立て、
顎に親指を立てながら聞いた。

「どこまでいった？」

「察せてないじゃないの!!」

全力で叩き返すキヨンファ。

シュウトの頭を鷲掴みにしてクーの前に突き出す。

「痛い、いいたああい！」

シュウトが悲鳴を挙げるが、知ったこつちゃない。

「大体、こつから動くなつて言ったのに
何でクーも止めなかったの!？」

「止めたさ。一応な」

「一応つて何!？」

「ちゃんと止めておいてよ！」

あー、それはすまなかつたな、とクーはやる気なさげにぼやく。
ベッドからひょんと降りると、軽く伸びをした。

「それよりザザミは？」

「もう来ていてもいい頃合いだろう」

「……あ」

すっかり忘れていた。

目をつぶって、意識を向けると

ガノトトスの他にもう一つの反応があるのが感じられた。

三人は砂漠を歩いている。

キョンファが前衛　というより、ただ一人だけ先に進む形で
シュウトとクーが後に続く。

ズンズンと先に行くキョンファはまだ怒りが納まらない様だった。
クーがキョンファに聞こえない程度の声でシュウトと話す。

「何だ、じゃあ何も無かったのか。珍しい」

「お前は俺を何だと思ってるんだ……？」

「ふむ、簡潔に言えばだな」

一拍、二拍置いてクーはしれっとした顔で言う。

「女に対して世界一バカ真面目で、世界一扱いを知らなくて、
世界一手の早い奴だな。お前は」

シュウトは少し考えた後、
意外そうな顔で返した。

「何だ、当たってるじゃないか」

否定どころか肯定するシュウト。

クーはフツと笑うと、昔を懐かしむ様な柔らかい表情をする。

「何も無いのが珍しい、と言えるようになったんだな……とな。
少し前のお前なら、すぐに手を出していただろうに」

「大人になったのかもよ」

「それは無いな。絶対に」

二人して笑っていると、

キヨンファがチラリと一瞬だけ振り向く。

というか、ギロリ、といった方がいいような目つきだ。

「嫌われたんじゃないか？」

「そうでもない」

シュウトは何やら自信ありげに言う。

「あいつは今までタメ口をきかなかった。

だがさっきのからは違う。

帰り道に散々怒鳴られた」

暑さのせいか、自分の言葉のせいか。

軽く汗を頬に伝わせながら、

シュウトは嬉しそうに

邪悪な笑みを浮かべつつ

続ける。

「覗かれていくらかオープンな感じになったんだろう。

この調子が続くかは分からない。だが心を開くきっかけにはなった。

つまり 「

邪悪な笑みを増しつつ、

シュウトは自身満々に言い放った。

「計画通り

！！」

「嘘つけ」

クーの突っ込みなど意に介さず、
シュウトはフツフツと笑う。

クーから見ても、本当に嬉しそうであった。

「まったく、私が人間に生まれていれば
そんな事せずとも……」

「え、何だって？」

小声で呟くクーに聞き返すシュウト。

クーは恒例となった溜息を一つ吐くと、
いつもの平然とした表情に戻った。

「私が人間に生まれていたら
キヨンファの様な扱いにくい女じゃなくて、
お前の都合の良く、なおかつ私が満足出来る様な
良い彼女になってやれたのになと思っただけだ」

正直に、ぶちまけた。

シュウトは昔から嘘を吐かれ続けて生きてきた為、
嘘を極端に嫌っていた。

言いたい事はハッキリ言え、
言いたくないなら嘘なんか吐かず黙っている。
そういう人物である。

それ故に、猟団の仲間やクーも
嘘を吐かないようにしている。

ここは黙っていてもよかったのだが、
クーは何となく、こう言ったらどんな反応をするだろうかという
好奇心をそのまま言葉にしてみたのであった。

するとシュウトは少し悲しそうな、
罪悪感でもあるといった様な顔をした後、
クーを抱き上げて耳元でささやいた。

「お前は満足してないだろうけど、

俺にとっては都合の良い……

良過ぎるくらいの存在だよ、お前は」

そう言つて、クーの口にキスをする。

唇を重ね合わせるだけの長めのキスの後、

クーをそっと降ろす。

頭を撫でてやってから、

二人は何事も無かったかのように歩き出した。

救われないな、私は。

クーは、今度は口に出さずに心の中でつぶやく。

幸いであるのかは分からないが、

この一連のやり取りをキョンファは見ていなかった。

「……あれ？」

キヨンファが立ち止まり、辺りを見回す。だが、砂漠にはガレオスの姿も無ければ肉食の鳥竜種ゲネポスの姿も見当たらない。もちろん、ダイミョウザミもだ。

「反応はここか？」

シュウトが問いつつ、黒刀の柄に手をかける。

「ええ、確かにこのエリアに反応はあるんだけど」

キヨンファは意識を集中させるが、やはりザミはこのエリアに居るらしい。双剣に手をかけつつ、周囲に気を配る。

「潜ってるのかな」

「だろうな」

キヨンファの疑問にシュウトが答える。クーは少し距離を開けて二人を見守る。相変わらず静観する気だろうか。

三人は慎重に歩を進めて行く。

何せ、砂の下に居るのならば

どこから飛び出して攻撃してくるか分からない。

気付かれない様に忍び足をするか、

相手より早く全力で走るかのどちらかしかないのだ。こればかりは、シュウトでもどうしようもなかった。

すると、運良く離れた所の砂から

何やら白い突起がズンと音を立てて飛び出した。

あれがザザミのヤドだろう。

その下からさらに赤い物体が現れ、地上に出る。

ザアツと多くの砂が落ちる音がした。

キヨンファはその身体を注視する。

なるほど、確かにヤドカリだ。

ただし、かなり巨大である。

モンスターも人間と同じで身長には個体差があるが、

あのザザミはどうだろうか？

もっと近づかなければ分からない。

だが、うかつに近づくのはモンスターと対する上で得策ではない。

初めて会ったモンスターは、

距離を開けて行動パターンを観察するのが普通である。

ただしこの場合、普通ではあっても確定された定石ではない。

シュウトは太刀を抜かずに、

左へと走り出していた。

「見つかったる！突進来るぞ！」

そう言って反対方向の右側を指す。

ザザミは後ろを見せていて、こちらに気付いていないかと思いきやそのまま後ろ向きに歩き、背中に背負ったヤドで突進をかけてきた。

言われた通り、キヨンファは右に走って避ける。

さすがにザザミの背中に目がついてるわけでもないので、避ける事は自体は難しくない。

キヨンファが居た所を通り過ぎ、

外れた事を知ったザザミは停止して両腕を振り上げ、威嚇する。

「コアアアアッ」

竜とはまた違った鳴き声を上げ、

ザザミはキヨンファへと迫って行った。

対峙するキヨンファはというと、

ダイミヨウザザミという生物に対して様々な感情を覚えていた。

一つ、甲殻種という初見のモンスターに対する興味。

一つ、竜とは違いまるで無表情な顔に対する違和感。

一つ、その淡々とした動きに対する恐怖感。

ドスギアノスやイヤンクックにも、

多分感情という物はあるだろう。

疲れれば足を引きずるし、敵を見れば口を大きく開けて威嚇の声を上げる。

だがこのダイミヨウザザミに関しては、感情があるのか無いのか。その判断が咄嗟に下せない。

顔がヤドカリなのも理由の一つだ。竜の様に、人間ほどではないにしろ表情がある様には見えない。それに加え、カツカツと身体の軋む音を立てながら迫る様子はまるで機械の様である。

二の足を踏むキヨンファに、ザザミはハンマー並みに大きな爪を振り下ろす。

後ろに飛び退き避けるキヨンファ。そうだ、尻込みしている場合ではない。見つかっている以上、行動を起こさねば。

キヨンファは双剣を抜かずに、ザザミから十分距離を取る。

すると、シュウトが横からザザミの脚に斬りかかり、続けて胴体突きを放った。

「しばらく見てる！」

キヨンファがザザミの行動パターンを予測出来るまで、自分が囷になるうというのだろう。攻撃を受けたザザミも、目標をシュウトへと変える。

中距離を保ち、観察を始めるキヨンファ。

どうやら、ザザミの攻撃方法は爪とヤドらしい。
正面に立てば爪で殴りかかり、
後ろに回られると一角竜モノブロスの頭の骨であるヤドで
後ろ向きのまま体当たりをかけてくる。

蟹の様に、横にも動ける様だ。
シュウトに対して横向きになり、
接近して爪を振るう。

その時、シュウトは真っ向から突っ込んでいた。

「危なっ
」

キョンファが言いかけたところで、
シュウトはザザミの脚をくぐり抜けてかわした。
このザザミは高さだけで大人の人間の倍以上あった。
あれだけ大きい身体なれば、
脚の下も一人が通れる隙間がある。

「慣れりゃあ出来る！」

ステップしながらくるとザザミに振り返るシュウト。
攻撃をかわされ続けているザザミだが、
その顔には怒りという表情が見受けられない。

そろそろ、だ。

「仕掛ける！」

そう言い、ザザミの脚へ走り寄り寄るキヨンファ。
デュアルトマホークを構え、脚の関節を切りつける。

ガリツと甲殻を削る程度の音。
やはりイヤンクックと同じで、
巨大な身体全体を支える脚は丈夫である。

だが、前の様に武器を折る失態は犯せない。
力任せに叩き折るのではない、
上手く斬り落とす事を狙うのである。

キヨンファはザザミから見て左側の脚を斬りつけ、
シュウトは反対側から胴体を突く。

両側から挟まれたザザミは、
とにかく目に付いた方へ爪を振るう。
爪が巨大な為避けるのに苦労するが、
二人は何とかわし、片方が狙われている隙に
ザザミを攻撃する。

ザザミの目がシュウトを向いた瞬間、
キヨンファは鬼人化を発動させて
ザザミの脚へ乱舞を叩き込んだ。

手ごたえとしては微妙な感覚であったが、
ザザミにしたなら積み重なる斬撃が堪えられなくなったのだろう。
鳴き声を上げ、前のめりに爪を出しながらどさりと身体を地に付ける。

「取った！」

シューウトが頭に回りこみ、
ザザミの顔面に太刀を体重をかけて振り下ろす。
続けて太刀を大きく振り回し、気刃斬りを放つ。
しかし、距離が近すぎたのだろう。
長い太刀はザザミの腕やら爪に引っかかり、
その反動で勢いを失う。

だがシューウトは構わずに
やたらめたら太刀を振り回し続ける。

「コアアア！」

体勢を整えたザザミは、
両の爪を大きく振り上げ、声を上げる。
ギシギシと身体を鳴らし、
口からは泡を吹き出す。
ザザミが怒り始めたのだ。
機械的にも見えた奴とて、一つの生き物である。
食事もすれば、怒りもする。

ザザミが姿勢を低くしたのを見て、
シューウトはキョンファに怒鳴りかける。

「ジャンプ来るぞ！」

ザザミはその状態から一気に真上へ跳躍する。
シューウトは飛び退きつつ、しまった、と思った。
ザザミが数メートルの飛翔の果て、着地する。

「キヨンファ！」

悪い予感が当たった。

キヨンファはザザミが着地した際に巻き起こる砂と衝撃に吹き飛ばされていた。

言い忘れていた、では済まされなかった。

今のキヨンファの通り、ザザミのジャンプは効果範囲が広い。

何故こんな分かりきった事に気付かなかったのか。

幸い、本体に当たらなかつたキヨンファは、

砂漠を数回横転した後、立ち上がるうとする。

何とか無事だった様子だが、

今追撃されれば今度こそ取り返しがつかない。

シュウトは全力を込めて黒刀を振るった。

焦りがあつたのだろうか、

長大な太刀はザザミの爪に当たり、弾かれる。

「くっ……このー！」

もう一度、縦斬りにかかる。

ザザミの身体から紫色の血飛沫が飛んだ。

反撃の爪を横つ飛びにかわすと、

今度は脚を斬りつけ、

そのまま気刃斬りに繋げる。

それを受けたザザミは突然、

爪で砂を掘り砂中へと姿を隠した。

「あー、マズイ。

キヨンファ走れ!

下から来るぞ、気をつける!」

こうなってしまうては、いつどこに来るのか分からない。

シュウトは黒刀を納め、走り出す。

キヨンファも先ほどの衝撃から立ち直り、

シュウトと距離が離れすぎないように走る。

ここで、今まで静観していたクーも加わり

三人は砂漠をひたすら走り回った。

端から見れば滑稽な凶柄だが、止まれば最後。

下から来るモノブ羅斯の角に串刺しだ。

しばらく走っていると、

キヨンファがその足を止めた。

片手を耳にやり、意識を向ける。

「待って、ザザミは他のエリアに行ったみたい」

それを聞くや、シュウトとクーも足を止めて一息を吐いた。

「そうか……キヨンファ、さっきのは大丈夫だったか?」

「うん。衝撃だけだったから、それほどでもない」

キヨンファはポーチから応急薬を取り出し、ビンを一つ空ける。

ぶは、と息を吐くと、
「大丈夫」と返した。

「少しヒヤヒヤしたぞ、ええ？」

クーが手に付いた砂を払い落としながら言う。
そろそろ限界だと思ったのだ。

キヨンファとて、イヤンクツクを狩れたばかりの実力である。
まだまだ一人前とはいえない難しいハンターだ。

それをサポートするのがシュウトの役割である。

だが、相変わらぬ自己中心的な狩り方。
声かけは出来ているが、それだけだ。

先ほどの太刀も、まるで新人の様だった。

二人とも中途半端に実力はあるからして、
このままでも勝てる事は勝てる。

だが、少なくともシュウトの方はいい加減に学習しなければいけない。

このままではリオレウスやガノトスといった強力な竜と戦った時に
キヨンファを死に追いやる可能性もあるし、
シュウト自身も今まで装備や仲間に助けられていた面もあるから、
下位装備に下位ハンターが仲間では
シュウトも万事無事では済まないだろう。

しかしどうしたものかと、
クーは頭を悩ませる。

太刀の扱いは多分、言葉で言っても分からないであろうし、

前の様に腕の良い太刀使いを見ても我がふりは直せないだろう。

(やはり、今回は私が手助けをしてやって切り抜け、
後で武器を変えさせよう。

それ以外に方法は無い)

クーがそう結論付けた時、

シュウトとキヨンファは武器に砥石をかけ態勢を整えていた。
ふと、キヨンファが思い出した様に疑問を口にする。

「さっき見てて思ったんだけど、

シュウトの太刀って大剣っぽくない？」

ほう、とクーが心の中で納得する。

なるほど、何やらキヨンファのシュウトに対する口調が
少し気楽になってきている。

先ほどシュウトが言っていたのは本当だったらしい。

「ん？大剣……って、何で？」

キヨンファが砥石にかけたデュアルトマホークを陽にかざしてきら
めかせ、

その先端をシュウトの黒刀に向ける。

「だってそれ、さっき溜める様にして振りかぶってたでしょう。

私は太刀あまり使った事無いけど、

太刀つてもつところ……すらつとしたイメージがあったから」

ふむ、とシュウトは黒刀に目をやる。

そんなもんかなあ、と言いつつ砥石をかけ、

それが終わるとひゅんひゅんと黒刀を振り回した。
そして数秒ほど何かを考える様にしてから
黒刀を軽く振り払い、鞘に納めた。

一方、クーは呆然とする。

(まさか、まさかな)

準備万端整ったシュウトとキヨンファは、
ザザミの後を追う。

クーは釈然としない思いを秘めたまま、二人の後を追った。

ザザミが逃げ込んだ先はエリア1。
水場の一つであり、アプケロス、メラルー、
ゲネポスなどの徘徊ルートである。

今回はアプケロスが数頭ほど居た。
先ほどキヨンファと会った個体とは違い、
突然の闖入者に反応し前足を上げて鳴き声を上げている。

肝心のザザミは何やら爪で砂をほじくり返して
それを口に運びムシムシと何かを食べている。
砂中に居た虫でも食べているのだろうか。

「潜ったメラルーでも食ってんのか」

「ぞっとする様な事でも言うな」

同族が四肢をバラバラに引きちぎられて食われるのを想像して、さすがのクーも苦笑いをしながら突っ込みを入れる。

「さあ、ラスト行くよ。」

俺はアプケロスやるから、キオンファは引き付けといてくれ」

そう言うって、シュウトは黒刀を抜きアプケロスへ斬りかかる。

本来ならキオンファより防御力の高いバトルシリーズを装備したシュウトがザザミを引きつけるべきだが、

キオンファの双剣は手数が多さで攻める武器であり

その特性上斬れ味を落としやすい。

対して太刀は一撃の威力もそれなりであり、

攻撃範囲も広く雑魚敵の掃討に適した武器だ。

加えて、黒刀【式ノ型】は斬れ味が高い。

となれば、ここで双剣を消費させるのは避けたいところだった。

その意図がキオンファへ伝わったのかどうかはともかく、

二人はその通りに動く。

しかしザザミはこちらを見つけると

再び砂中へ潜った。

「っ！潜った！多分今度は下から来ます！」

シュウトはそれを聞いた瞬間太刀をしまい、また先ほどの様に走る。

クーも四つ足でぴょんぴょんと跳ね回った。

三人が逃げ回っていると、

砂の中から勢い良くザザミのヤドが飛び出してきた。
そしてすぐに潜り、
数拍の間を置いてまた同じ様に突き上げてくる。

ドスガレオスの様に聴覚でこちらの位置を突き止めているのは分らないが、

ドスガレオスと違ってザザミはこの状態では音爆弾の効果が無い。
ひたすら逃げ続けるしかないのだった。

キヨンファが走っていると、
すぐ後ろにザザミが突き上げてくる。

息切れ寸前になりながら残っていたアプケロスの横を通り過ぎると、
その下からザザミが突き上げてきて

角をまともに喰らったアプケロスが大きな音を立てながら横倒しに
倒れた。

それでキヨンファを仕留めたと勘違いしたのだろうか。
ザザミは砂中からの攻撃を止めて地上に上がってくる。

(今日はよくアプケロスに助けられる)

不思議な縁に一瞬驚きと感嘆の顔をしてから、

キヨンファは双剣を構える。

アプケロスはあるが最後だった為、
シュウトも戦線に加わっていた。

作戦は変わらずキヨンファが左脚、
シュウトが右脚を担当する。

キヨンファは関節を狙い、

シュウトは身体に突きを放つ。

と、その時。

ザザミがシュウトに向けて右の爪で薙ぎ払ってくる。

それを懐に潜り込んでかわすと、

シュウトはザザミの身体に縦斬りを当ててから気刃斬りに繋げる。

シュウトは上段から振りかぶり気刃斬りの一の太刀を当てた。

だが、そこで止める。

続けて気刃斬りを当てるのではなく、

突き、斬り上げをザザミの身体に確実に当てると、

ザザミの反撃を予想していたかのように

繰り出された爪を横に跳んで避けた。

(まさか!?!.....くそっ!)

クーはいつでも援護出来る距離から様子をつかっていたが、シュウトの立ち回りを見て驚きつつも苦しい気持ちになった。

シュウトは避けた先からザザミに対して

縦斬り、突き、切り上げを当て、

ザザミが振り向いて向かい合わせになると

その顔に気刃斬りを一の太刀だけ当てて回避行動に移る。

そしてザザミの攻撃が外れると、

その隙に連撃を叩き込んだ。

さつきまでは気刃斬りを三の太刀まで全て繰り出していたのだが、今は相手に完全な隙がある瞬間にしかそれを出していない。

通常の斬撃に気刃斬りを織り交ぜ、

攻撃を欲張らずに回避し、
そして次の連撃に繋げる。

流れる様な動きは、いつか見たあの太刀使いを連想させた。

気がつくのと、ザザミが吹き出す泡は紫色になっていた。

甲殻種が弱っている証拠である。

シュウトはそれを好機と見るや、

気刃斬りを身体ではなく脚へと集中させる。

ザザミが悲鳴を上げて倒れると、

キヨンファに向けて声を弾ませた。

「顔、とどめ頼む！」

キヨンファはザザミの正面へ回り込むと、

鬼人化を発動させてザザミの顔面へ乱舞を叩き込む。

全力で振りまわす二つの斧が甲殻種の身体を引き裂き、
紫色の血を大量に吹き出させた。

弱点に集中攻撃を喰らったザザミは、

大きく鳴き声を上げて両腕を振り上げる。

まだ戦う気なのかと思いきや、

その腕をどさりと落とし、動かなくなった。

「やった……の？」

顔に降りかかった返り血を服で拭いつつキヨンファが呟く。

シュウトは黒刀を大きく振るい血を払い落とすと、

キヨンファの肩を小突いた。

「おめでとう。帰ったら蟹鍋だ」

（こいつは、どれだけ食べるんだ……！？）

結局、ドスガレオスに加えてダイミョウザザミを手で持ち帰る事は出来なかったので
アプトノスが引く荷車をギルドから借り、
帰り途中の街でザザミを解体した。

取れた素材は中々の物だったが、
それよりもザザミから取れた『食材』は
シズカを喜びと焦りの渦へと叩き落した。

「ニヤあ！これ、私一人でやるのかニヤ！？

一人でこんなの料理した事無いニヤあ……」

せめてジャスミンが居てくれればニヤあと言いつつ、
まんざらでもない表情であった。

前までは他にもキッチンアイルーが居たので、
一人で大型モンスターを料理するのは初めてなのだろう。
だがそこは料理人。

腕が鳴るといふ奴である。

「ニヤ、これでもキッチンアイルーのプライドニヤ。

主人の手は借りないニヤ」

キッチンアイルーは疲れて帰ってきた主人を癒すのが仕事。
シュウトやキヨンファの手は借りず、

一人で数時間の格闘の末、
見事な蟹料理を作って見せた。

ちなみに、クーは料理はしないらしかった。

そして相変わらず、

シュウトはその料理に舌鼓を打っていたのである。

ザザミズシ、ザザミジル、ザザミナベなどが並ぶ食卓で

シュウトは大皿や鍋から自分の分の大皿（小皿ではない）に移して
キープし、

もりもりと食べている。

そしてキヨンファが冒頭のような感想を危うく口に出しそうになった
のだった。

このままでは、この大量にある料理でさえ全て平らげてしまいそう
なので

キヨンファは慌てて自分の分をキープした。

「で、狩りの方はどうだったのかニャ……もぐもぐ」

自分の出来を満足そうに頬張りながらシズカが聞く。

シュウトはザザミジルをすすめるのを止め、

こちらにも心満たされた表情で溜息を吐いた。

「ああ。そこそこ上手くいったんじゃない？」

うん、とキヨンファも頷く。

「最後の辺り、シュウト結構良い動きだったよね」

その言葉を確かに聴いて、

シュウトは何とも言えない気持ちになった。

タメ口になったのもそうだが、

素直に褒めてくれたのが嬉しい。

少し前までは、こんな事はありませんかっただろうに。

「キヨンファ」

「ん？」

「ありがとな」

突然シュウトが俯きがちになりながら柔らかい表情で言ったので、キヨンファも反応に困った。

「何、いきなり」

シュウトは顔を上げ、キヨンファを真っ直ぐに見つめながら優しい顔のまま言った。

「ホント、覗いて良かった」

「ゴフオウツ！」

キヨンファはザザミナベを吹き出し、げげげほとむせる。

「ニヤ？」

シズカが疑問符を浮べつつ、すぐさまナプキンを渡し、テーブルを拭きにかかった。

「……っ、もう、しないでよ……」

むせたせいなのか、それとも恥ずかしさからか、顔を赤らめるキヨンファ。

シュウトは嬉しそうに。

心底嬉しそうに一言だけ返した。

「やだね」

本当に、この男は。

そう思いつつも、キヨンファはあの直後の様に一方的に責められない。

それはこちらにも後ろめたい事があるのだが、

シュウトはそれに気付いているのだろうか。

クーが告げ口していたとかないだろうか。

それにしても、あの女性はこいつとどんな関係だったのか。キヨンファは狩りの後を思い出す。

砂漠での狩りの後、

シュウトはエリアフで水浴びをしていた。
ギルドからの荷車が到着するまで暇だったからだ。

それだけならどうでもいい事なのだが、
問題はキヨンファがそれを覗き返していた事である。

見られっぱなしで終わるか、と。

キヨンファはシュウトのポーチから双眼鏡をスリ、
崖上から伏せてシュウトの水浴びを覗き見ていた。

ちなみに、ザザミの見張りはクーに任せてきた。

覗く事については適当にごまかしてきたが、

何やら見透かされた生暖かい目つきで見られていたのは
気のせいだと思ふ事にしよう。

ともあれ、やられっぱなしでは終わらないのだ。
別にシュウトだからって見たいわけじゃないが、
ただ自分だけ見られっぱなしが嫌なだけだ。
多分、そうだ。

そう自分を納得させつつ双眼鏡を覗くキヨンファ。

見れば、シュウトは無防備に全裸を晒している。
貧相な体つきだ。

(あれでよく太刀を振り回せたわね)

基本的には中肉中背だが、

腕や腹には筋肉がほとんど見当たらない。

前に大剣を片手で持ったのが信じられないくらいだ。
腕はまるで女の様に細い。

(さて、何か弱みないか)

自分はアプケロスの前で取ったポーズを見られたが、シユウトは何かやらかしてくれないものか。そうすればこちらが受けた恥辱をお返し出来る。身体的特徴をネタにするのもいいか。

まずは……うん、やはり。

シユウトは濡れた黒髪をかき上げているが、どうも剃込みが深い。

あれは将来薄くなるだろう。

他には……肌は白い。

身体には数ヶ所に傷がある。

ハンターともなれば、傷の一つ二つはあるのが普通だろう。

厚い胸板などない。

むしろ、いくらか膨らんでいて

本当、女みたいな身体つきである。

そういえば、顔も女装が似合いそうではないか？

中性的ではないが、そんな感じもする。

目は細く、顔も白い。

特別顔が良いわけではないが、

磨けばそれなりに光りそうでもある。

そんなシユウトであるが、

ちゃんと男としての物がぶら下がって

と、ここでキョンファの口から何かがポタリと零れた。
言うまでもなく、よだれである。
いつの間に関が開いていたのだろうか、
気付けば呼吸も荒い。

（ああ暑さね。多分多分そう、絶対そう。
ここ、崖上だし、直射日光だし。
うんそうだ。いやいや、無いって。アレは無いつて！）

原因はともかく興奮状態のキョンファだったが、
次に目に入った者を見て冷静さを取り戻す。

（あれは誰……？）

見れば、シュウトが手を上げている。挨拶だろうか？
目線の先には、ハンターと思われる桃色の髪をした女が
同じく手を上げて全裸のシュウトに近寄っていた。
シュウトはそれでも隠そうともしない。

女は美人だった。
装備はおそらくフルフルD、もしくはUシリーズだろうか。
背負っているのは大剣でフルミナントソード、またはフルミナント
ブレイドだろう。

女はシュウトと会話した後、
近くに腰掛ける。

シュウトは水浴びを終えると、

何かを女と話してから戻っていった。

キヨンファはそれらを全て見届けると、汗を拭って立ち上がる。

いきなり立ち上がると目眩がした。

これだけ暑い場所に居ればそうなるだろう。

汗は、何故か冷たい物だったが。

「クー、無くなっちまうぞー」

「待て、今行く」

リビングからシュウト達の声が聞こえた。

まったく、ほっとけば人の分まで食べる奴だ。

クーは書きかけの手紙にペンを走らせる。

そういえば、シュウトの水浴びを覗きに行った後のキヨンファは何故か様子がおかしかった様な気がする。どうかしたのだろうか。

だが、あれからすぐにいつものキヨンファに戻ったので大丈夫だろう。

シュウトについても、太刀の扱いが直ったのは大きな収穫だ。まさか、ただ単に言葉で伝えただけで直るとは思わなかった。

私がまだ完全にシュウトを理解出来ていたわけじゃないというのは、かなり心が痛んだが。

後で聞いたのだが、前に見た見た太刀使い。

そう、あいつだ。あれの立ち回りを真似たらしい。まったく、今になって実践出来るようになるとは、相変わらずわけの分からない奴だ。

こちらとしてはそんなところだ。

大きな問題はクリアされた。

そちらも色々あるだろうが、

シュウトとキヨンファの心配はしなくていい。

安心して『革命』に臨め。

クーはそこまで書くと、

手紙を封筒に入れてリュックにしまう。

封筒の面にはこう書いてあった。

『獵団アークス幹部 フレンズ』と。

3章『信用と信頼』（後書き）

まだまだだな（入浴シーン描写が）

4章 『不安と安心』

『ダルタロス』。

北エルデ地方、ラティオ活火山より北にその街は存在する。

この街は発足してから六十二年と、歴史は浅い。

それにしても急激な発展を遂げている。

おそらく火山帯から遠くないからだろう。

街は大量のマカライト鉱石やドラグライト鉱石で作られた防壁に囲まれ、

内部の施設もまた然りである。

南東で急速に発展しつつあるジャンボ村と、

北西の大都市ドンドルマとを繋ぐ拠点となる事もある。

ポツケ村から見ても、ドンドルマと同じ位の距離だ。

街道沿いにある街であり、

東のテロス密林やバテュバトム樹海に向かう通り道としても機能している。

地理的にも悪くない場所であり、

もちろんこれだけの街ならばギルドも設置されている。

ミナガルデやドンドルマに次ぐ勢いの街であった。

そのダルタロスに、

一つの猟団の本拠地があった。

獵団『アークス』。

本来獵団とは、ギルドに属するハンターが集まって出来た団体である。

言わばギルドの中のギルドだ。

獵団は実績によりギルドから様々な特権を与えられる。

そうやって人が集まる事により狩りやその他をスムーズに進められる。

それが本来の獵団の在り方であった。

だが近頃は、違反的な獵団も増えてきている。

獵団ぐるみでギルドが定めた規定を破る者。

例えば五人以上での狩りや、

モンスターの乱獲、密獵。

そして、革命。

王国を始めとする国家群はギルドという存在に対して

武力による危機感を抱いている。

だがギルドとしては、その様な考えは毛頭ないはずであった。

ギルドやハンターは人間に武器を向けない。

そついう決まりである。

それに異を唱える集団も、

今まで無い事は無かった。

しかしそついう輩は、

皮肉な事に 当のギルドによるギルドナイトによって肅清されていった。

結果として、この国この大陸はそれでバランスが取れている。

良くも悪くも無いのが現状であった。

獵団アークス。

この獵団はもちろんギルドに認められた団体である。アークスにはギルドナイトの団員も存在し、個人個人の實力も高い。

規律には正しく、民間人への配慮も欠けていない。ラオシャンロンなど古龍の撃退にも参加して大きな功績を挙げているし、モンスターに襲われた人々を助ける為なら、タダ働きに近い報酬でもクエストを受ける。評判の良い団体である。

ただ、一部の人間はこう言う。

曰く、「アークスは国家転覆を狙うテロリスト集団である」。

曰く、「獵団長は王家の回し者で、ギルドの崩壊を企んでいる」。

曰く、「裏で犯罪者集団と共謀し、それを行い利益を得る者達である」。

どれもこれも噂の域を出ない話であり、一般人でこれを信じている物はほとんどいない。

それを知るのは当のアークス団員、特にその幹部である。

アークスの幹部連中は、
獵団長よりこう命名されていた。

獵団長の片腕であり、部下であり、友人である。
『フレンズ』と。

アークスの拠点である屋敷は、
ラオシャンロンを超える大きさであった。

その巨大な屋敷は主に木造である。

アークスの力を持つてすれば、

エルトライト鉱石やメランジエ鉱石といった

G級装備に使われる様な希少価値の高い鉱石で

屋敷を覆う事も出来るのだが、

そうすると武装組織としてダルタロス住民やギルド、

国家を威圧してしまう。

それを避ける為の木造であるが、

使われる木材は高品質な物であり、

特殊なコーティングも施している為燃えにくい。

別大陸には武器にも強化できる木材があるという話もあり、

その木材としては最高品の物をここまで持って来れないか検討中である。

その素材を使えば、そこら辺の鉄よりも強度の高い屋敷が出来るだろう。

広い敷地もあり、そこでは団員が訓練に精を出していたり、からからと談笑していたりする。

とある女性団員はそれを感慨深げに眺めると、武器を背負って屋敷内に入って行った。

アークスの女性団員がフレンズ団室

幹部のフレンズ団員が普段居る部屋 に入ると、

副団長である『ナスト・ラーク・ツヴァイン』が

団長の椅子に腰掛けて手紙を読んでいた。

現在、団長は留守であり

絶対的な信頼を置かれた彼がその代理となっている。

「シュウトからの？」

「ああ。太刀の扱いも上手くなって順調だとさ」

ナストはそう返すと手紙を閉じる。

女性団員を見やると、

彼女は頭以外の『イーオスーツシリーズ』に

ライトボウガンの『神ヶ島』といった装備を固めていた。

「で、何か用か」

ナストは大して疑問に感じていないかの様に聞く。何を言うか分かってる、といった感じだ。

「しばらく単独で行動させてほしい。」

とりあえずはコロット村に行こうかと思ってる」

ナストは片手を上げ、気だるそうに振った。

「ああ行ってこい。」

……まったく、シリルといいナペスといい、

一人が好きな奴ばっかで困るよー」

「呼ばれれば戻ってくる。」

向こうに行っても、支援はする。

……じゃあ、行ってくる」

無表情を崩さずに女性団員は言っと、
フレンズ団室を後にする。

ナストは椅子をくるりと回しつつ、
何かを思案する様に溜息を吐いた。

(さて、後何ヶ月かかるか)

椅子を止め、後ろを向く。

(シユウト、こいつを倒せるか)

そこには、禍々しく見る者に畏怖と尊敬の念を与える様な
一振りの黒い大剣が壁に飾られていた。

シュウトとキヨンファ、そしてクーがテロス密林に来てからもう日が暮れようという時間が経っていた。

どうやら近頃はモンスターの繁殖率が高くなり、同じ狩場に多数の大型モンスターが集まる事も少なくないらしい。だから大連続狩猟クエストなんてものまで出来た訳だ。

それにより、ある程度実力のある人物やハンターランクの高い者、またはそちらの方面に『つて』がある者は契約金さえ払えば二つの依頼を同時に受ける事が可能になっている様だ。

何故ハンターランクが1のシュウトがそれを許されたのかは、キヨンファには分からない。

ただ、元々不思議が多く見える男である。今更それをとやかく言う事はしなかった。

「……来た。エリア3」

キヨンファの声に、シュウトが腰を上げる。じゃあ行くか、と三人はエリア3に向かった。

昼間に着いた三人は第一のクエストであるドスランポス狩猟を果たすと、次なる目標『ババコンガ』の到着までベースキャンプで時間を潰していた。

もうキヨンファはドスランポス程度なら簡単に狩れるレベルに達していた。

例え一人でもそうであろう。

クーが補佐するまでもなく、ドスランポスは二分と経たずに狩猟された。

それでもおごる雰囲気を見せないのは、ハンターとしては無くてはならないものである。そこのもちやんと理解している様で、

二人は下位ドスランポスにも油断せずに挑んだ。

さて、次は牙獣種のババコンガである。

エリア3。

海岸かついくらかの木々が生い茂るこの場所に着いた三人は、木々の奥で何やらうごめくピンク色の物体を目にした。

でかいのが一匹。人間並のサイズが一匹である。

シュウトはキヨンファに自分と小さい方のモンスターを指差して見せる。

キヨンファが頷くと、姿勢を低くして近づきまずシュウトが小さい方へ太刀を振りかぶった。

ゴウツ、といった牙獣種特有の鳴き声を上げたのは小型モンスターの部類に入るコンガ。

もう片方の大きい方がボス格のババコンガだ。

奴らは手足があり、形的には人間に近い。

しかし、人間に比べるまでも無いほどすぐ分かる筋肉質である。主にその強靱な四肢を使って攻撃するのだが、

その力はイャンクックなど低級の飛竜よりも強力で

中くらいの木の一つ程度なら簡単にへし折れると言われている。

ババコンガが仲間の悲鳴に振り向くと、その隙を突いてキヨンファが双剣で斬りかかる。

敵を確認したババコンガが二本足で立ち上がり、威嚇の声を挙げた。

モンスターにはこういう本能的動作をする者が多いが、それが有効かは時と場合による。

幸い耳を塞ぐほどの音量では無かったので、キヨンファはそのまま双剣を振るった。

シュウトも小型のコンガが死んだのを確認すると、キヨンファの援護に向かう。

ババコンガはまず目の前に居るキヨンファを殴り飛ばそうとするが、その前に彼女は側面へと退避する。

そしてシュウトが太刀でババコンガの横っ腹を突いた。

挟撃されたババコンガは二人を振り払う様に腕をやたらめたらに振り回す。

そして勢い余って転倒した。

どうやらこれがババコンガの行動パターンらしく、力は強いのだろうが隙の大きいモンスターである。

二人はお互いの攻撃を邪魔しない様、敵の左右に陣取って攻撃を続ける。

シュウトは気刃斬り一の太刀から突き、

そして二の太刀から切り上げとの連続攻撃を繰り返す。次の攻撃を行う位置に向かって回避する。前回、太刀の戦法を理解したのはまぐれではなかった様子だ。

キョンファもババコンガの行動パターンを一度理解すると、攻撃後の隙に乱舞を繰り返す。確実に敵の体力を削っていく。

しばらく攻撃を続けていると、

ババコンガは顔を真っ赤にして立ち上がり再び威嚇の声を挙げる。奴が怒った証拠だ。

それと同時に、ババコンガの尻から薄茶色の煙が噴出される。

「〜ゲホツ……くう！」

キョンファとシュウトが咳き込む。

ババコンガやコンガは放屁や自分のフンで攻撃するといった特徴を持つ。

怒り時にはほぼ確実に放屁をするので、分かっていた事とはいえやはりキツイものがある。

直撃を浴びたわけでもないのに喉が勝手に息を吐き出し、口を開くと吐き気が起こる。

「ええい、喰らえ下品な奴！」

吐き気を押さえ込み怒鳴りつけるシュウトは消臭剤が入った『消臭玉』をババコンガに投げつける。

落陽草を使った消臭剤でいくらかマシになったが、元であるババコンガを倒さない事には終わらない。

「俺ですらそんな所構わずしないぞ！……多分……かも」

「何で自信無いの」

戦闘中だというのに思わず突っ込みを入れるキヨンファ。だが、それは余裕が出来てきた事の表れである。

決して油断は出来ないが、イヤンクツク、ドスガレオス、ダイミヨウザザミと

大型モンスターをいくつか狩った事により自信と実力がついてきたのだ。

と、その時。

ババコンガが片手でキヨンファを振り払おうとして、胸に直撃したキヨンファが吹っ飛んで転がる。

「おいバカ……シャイセ！」

シユウトがどこかの外国語で『クソッ』という意味の言葉を吐いてから、

慌ててババコンガの顔に突きかかる。

頬を刺された奴は怯み、後ろに跳躍して距離を取った。

「げほっ………いたい」

「前から近くはダメだったのに」

大した怪我でなかったらしく、
すぐに起き上がり回避行動に移るキヨンファ。
自信があるうと実力があるうと、当たる時は当たるのだ。

こういう時、仲間を助け起こそうとするのは避けた方が良い。
味方の数が四人の場合は一人が助け、
残りの二人が引き付けるといった方法が取れるのだが、
二人だけではそれが出来ないので
キヨンファが自力で立ち直るまでシュウトが引き付けるしかない。

(二人……?)

そういえば、クーは何をしているのだろうか。

シュウトがサツと見やると、

彼女は端っこの木にぶら下がる蜂の巣からハチミツを採取している
最中であつた。

「おいしい！クー、何やってんの!？」

声を荒げるシュウトに、クーがいつも通り冷静に返す。

「ハチミツは命より重し」

「いや無いから！命を守る為のハチミツだから！」

栄養価の高いハチミツは薬の調合でよく使われる物である。
しかし、それを取ってる間に死人が出たとあつては本末転倒だ。

「私はもはやアドバイザー兼ハチミツ採取係だ」

「ハチミツだけに意味プーさんなんですけど!？」

ババコンガと格闘しつつ突っ込みを入れるシュウトと、
上手く隙を突いて乱舞を繰り返しているキヨンファであったが、
ババコンガが跳躍し他のエリアに逃げ出したのを確認すると大きく
息を吐いた。

「エリア9。水場の所ね」

キヨンファが自動マーキングを発動させ、
敵の居場所を突き止める。

追撃に向かう前に、まずシュウトはハチミツをビンに入れつつ
残りをぺちゃぺちゃと舐めているクーの傍へ向かう。

「うーん、やはり個人的には森丘の方がまったりして」

「ごおんっ！」

「何やっとなだ、お前は」

手近な物が無かったので太刀の鞘でクーを引っ叩くと、
クーはさも心外そうな表情でシュウトを見上げた。

「失敬な。私はこれが役割だと言っただろうに」

「いつから平和主義になったんだよ」

オトモアイルーの中でも、

特に戦闘を好まず採取や支援に徹する者の事を平和主義と呼ぶのだが、

クーはそうでなかった。

確か爆弾メインの相討覚悟だったはずだ。

まるつきり反対じゃねえか。

「いやあ、爆弾持ち歩くのもおつくうになってな。

宗旨替えさせてもらった」

「じゃあ、支援メインのハンターになるって事？」

キョンファがデュアルトマホークに砥石をかけながら聞く。

オトモアイルーは一応ハンターになる事を目指しているアイルーである。

平和主義となると、それはモンスターと戦わず

ハンターの支援をする為だけのオトモアイルーを目指す事になる。

「うーん。まあはつきり言うとしたら、

君達二人の連携を邪魔したくないんだよ。

人間二人とアイルーが一匹という組み合わせはバランス的によろしくない。

そうじゃなくとも、君達とてこれからずっと二人だけでやっていく訳じゃないだろう？

まだ仲間も増えるだろうし、そうしたら定員オーバーだ。

私は基本的にシュウト個人のオトモであって、

人間のパーティーに居ていい存在じゃないんだよ」

何やら、クーには彼女なりの理由があるらしい。

それがシュウトとキョンファを気遣ってというのは二人にも理解できた。

ただ、シュウトはひどく悲しい気持ちに苛まれた。
クーとの付き合いも実はそれほど長くないが、
それでもこんな身の引き方をするなんて水臭いではないか。

「クー。確かにパーティーってもんは必ずしも長続きするもんじゃないよ。」

誰かが抜けたり、入ったり、死んだり。

だからこそ、今このパーティーを大事にするべきだろ。

もしこれから仲間が増えて四人を超したとしても、

そりゃあそんな時考えればいい。

だけど、今は三人で組んでるんだよ」

シュウトがそう言うのと、

クーは珍しく目をぱちくりさせた。

「その発想は無かったわ」

「じゃ、行くぞー……っと、待て。俺も砥石かける」

ババコンガが逃げてから結構時間が経っている事に気付く
少し慌てて砥石をかけ始めるシュウト。

その傍ら、キヨンファは平静を装いながらも、
パーティーの変化などしばらく考えてなかった事にいくらか動揺し
ていた。

(そういえば、前までは解散なんて言ってたけど、
もし今そうになったら私はどうするんだろ)

キヨンファとて、ポツケ村に骨を埋める事を考えていたわけではな

い。

この村が発展するか、もしくは田舎暮らしの狩りを望んでいるハンターが後釜にやってくれば

自分は大きな街へ戻る。

少なくともポツケ村に来るまではそのつもりだった。

正確に言えば、既に他のポツケ村専属ハンターは存在するのだ。

ただ、その人物は現在街で行動している。

シウト達が来る以前に、どうやらこのポツケ村周辺はモンスターに襲われたらしい。

それを退けた後、ポツケ村周辺にもっとハンターを増やそうという話になり、

シウトやキヨンファが派遣される事が決定された。

しかし、予想に反してポツケ村が再びモンスターの危険に晒される事は少なかった。

なのでポツケ村で活躍していたそのハンター達は街に向かい、方々で人助けを中心とした活躍をしているという。

その人物がポツケ村に帰ってくれば、

キヨンファ達もお役御免の身だ。

一応ポツケ村にもギルドの出張所はあり

狩り場である雪山にも近いが、

田舎よりドンドルマの様な都会の方が何かと便利なのは当然である。

そもそもキヨンファは一人でも生きていける様に、

万能なハンターを目指していたはずである。

しかし、現在のこのパーティー。

この暮らしに魅力を感じないかと聞かれれば、どうだろうか。

シュウトはどう考えているのだろうか。
一応こいつもギルドから派遣された者であり、
特別ポツケ村に思い入れがあるわけでは無さそうだ。

そう考えると、いずれ来るであろう解散が頭にチラつき
キョンファは不安定な気持ちになった。
それが何故なのかは、薄々としか理解出来ていない。

「すまん！遅れた！」

バトルシリーズのスキル、砥石高速化により
高速で砥石をかけ終わった事を知らせるシュウトの声に、
キョンファは現実には引き戻される。

「……………ああ、はい。では、行きましょう」

キョンファは平静を装って返したつもりであった。

ただ、シュウトはキョンファの言葉遣いが敬語に戻っている事に
少しではあるが違和感を感じていた。

エリア9へ到着した三人は、
ババコンガが水を飲んでているのを発見する。
当然と言えば当然だ。
モンスターは寝る事以外にも、
水を飲むか他のモンスターを捕食する事でも回復する。

「相手が水を飲みたい、家に帰りたいと涙目になったところで、それを徹底的に邪魔しボコボコにする。

ねえどんな気持ち？今どんな気持ち？……と、

モンスターに対し優越感を感じつつキレたモンスターを返り討ちにしてこそ一人前だ」

これがシュウトがハンター養成学校の生徒だった頃に受けた訓練教官のお言葉である。

であれば、それを実行するのは今しかない。

まず、モンスターといえど咄嗟に反応する事は難しいと考えたシュウトは
キョンファの先制攻撃を勧める。

近づけばバれるのは当たり前なので、

三人は気配を隠して近づきぎりぎりのところから突進する。

奇襲を受けて出遅れたババコンガはキョンファの乱舞をまともに喰らう。

そして側面をシュウトに切り付けられ、
離脱した二人を追いかけようとする。

だが、目の前にクーが現れてババコンガの顔面を
アイルー族が扱うピック状の武器で突き刺した。

威力自体は大した物では無いが、顔面は痛い。

それに怒り狂ったババコンガがクーを追いかけ始める。

クーが攻撃をかわすと同時に、
シュウトとキヨンファが斬りかかる。

顔を赤くして怒っているものの
ダメージは相当だった様で、
ババコンガは転倒してもがき苦しむ。

もはやパターンとなったキヨンファの顔への乱舞。
そして下半身を担当するシュウトの気刃斬り三の太刀により
ババコンガは起き上がる事なくそのまま絶命した。

「ようし、上等」

シュウトが片手を上げて
キヨンファと喜びを分かち合おうとする。
キヨンファはそれに対し、苦笑いに近い笑いで答えた。

（これが、後何年……）

密林での狩りを終えて、
三人はポツケ村に帰還した。

それから数日を過ごしたが、
シュウトは何やらキヨンファの様子がおかしい事に
気付くのにさほど時間はかからなかった。

キヨンファは今までで手に入れた素材を使って

デュアルトマホークを『オーダーレイピア』に強化していた。これは水属性の付いた双剣であり、片や橙色に光る細身の剣。片や紫色に光る剣である。

その美しい刀身に惹かれる双剣使いは多く、キヨンファもこの剣を持つ事を一つの目標にしていたらしい。

念願のオーダーレイピアを手に入れたキヨンファであるが、その時の表情にいつもの様な強い目つきは無かった。

普段ならば、あの獲物を狩る目……

ハンターとしてというより、キヨンファ個人が持つ強気な目を見せるはずなのだが。

余談であるが、キヨンファは強化と生産を間違えて

前回の狩りで密林の浜辺をつろつき必要の無い『黒真珠』を探し回っていた。

それをシュウトが突っ込んでからかったのだが、

それに対しキヨンファは「そうですね」とあっさり自分の間違いを認めた。

反撃に蹴りの一つぐらい来ると思っていたシュウトは、

これでキヨンファが何か重大な問題を抱えている事に確信を持った。

それを追究し、追求し、果てには追及するまでに至ったのだが、キヨンファは気の無い声で否定するばかり。

そうであれば、シュウトに解決の方法などなかった。

そんな生活が数日続いたある日、

シュウトの元に意外な訪問者が尋ねて来たのであった。

「……で、調子はどうよ、ツンデレ」

「いい加減その呼び方はどうにかしなさいよ！」

シュウトはキヨンファを連れて

集会所で食事を取っていた。

イネアとアルスト先輩も一緒である。

キヨンファが何に悩んでいるのか知らないが、

悩んだ時はしょうがない。

悩みに悩んで、それから楽しい事をして

上手い物食つてうんこでもして寝れば治るもんだ。

少なくとも俺ならそうする。

そう思ったシュウトは集会所でイネアやアルストと一緒に

ハンター同士食事でもする事を思いついた。

こうして、ハンターの四人にクーとシズ力を交えたメンバーが集まったのである。

「わぁーかった。で、フルフルは倒せたのか？」

その言葉に、イネアはバツの悪そうな顔をする。

フルフルは彼女が今狙っている飛竜であり、

外見や行動が他の飛竜とはまた違った特徴の強い飛竜で

それ故、奇怪竜と呼ばれている。

ポツケ村周辺の雪山ではよく見る飛竜である。
シュウト達が最初にレックスに会った場所。
確かその山のてっぺんはフルフルが卵を産み付ける場所だったはずだ。

古龍と呼ばれる種が脱皮して残した抜け殻に
フルフルは卵を産み付けていて、そこから生まれる幼生のフルフルは
『フルフルベビー』と呼ばれる。

これを使ったスイーツである『フルベビアイス』は
一部のゲテモノ食いの中で人気らしいのだが、
生憎シュウトとキヨンファは食わず嫌いをしている。

そもそも飛竜を始めとするモンスターは
食用として扱われる事も多い。

前にシュウト達が狩ったダイミヨウザミも勿論の事ながら、
リオレウスは舌や内臓を始めとする部位が食べられる。

内臓に毒を持つモンスターもいるが、
そうなればそこを避けて食べばいいだけの話である。

もちろんそういったモンスターは狩るのが大変なものほど貴重であり、
ハンターが金持ちでなければ口にすることは無いだろう。

それにしても、シュウトは奇怪竜と呼ばれるフルフルまで食べる奴
の気が知れなかった。

噂によれば、フルフルベビーの体内にある小さな電気袋が
ピリツとした食感をかもし出し大層美味なんだそう。
フルフルベビーの漬け物も存在するそうで、

いやはや奥が深いと同時に今の僕には理解できない。

フルフルにはアルビノの中落ちや霜降りといった部位もあり、そこはレアな素材として使われるのであって

食用ではないはずなのだが、

ここまで聞くと食べれそうな気がしないでもない。

まあ、自分はそんなゲテモノにはさほど興味もなく

ポポやアプトノスやガウシカの肉を焼くだけで十分なんですけどねって俺は何の話をしてたんだったかな。

人呼んで、閑話休題。

フルフルを倒せたのかと聞かれて

表情を曇らせるイネア。

という事は、やっぱり今回もダメだったのだろう。

まさか、これを聞いた俺は手伝って貰われるのだろうか。

「後少しだったのよ！……多分」

イネアが悔しそうに言った。

いつもの表情、いつもの言動である。

腕が悪いわけではないのだが、

度々クエストを失敗している事が

本人のうかつな言動から判明していた。

「フルフルが白い息吐いて、怒ったと思ったらでかい声でギャーギャーと。」

「耳塞いでる間に首伸ばしてきて、
ちよーつとバランス崩したら崖から真っ逆さまよ、まったく」

逆に言えば、毎回毎回その程度で済んでいる事が驚きである。
普通、モンスターとの戦いは狩るか狩られるかなのだから
イネアが食われていたとしても不思議ではない。

「まあ、奴は動きが緩慢に見えて
それをバインドボイスで補っているからなあ」

アルスト先輩がスライスサボテンをつまみに
フラヒヤビールをあおりながら言った。

この人が片腕を使えないのは知っているが、
昼間からビールとはなんとという二トだろうか。

「そうなんですよ！
怒りで放電し始めると近寄れないし、
普段ブヨブヨなクセに斬りつけると硬くなって弾かれるし！」

「攻撃がまともに通るのは頭だけだから、
正面に立つての戦闘を余儀なくされるしなあ」

何故かイネアが自分の失敗を語り続け、
アルストがフォローする流れになっていた。
このまま失敗談を聴き続けるのも悪くないが、
そんな余裕も無くなるだろう。

何故なら、イネアが雪山でのフルフル狩りに失敗したという事は
今度は自分達にその依頼が回ってくるという事だ。

現在雪山……フラヒヤ山脈でのフルフルは増加傾向にあり、各大都市がこぞってフルフル狩猟のクエストを仲介している。だとすれば、フルフルの狩猟依頼が取り消される事は無いだろう。雪山に一番近い前線はこの村なのだ。街より先にこの集会所へ依頼が回ってくるはずである。

「お前が失敗したなら、俺らに回ってくるだろうに。キオンファはフルフル初めてだったよな？」

「ええ、そうですね」

一向に改善の兆しを見せないキオンファであったが、それでは困る。すぐにも依頼が発生する可能性が高いのだ。

狩り場が村の近くにある以上、ほうっておくわけにもいかんだろう。

シュウトが悩んでいると、

新しいハンターが集会所にやって来た。

突然、というわけでもない。

各地から集まったハンターは必然的に

狩り場に近いこの村を拠点にしてフルフル狩りを行う。

シュウトは特に気にはいなかったが、

既に何人かのハンターがこの村に訪れていると聞いていた。

イネア以外のハンターが集会所に来たとしても不思議ではなかった。

とはいえ、同業者としては相手の装備くらいには目がいく。

今入って来たハンターは『レザーライトSシリーズ』の防具だ。

これは一応上位に値する防具ではあるものの、防御力は低い。

鉱石で各所を補強しているが、対飛竜戦としてはやや不足する。採取が目的の素材ツアーなど楽なクエストに行く際に着ていく物だ。彼はこれでフルフルに挑むつもりなのだろうか。

武器はライトボウガンで、

『ジェイドストーム』、もしくは『ジェイドテンペスト』だろうか。ジェイドストームはガノトトス亜種の素材を使った

『LV2通常弾』を速射可能な優秀なライトボウガンであり、ジェイドテンペストはその上位版である。

下位のフルフルならば、ジェイドストームでも十分太刀打ち出来るだろう。

「……おお？」

シュウトはその装備に心当たりがあったのだが、それに気付いた時にはそのハンターが傍にやって来て声をかけてきていた。

「や、調子良いみたいだね」

「ジェイド！」

驚くシュウトを見て嬉しそうな表情をしたハンター。

シュウトも意外な人物に会えて予想外の喜びを隠さない。

「何だ、お前もフルフルか？」

「あー、それが、また俺何かやった？」

「いいや、調子良いって事しか聞いてないよ」

親しげに言葉を交わす二人に、
まずキヨンファが割って尋ねる。

「知り合いの方ですか？」

「知り合いも何も」

シュウトが言いかけたところで、
ハンターが遮る様に返した。

「シュウトと同じ獵団に所属している、『ジエイド』です。

キヨンファさんですか。クーから大まかな事情は聞いてます」

そこまで言うと、ジエイドはシュウトの隣の椅子に腰掛ける。

「シュウトが街を離れてここへ行くって言った時は心配したけど、
良い相方に逢えた様で何より」

「あー、そう。そうだなあ」

何やらシュウトの返しが気になったが、
シュウトの獵団仲間と聞いてキヨンファは驚きの後
嫌な予感を感じた。

すなわち、シュウトはこのまま彼と一緒に街へ帰ってしまうのでは
ないかと思った。

だが、その考えは無理やり頭から振り払う。

そんな事よりハンターとして。

キヨンファ・ヤンという人物としてやるべき事は何だったろうかを

考える。

そうだ。まずは相手の観察だ。

キヨンフアはまず相手の武器と防具を見て、
その後に人間自身を観察する。

彼は金髪の中性的な少年であり、シュウトより幼く見える。
14、5くらいだろうか。

だが、この年のハンターというのも珍しくない。
シュウトが獵団内でどの位の地位にいるかは分からないが、
タメ口をきくという事は二人とも下の方なのだろうと、
キヨンフアは解釈した。

しかし、何だろうか。

このジェイドという少年とシュウトは似ている。
見た目では無く、雰囲気は何となく似ているのだ。
シュウトは常に自分を神の様に信頼しており、
ひょうひょうと達観者を気取っている節があるのを、
キヨンフアはこれまでの暮らしで感じていた。

出会ってから間もないというのに、
ジェイドもまるでその同類の様に感じたのだ。
それは一種の漠然とした違和感であった。

キヨンフアの視線に気付いたのか、
ジェイドは背中に背負ったボウガンを肩越しに見やってみせる。

「ジェイドストームですよ。名前が同じなんでね」

なるほど。彼は同じ名前であるこの武器に何かしの愛着を持ってい

るらしい。

「何だ、ジェイドテンペスト没収されたのか？」

シュウトのセリフに、ジェイドは困った様な顔をした。

没収とは、何だろうか。

キョンファにはハンターが武器を没収される様な状況が思いつかなかった。

「……せつかく下位ハンター装って来たのに」

ぼそりと、ジェイドが呟く。

キョンファとイネアには、ジェイドの言った言葉の意味がまったく分からない。

装ってきた、とは。本来は上位ハンターだと言う事なのだろうか。そっぴんとして、何故それを隠す必要があるのだろうか。

コトリ、と、アルストがビールのグラスを置いた。

シュウトが何かに気付いた様な雰囲気です。

「あー、まあ、そうか。」

まあ何でもいいとして、こっちは何しに来たの？」

「それなんだけど」

先ほどの会話が無かったかの様に、

二人は話を続ける。

「ほら、今ウチって街を中心に活動してるだろ？
それがメンバーがあっちこっちの地方へ行っちゃうから、
連れ戻すかせめて団に利益になる狩りをしろって話になったんだ
よ」

連れ戻す、のところでキヨンファがやはりかという気持ちになる。
だがシュウトはそれにまったく気付かずジエイドに返す。

「あー。じゃあ俺も戻るか、金送るかー」

「いや、今回はシュウトに言いに来たんじゃないよ」

それを聞いてキヨンファがホツとしたのにも、
シュウトは気付かない。

ジエイドは軽く人差し指を立てて、
呆れた様な顔で言った。

「ほら、ここでフルフル出てるでしょ。」

だから、あれが」

「あー、あいつか……」

あれとかあいつとか内輪にしか分からない言い方で話し合う二人。
ジエイドが「ちょっと受付に聞いてくる」と言って受付に向かうと
イネアが疑問満点の雰囲気シュウトに詰め寄る。

「ちょっと、あれって何よ」

「うん、まあ、何というか」

はっきりしないシュウトであったが、
ジエイドがすぐに戻って来て

「やっぱいたよ」と言うと

おもむろに立ち上がった。

「キョンファ、イネア、準備しろ。
フルフル狩りだ」

「は？」

キョンファとイネアの声が重なる。

「俺とジエイド、そしてお前らの四人でフルフル狩りだったの。
準備が出来たら、すぐ向かうぞ」

「ちょっと待ちなさいよ！いきなり何勝手に決めてんのよ！」

突然の話にイネアが反論しようとするが、
それはシュウトの次の言葉によって覆される。

「フルフルの依頼は消えないだろうし、

だったら今四人で行っちゃえばいいじゃない。

素材は均等、契約金はジエイド持ちだ」

「僕かよ」

ジエイドの突っ込みがあったが、

一人では倒せなかったフルフルの素材を手に入れるチャンス。

そして契約金もタダとくれば話に乗らない手はなかった。

「し、しょうがないわね。

どうしてもって言うなら行ってあげてもいいけど」

「ただのくぎゆうこ」

残ったキヨンファも、オーダーレイピアを試す機会だとか
ポツケ村の近くならこれからからも戦う事は多いだとかのシュウトの弁
により

ほぼ強制的に参加となった。

三人は準備の為家に戻り、

既に装備が整っているジェイドが集会所に残り待ち合わせとなる。

テーブルに着くのがジェイドとアルストの二人だけとなり、
今まで黙っていたアルストが口を開いた。

「やー、シュウト君なんだが、ずいぶん才能のある子だねえ」

「そうですね。まあ、努力せずに軽い気持ちでやった事が実るのは才能ですかね。

……マジヨピーさんですか。あなたもわざわざのアドバイスをどうも」

「アルストで結構……で」

二人は何気ない会話をしていたが、
アルストは残ったビールに手を付けず
腕を組んでいた。

そして声を落とし、

明日の天気の話でもするかの様なありふれた口調で言った。

「ギルドナイトが、何の用で？」

あまりにも自然な口調であったが、

アルストからピリピリしたものを感じ取っていたジエイドは
欠片も動揺せずに答える。

「今の僕はシユウトと同じ獵団の団員。

それ以上でもそれ以下でも無いですよ」

「獵団。アークスか。」

いや、正確にはフレンズかな」

動揺はしない。動揺はしないものの、
ジエイドは大きな疑問を持った。

「田舎のハンター上がりにしては、よく知ってますね」

「現役時代から情報には興味あつたんでね。

獵団アークス。実質幹部であるフレンズの私兵組織。

私はそう読んでいる」

「ずいぶん物騒な言い方ですね」

「後ろは暗くて見えなかったのですね」

「ウチは獵団です」

「常識を知らないでの非常識は身を滅ぼすよ」

「ツクハハ、僕は」

一連の会話の終わりは、

心の底から楽しそうなジェイドによって打ち切られた。

「僕は嘘が吐けないんですよ。シュウトが嘘嫌いでね。ツクク、でも大好きですよ、こっという会話」

「そうかい」

そう言うと、アルストはビールを大きくあおった。

「ああ、今日は酔っ払いそうだよ。記憶が無くなるくらい」

ジェイドは、それに返事を返す様な事はしなかった。

その代わり、『後ろ』に向けて軽く手を振った。

ずいぶん奇妙な組織だ。

アルストはそう思わざるを得ない。

このジェイドという男は、ギルドナイトだ。

元々ギルドナイトは一つのギルドに12人までと決まっている。

だから、頭の良い人物が調べようとすれば

それを特定する事は難しくは無い。

しかし、このジェイドは集会所に入って来た時から

物腰や殺気を隠そうともしない。

逆に、それが自然体である事がアルストにとって不自然だったのだ。

獵団アークスとその幹部フレンズの名は知っていた。

後ろは暗い私兵組織。

それはつまり獵団ではなくテロリストと同義だ。

しかしジエイドは否定した。

ただし、疑いは晴れない。

ハンターの常識では、彼らのやっているだろう行いは
いわゆる……ナンセンスである。

それに拍車をかけるのが、

嘘が吐けないという話である。

この言葉、そして言動にアルストは宗教的なものが含まれると予想
した。

いくらなんでも、裏の仕事に関わるギルドナイトが

キヨンファやイネアの前で「装ってきた」だの言えるはずがない。

しかし、あえてそう言ったのは

少なくとも彼らは『嘘』という行為を絶対悪と認識しているからな
のだろうか。

そうすれば、アークスはシュウトを始めとする

(いや、私は彼の言う通り田舎のハンター上がりだ。

ダルタロスのギルドと獵団の問題に口を出す義務は無い。

もしそうなれば、娘にも迷惑がかかるしなあ)

そうである。

アルストは今やただの一般人であって、
ジェイドやシュウト、二人が属する猟団の問題に関わる必要は無い
のである。

そう結論すると、アルストはビールを飲み直し始める。
そこで、何気なく。

本当に何気なく、頭の中にフツとある疑問が湧いたのだ。

はて、俺に娘などいたっけか。

五人は雪山のベースキャンプで準備を終えた。

五人、というのはハンターにとって不吉な数字である事は周知の通
りである。

シュウト、キヨンファ、ジェイド、イネア。

それにクーを足した数字であるが、クー曰く

「偶然同じ道を散歩して偶然モンスターに出会って偶然戦闘に居合
わせたなら

まったく無問題であろう」

という説である。

ただ、さすがにギルド関係者に見つかるとまずいので

戦闘には参加せず見ているだけ。
もしもの事があつたらネコタクシー要員としてタダ働きするという
約束で同行している。

組む事になったジェイドとイネアに関しては、

シュウトはジェイドを高く評価している様子である。

イネアに関しては、防具はシュウトと同じバトルシリーズであり
武器は片手剣の『ドスバイトダガー』を持ってきていた。

鉱石を使った『アサシンカリング』をドスランポスの素材で強化し
た物だ。

ドスランポスとはいえ、この武器はそこそ良い武器である。

「むう。イネアのくせに生意気な」

「ふっふーん。私をナメてかかるのも今の内よ」

「じゃあフルフルも一人で狩れるな」

「……えっ、え?」

簡単に動揺するイネアを見て、

思わずシュウトは吹き出しそうになる。

これほどまで自爆しやすい女は他に見た事が無い。

「よーし、じゃあ皆準備はいいなー」

「はい出発しますよー、車が来たら手ー上げてー」

「なんとという遠足」

ジェイドの突っ込みを受けつつ、

シュウトを先頭にして五人は進んでいく。

イネアの「ちょっと、何であんたが仕切ってるのよ」「というシュウトへの文句だとか

「その武器良いなあ……べ、別にうらやましくなんてないんだからね!」という

キヨンファへの羨望だとかのセリフが雪山に響きつつ、だ。

しかし、キヨンファもイネアへ返事を返しているものいつもの元気は感じられなかった。

(何だ、何がそこまでさせるんだ)

シュウトが危機感を覚え始めた時、

おもむろにキヨンファが空を見上げて呟いた。

「あ、来るかも知れない」

「へ?」

シュウトを初めとする四人がキヨンファへ振り返る。

そのままキヨンファの視線を追うと、

空から一頭の飛竜　フルフルが降下してくるのが見えた。

ちなみにここはベースキャンプから程近いエリア1であり、雪も少なく草原に近い地帯である。

飛竜が来る事もあるのだが、

キャンプを出て突然というのには一同が驚く。

「おいしいいいい！」

「ちよつと……ここエリア1でしょ!？」

「あれ、気付かなかったの」

突然の事態に皆混乱し始める。

キヨンファは動揺を隠さず返した。

「す、すみません。洞窟に入るかと思つたら急に方向転換してて自動マーキングがあつても、こういつた事態には弱いらしい。」

「お、お、おお落ち着けまだあわあわあわてるような時間じゃななななな」

「楽しそうだなあ」

冗談半分でからからと笑っているシュウトとジェイドは余裕ありそうだが、

イネアとキヨンファはそうはいかない。

イネアは以前に負けているし、キヨンファはフルフルは初めてなのだ。

「各員中距離で散開！ジェイドは高台！」

シュウトの指示に従い、ジェイドは高台へ。

キヨンファとイネアは近過ぎず離れ過ぎずの位置へ。

クーは距離を開けて傍観の態勢に入る。

フルフルが降りてくると、
キョンファはまずその姿に何とも言えない感情になる。
しいて表現するとしたら、「うわぁ……」という感じだろうか。

まず、顔が無い。正確に言うなら、目が無い。

長い首に口だけが付いている。

その口というのも、人間や他の飛竜の様な口ではなく
まん丸に牙を付けた様な形に近い。
皮膚は全身が白く、口の中だけが赤くぬめっているから
よりいっそう不気味だ。

一応翼はあるようで、さつきもそれを使って飛んできたのだが
のしのしと歩いてくるその姿だけ見ればとても飛べる様には見えな
い。

むしろ身体に対して足が細く見える。
走る事すら出来ないのではないか。

「ウボウオオオオオ」

そして何やら低い声で唸り出した。
怖い。マジ怖い。

どのくらい怖いかってというと
クック10頭分?とかそういうレベルじゃない。
方向性。ベクトルがまるつきり違う。

キョンファがその見た目に近づくのをおためらっていると、
ジェイドが高台から皆に声をかけた。

「それ、傷ついてない?」

「みたいね……？」

イネアも気付いた様だ。

キヨンファはフルフルを書物でしか見た事なかったが、頭に当たる部分に切り傷らしき物があった。

身体の所々も同じ状況で、

足に至っては血を流していた。

口の端からはよだれが垂れており、

それを受けた草がジュワツと音を立てて溶け始めた。

確か、奴が吐いているのは強力な酸だ。

「ウボウオオオオオ」

そんなルツクスで唸るもんだから

不気味な事極まりない。

弱っているのは他のハンターの仕業なのだろうか。

二重契約というより、狩り場の混乱かもしくは個体の移動によるものなのだろう。

「だとしたら、倒しちゃった方が良くないですか」

「だな」

キヨンファの言葉にシュウトが同意し、

太刀を構え斬りつけようとすると

フルフルは一瞬だけ大きく身体を反らせた。

「おわっ
」

「コアアアアアアアウツ!!」

シュウトが太刀から手を離れた時には遅く、フルフルが酷く大きな声で叫びだす。

キョンファ達も慌てて耳を塞ぐ。

これはレックスの声より大きいのではないか。

シュウトが耳鳴りに身体を動かせないでいると、フルフルはゆったりした動作で跳躍しようとする。

「初心者じゃないんだから……!!」

跳躍し、今にもシュウトを押し潰そうとするフルフル目がけてジエイドはLV2通常弾を速射する。

跳躍前に一発、空中で一発が命中し

フルフルの狙いは逸れてシュウトをかすめた位置に着地する。残りの弾丸も全て命中した。

「あゝー、サンキユ」

シュウトは態勢を整えると、

もう一度太刀を構えてフルフルに向かった。

「はあああああっ
」

シュウトの太刀がフルフルを捉えようとしたその時、ジエイドは視界の端に何かピンク色のものを見つけ、

声を上げようとしたが……遅かった。

「私のお！フルフルにいい！」

「えっ」

何かガズガザッ！と音を立ててシュウトに近づく。
目の前に突然躍り出たピンク色の物体は、
白い大剣でシュウトの太刀を弾き飛ばすとそのまま

「手を出すなああああああああああッッ！！！！！！！！」

シュウトを、吹き飛ばした。

まさに吹き飛んでいるという表現が似合う。

シュウトは魂の奥底からの叫びが聞こえたかと思うと、
バチツと身体に電流を感じて、それから吹っ飛んだ。

フルフルよりも、ジェイドの陣取る高台よりも高く飛んだシュウト
は落下すると

そのままゴミクズのように地面を跳ねて転がり、
高台の壁にぶつかって動かなくなった。

キヨンファ、呆然。

イネア、呆然。

フルフル、呆然。

ジェイドは……とりあえずシュウトとピンクから目を逸らした。

「ああっ……フルフルッ！
疲労困憊のその姿、もう少し見てたかったのに
なにゆえこんな所まで脱鬼の如く……」

そう言うと、『何やらピンク』は
フルフルの身体に飛び乗り、首に抱きついた。

「フルフル！ふるふるフルフル振る！」

その何やらピンクはフルフルの首に頬ずりを始める。
それに対し、フルフルはぼうっと突っ立ったまま動かない。

(てっ、手懐けている……！？)

キョンファとイネアが驚きに見やる。

すると、フルフルがニシニシと口を動かし、
翼を振り始めた。

何の事は無い。ただのフルフルの行動パターンであり、
奴は弱るとしばらく棒立ちになった後巣へ逃げ帰るのだ。

フルフルは首を振って何やらピンクをずべしつと地面に叩き付ける
と、

悠々たる蒼い大空へ羽ばたいて行った。

「まっつてえええわたしもつれてつてえええー！！」

振り返らぬその背中に、
哀愁漂う男の姿を見たかは定かではない。

「くすん。いいもん。私は追いかける女なのよ！」

演技がかったそのセリフに、ある種猟奇的な。

というかむしろこのピンク自身が奇怪さをかもし出している。

彼女が通った後には柱の一本すら残らない、

まるでラオシャンロンに近いものを感じ

ジエイドですら敬遠していたが、

そういう訳にもいかず遠慮がちに声をかけた。

「あー、ビハインド、ユー」

ピンクが振り向く前に、

珍しく鬼の形相で怒るシュウトが全力でその頭を殴り飛ばした。

後頭部に直撃を喰らったそのピンクは草が生い茂る地面に再び叩きつけられ転がる。

「腹で殴るんじゃないよ！」

電撃喰らうだろうがアングスタンツ!？」

「人の恋路の邪魔する奴はッ！」

犬に食われて死になさい！」

「やだね！俺犬嫌い！猫派だもん！」

言葉のドッジボールを交わす二人を

ぼかんと見ていたキヨンファとイネアだが、

ふとそのピンク色に見覚えがあるのを思い出す。

（あれは、フルフルシリーズ。）

っていうか、この前砂漠で居た……）

そうだ。フルフルシリーズといえば、

砂漠でシュウトと会っていた女ではないか。

武器もフルミナントの大剣であるし、

何よりこうやって『親しげ』に会話しているのが証拠である。

ドッジボールが終わらないと思ったのか、

ジェイドが投げやりな口調で割って入った。

「お二人。外野に伝わってないよ」

「え、あーうん。ほらお前。こっちがキョンファでこっちがツンデレだ」

「ああ。あのノゾキ女」

二人は初めてキョンファ達に気付いたかのような反応を見せた後、

シュウトがピンクに自己紹介を促した。

ノゾキ女、の部分でキョンファがきよどったのは言うまでもない。

「私はシリル・シリルシ。」

好きなものはフルフル。愛してるのもフルフル。フルフルは私の嫁。

もちろん反論異論一切認めないわ」

「な、なんなのよこいつ……」

胸を張って言うシリルシだかシリル氏とやらに、
イネアがついていけないといった顔をする。
もちろん理解もしていないし理解したいとも思わない。
とりあえず極度の変態なのは分かったので近づかないで欲しいとは思った。

「一般人に理解されない話し方をするのは賢くないぞ……
こいつは俺とジェイドと同じ獵団の団員だ。

主な装備はフルフル系で、言った通りフルフル好きでもある。

ほら、モンスターにファンがついてたりするだろ？

こいつはフルフルのファンなんだと」

「フルフルのファン、ねえ」

キヨンファとイネアには理解出来ない。

ただでさえフルフルは他の飛竜と比べて気持ち悪いのに、
それを特別に好きになる気が知れない。

しかし、先程の変態的行動で

それが真である事は実証されていた。

「あんだ達も分かってないでしょうけど、

フルフルは女子に一番人気のある竜なのよ」

「私はいつ男になったんだぜ……？」

キヨンファがもうボケだか突っ込みだか分からない発言をし始める。

混沌とした空気が流れる中、

ジエイドがおもむろにL V 1通常弾を皆の中心に撃ち込んだ。

「今はクエスト中だ。

シリル、クエスト被りの説明。

キヨンファはフルフルの場所。

分かったら行くぞ」

「……はい」

さすがにこの状況に苛立ち始めたのだろう。

ジエイドによつて会話は断ち切られる。

彼は弾丸を装填し直しながら、

半ば貧乏くじだと諦めかけていた。

まあ、もう半分は確かに楽しくもあつたのだが。

『シリル・シリルシ』。

武器は『フルミナントブレイド』。

防具は『フルフルUシリーズ』。

フルミナントはフルフルの素材を使った雷属性の大剣であり、

フルフルUはフルフル亜種の素材を使ったピンク色の防具である。

両方とも上位装備だ。

彼女はフルフル好きであり、

雪山にフルフルが多く出現し始めた事を知ると

必然の如くその依頼を受けた。

いくつかの街や村を回り、

その全てでフルフル狩猟の依頼を受けた。
本来ならこういった行為はまず許されていないし、
こんな事をしようとする人間もそうそういない。

だが、そこら辺は獵団の上の方へかけあって何とかごまかしてもらい、

一日中フルフルと過ごす日々を数日間続けていたという。

「いやー、天国みたいな所よ。」

まあ今回みたいに途中で他のハンターとかち合う事もあったけど。
フルフル装備の女の子とかもいて、

その子も私ほどじゃないけどフルフル好きみたいだったから
百歩譲って二人で倒そうとしたんだけど、

あの子パーティーは組まないって言うて結局取り合いになったわ」

「待て！その娘、もしかしてフルフルシリーズに頭だけキャップじや無かったか!？」

「ええそうよ。何で知ってるの?」

「チツ……クツ、シヨオオオ。何だあいついたのかよー。」

ファンとしてだらしねえな」

「ファンだったの。まあ仕方ないわね」

シユウトが入れ違いになったであろう

とある有名なハンターに思いを馳せながらツタを登る。

話しながらここまで来たのはいいが、
問題はフルフルをどうするかである。

話を聞く限りでは、
どうやらこのフルフル女のやってる事は
獵団の権力を使った乱獲である。
とすると、これは本人も獵団も危ない橋なのではないか。

「ジエイド、止めとけよ……」

「どっやってだよ」

これ以上この変態にフルフルを乱獲させるわけにはいかない。
そう考えたシュウトは、ホットドリンクを飲むと
洞窟の中に駆けて行った。

「待ちやなさいッ！（意味不明） 私からフルフルを取ったら、
美人しか残らないわよ！」

全力で追いかけるシリル。

ジエイドは呆れた様な、無表情な様な。
そんな顔をして、キヨンファとイネアに
「ゆっくり行こう」と行って
ホットドリンクをちびちびと飲み始めた。

「あれ、援護しなくていいんですか」

キヨンファ達が見下ろす先には、
我先にと瀕死のフルフルに襲い掛かるシュウトとシリルが見えた。

雪山の洞窟。このエリア3は天井の開いた吹き抜けになっており、キョンファ達は上の階から下で行われる戦闘を傍観していた。

傍観といえば、クーもちゃんと付いて来ており
ホットドリンクのお湯割りに『ゴムジャーキー』をかじりながら観戦している。

こいつは本当に遠足気分であった。

「うーん。とりあえず、一応五人以上だし。

ただでさえシ ril のせいで混乱してるんだから」

「あいつ、フルフルだけ狩っててよく飽きないわね。

あ、倒した」

ジェイドとイネアもすっかり日常モードである。

キョンファもクエストに乗り気でなかったとはいえ、

突然の闖入者に戸惑うしかない。

シ ril 達はフルフルを倒したと思ったら、

今度は素材を巡って口論を始めた。

「フルフルを何体も狩ったって事は、

素材もその分持つてるんじゃないか」

「もしそうなら乱獲の上密猟になるよ……そろそろ止めよう」

ジェイド達が下へ飛び降りると、

シュウトとシ ril はそれぞれの意見に同意を求めてくる。

「おうジエイド！クエスト受けたのは俺らだから素材も然りだよな
！」

「フルフルは私が一番上手く扱えるの！
フルフルの事を一番分かっているのは他でもない私イッ！」

ジエイドはシュウトにするかシリルにするか一瞬迷って、
シリルにする事を決めた。

そしてジエイドは麻痺弾か睡眠弾かをしばし迷ったが、
威力の無い睡眠弾にする事を決定すると
シリルの顔面ががちりと狙いをつけて引き金を絞った。

発射音と共にシリルへ命中した『睡眠弾LV2』は
『眠魚』の成分を撒き散らし、
それを吸い込んだシリルはぱったりと倒れると動かなくなる。

「とりあえず先、剥ぎ取りやっちゃおうか」

「いつものお前で安心した」

シリルから距離を開けて口を塞いでいたシュウトが心の底から、と
いった声で返した。

「で、どうするよこの始末」

シユウトが素材袋をとすつと置きつつ嘆くように言った。
フルフルから剥ぎ取りを終えたのはいいが、
この乱獲問題をどう処理するべきか。

「誰が動いたのか知らないけど、
上の方が許可したんだとしたら色々マズイね。
クー、連絡役を頼むよ」

ジェイドの言葉にクーは軽く手を振って返す。

「うむう。これからの私はそうなるだろうな」

「だったら、フルフル狩りはこれで終わりになる……のか？」

シユウトがいくらか残念そうな表情で言った。

この狩りはキヨンファの調子を治す意味もあった。

いくらなんでも、生死がかかる状況ではキヨンファとて

いつものハンターらしい姿勢に戻らずにはいられないだろう。

それは荒療治に近いが、このままグダグダに狩りを終えては

わざわざイネアも誘ってクエストを受けた意味が無い。

「あ、でも……」

「え？」

キヨンファが視線を空中へ巡らせて呟く。

「エリア7に飛竜の反応が。」

フルフルかどうかは分かりませんが」

「即行即行うッ！据えフル食わぬは私の恥っ」

睡眠弾から立ち直ったシリルが、
寝起きだというのに先程と変わらぬ高いテンションで反応する。

「睡眠弾、LV2だぞ……！？」

「いつでもなんでも全力デート！

そこにフルフルあるかぎり、私の狩りはリタイア知らずよ！」

「クー。獵団本部から突っ込み役もこいつに付かせてくれ。

ウォルトやナペス辺りがいい」

ジェイドが頭を抱えているのをまったく無視し、
シリルはフルミナントブレイドに砥石をかけてやる気満々である。

「シリル。あんたこの状況を作り出して何とも思わないのか？」

「思うはずが無いじゃない。

フルフルは人生よ。

狩り場がかち合いーの、保護団に撃たれーの、

せつかくの剥ぎ取りを邪魔されたとしても

私はフルフルの元へ通い続けるわ」

どうしようもない女である。

いったい何がそうさせるのか、

彼女の愛は宗教的な妄信にすら見えるこの言動反応状況。

愛にしる信仰にしる、暴走すれば

たちまち周辺に被害が撒き散らされる事が分かっただけでも良しとするか。

「……ん？保護団に撃たれるって？」

ジェイドがその台詞に反応する。

シュウトも何やら違和感を感じてシリルを見やった。

「だから、飛竜の保護団がいるでしょ。

反狩猟の団体よ」

「噂では聞いてましたが、

狩り場まで来たんですか？」

キヨンファが聞くと、

シリルは何事も無かったかの様に返す。

「そ。何か居るなと思ってたら、

いきなりボウガン撃ってきたの。

何人かいたんだけど、とりあえず片っ端からフルミナントで殴って置いてきたわ」

殴った、というより先程のシュウトの様に吹き飛ばしたのだろう。

ハンターとは命を奪う仕事であるからして、

その様な反対組織も存在するのだが、

フルフルを相手にしようとしていたシリルを止めようとしたのは相手が悪かったとしか言いようが無い。

「シリル。それはマジの話か」

「そうよ　え、あ、じゃあ……ああ、そういう事ね」

シュウトが珍しく真剣な表情で聞き、それに対しシリルも真面目な顔になって顔を伏せた。

「お前、周りくらい見ろよ。」

いくらフルフル相手だからって、

そんなのに気づかないほどバカじゃねえだろう!」

シュウトが声を荒げる。

シリルは自分が大きなミスを犯したと気づいて強気だった姿勢を崩した。

「ああ、その、ごめんなさい。」

うつすら理解してただけで」

「だったら早く言え!」

二人は何やらキオンファとイネアには分からない会話をする。

キオンファが一つ理解できたのは、上位ハンターであるシリルをシュウトが叱っているらしい事である。

だとすると、シュウトは獵団内でシリル以上の立場だという事か。

前に聞いた、シュウトは本当は実績のあったハンターで諸々な事情により下位ハンターになったという話は本当だったのかも知れない。

そういえば、シュウトが集会所で言った「ジエイドテンペストの没収」云々は、彼らの獵団がギルドの規定に反した行いをした意味なのではないか？ シュウトも武器を取り上げられたとか言っていたし、そうすると彼らの獵団は度々問題行動を起こして装備の没収やらランクの降格やらといった罰を受けていることになる。

今回のシ ril による乱獲もその一つであり、シュウトが属する獵団はあまり評判がよろしくないのだろうと、キヨンファは勝手に解釈した。

と、キヨンファは元々頭が良いので洞察力を駆使してそこまで考えられたが、イネアはまったく話が見えず蚊帳の外である。

「まあいい。すまんが、ジエイド。処理は任せた」

「了解。クーはシュウト達に付いてやってて。終わったら状況をまとめよう」

そういうとジエイドは一人で先に進んで行った。もちろん状況を説明されてないキヨンファとイネアが不満の声を上げる。

「さつきから話がよく見えないんですが」

「あんただけで勝手に進めるんじゃないわよ」

シュウトはやる気なさそうに手を振って返す。

クーもよく使うこの仕草は彼らのクセなのだろうか。

「なーんも。 猟団内での内輪ネタだよ。」

さ、四人になった事だし行くぞ」

「まだ、狩るんですか？」

キョンファの疑問にシリルが答えようとする前に、これ以上不毛な議論をしないようシュウトが遮った。

「どうせシリルは止めないだろう……」

ただし！お前が何匹狩ったか知らんがこれで最後だ。

俺ら四人でフルフル狩って、俺らが受けた依頼を完遂させる。

シリルの問題は後で猟団内で議論するさ。

……さ、行くぞ！」

結局、今暫定的に組まれたこのパーティは

誰かが引っ張ってやらないと進めないタイプなのだ。

元々シュウトは仕切り屋ではないが、

この状況ではそうするしかあるまい。

シュウトは全員の装備とアイテムをチェックし、

既に戦闘を行なった自分とシリルの武器に砥石をかけて

万全な態勢を作った後、

対フルフル戦の作戦を大雑把に決めてエリア7へと向かった。

ジェイドはシュウト達と別れ、

別の山々に向かった。

シリルはこの山脈を転々としていたのでその分周辺に対する混乱が広がっているだろう。

だとすれば、この山脈に狩りに来たハンターもそれだ。

シリルがフルフルを乱獲した今、

各所からやって来るハンター達は肩透かしを食らう事になる。

それをどう説明するべきか……

まずは獵団アークス。いや、上層部であるフレンズに事情を説明し事後処理をさせるべきだろう。

もはやジェイドやシリル一人が弁解し弁明したとしても事態は収まらない。

もちろんギルドナイトである自分も事後処理担当の一人とされるだろうが、

今回の事件は自分の知らないところで行われていた。

よって自分には欠片も責任はない。

しかし、シリルは獵団の上層部にかけあつたと言っていたが、いったい獵団の誰がこんな事を許可したのだろうか？

少なくともアークスをフレンズが制御出来ていないという事は無い。その辺りは徹底している。

ならば、明らかに問題行動であるこの行為をフレンズが許可した。では、フレンズにその様な頭の悪い人間はいただろうか。

いや、そうではない。

そうではないのが分かっているから、

ジェイドはこうやって各ベースキャンプを回っている。

フレンズ団員にしてギルドナイトである自分を出し抜き、勝手に物事を進められる人物といえばそれはごく一部に限られる。

ジェイドは山を越え、
シュウト達が現在使っているキャンプからだいたい向かい側のキャンプへ到着した。

近づくにつれてジェイドは予感が的中した事を感じ取り、
まず最初に副団長のナスト・ラーク・ツヴァインに向けて心の中で悪態を吐いた。

キャンプのテントに入ると、
そこにはいくつかの道具が置いてあった。

回復薬やホットドリンクの空瓶。
それに加え、血の付いた包帯が落ちている。
ベッドにも、血がこびり付いていた。

それは一見、狩猟中に負傷したハンターが
治療を行なった後にも見える。

だが、ジェイドはこの近辺に硝煙の『匂い』がするのに気づいていた。
た。

そう、良い匂いだ。
さすがに匂いだけでは弾種やボウガンの種類は分からないが、
まださほど時間が経っていない事は分かる。

ジェイドは何気ない顔をしてキャンプを出る。
そして跳躍して岩陰に隠れると、
彼が立っていた所に弾丸が一発命中し地面に穴を開けた。

やはり、だ。

ジェイドは一瞬にして弾痕から敵の位置を割り出し、装填済みの『散弾LV1』を敵が隠れているだろっ木々に向けて連射する。

相手が相手なら、LV1の弾種で十分だ。

何者かの悲鳴が聞こえると、

ジェイドは通常弾LV1に切り替えて林に突進する。

果たして、そこには民間人の格好をしてライトボウガンを持った男が二名居た。

ボウガンの形状は『クロスボウガン』系統で、発砲音と反動を軽減するサイレンサーを装備している。

一人は先程の散弾を喰らったのか、右肩と右脚に被弾していた。

傷を受けていない方が反撃しようと銃を向けてくるが、その前にジェイドが男の頭を撃ち抜いた。

息も吐かずにジェイドはもう片方へジェイドストームを向ける。すると相手の男は思い出したように慌ててふところから白い布切れを取り出した。

「ば、暴力反対！」

見れば、そこには「狩猟断固反対」と書かれている。

「わ、私は反狩猟団体の者だ……」

きつ、貴様らハンターは人間にまで銃を向けるのか!？」

反狩猟団体の名はそう珍しくない。

例え人間に対して害を為す事もあるモンスターだろうが、生き物を殺す事を良しとしない連中がこうやって狩り場に押しかけて来る事もありえない話ではない。だが、自然の摂理を否定する連中に従う理由以前に、ジエイドには人殺しを否定する連中にさえ従う事もしなかった。

「そんなのに、銃はもつたいない」

男はジエイドの言葉が理解出来なかったが、それを考える前に残った左脚を撃ち抜かれる。

悲鳴を上げて悶絶する男に、ジエイドが詰め寄った。

「残り人数は？政府の誰からの命令だ」

気だるげに言う。

そもそも、反狩猟団体がハンターが使う武器を持っている事自体おかしいのだ。

だとすればこの男は武器や人材を豊富に所持している貴族の回し者王家や共和国、帝国自体が関わっている可能性も高い。

今のところ王国の王子や王女達はハンターに理解を示しているが、その他の関係者がハンターを嫌っているのは周知の事実である。

まったく。シリルはそんな事も気付かないほどフルフルに心酔していたのだろうか。

今回の様にモンスターが増加し、ハンター達がそれを目当てに集まるならば

この様な反狩猟団体を装った国家の軍人だか貴族の雇った傭兵のた

ぐいが

『ハンター狩り』にやってくる事は十分ありえるというのに。

いや、もしかしたらこいつらは

フルフル好きで有名なアークス団員であるシリル。

もしくは近場のポツケ村にいるシユウトを狙ったのかも知れない。

そうしたならば、奴らはアークスやフレンズを快く思わず、

我ら猟団の団員抹殺を画策したという線も考慮しなければならぬ。

「せ、政府？何の話だ」

男は否定してみせる。彼にとつての不幸は、

相手が『そちら方面の専門』であるジェイドだった事だろう。

ジェイドは銃を下ろし、剥ぎ取り用のナイフを引き抜くと相手の腹に突き立てる。

男が山に響き渡るほどの悲鳴を上げようとするが、持っていた布で口を塞がれる。

そのままジェイドは腹を少しずつ切り開き、

中から内臓を少し引っ張り出して男に見せ付ける。

ジェイドお気に入り口のやり口だった。

「今ならまだ助かるぞー」。

残り人数とバツクが誰かを

「

ふと気づくと、男は白目をむいて気絶していた。

ジェイドはやっと溜息を一つ吐く。

次は、麻酔弾を持ってこよう。

そう決めると、ジエイドは二人の男をちゃんと処理してから他の拠点へと向かった。

キンと鉄のかち合う音と共に感じた手ごたえに、キヨンファとイネアは目を見合わせた。

再びフルフルを見つけて攻撃を開始したまではないが、奴の弱点は頭と首である。

腹や背中も攻撃が通るのだが、そこまで接近しすぎると放電の餌食になる恐れがあった。

脚や尻尾は特に硬いので、必然的に攻撃は頭に集まる。

しかし、フルフルの首は集中攻撃を行なうにしては小さな物であった。

そもそもハンターが使う片手剣や双剣という物はそれなりに大型の武器である。

巨大なモンスターを相手にするわけだからそうなるのは当たり前で、人が人に対して使う通常の剣より一回り二回り大きいのだ。

そんな物で同一の的を狙った二人は、お互いの武器を衝突させてしまう。

「……っ、すいません」

「って、どうしろってのよっね！」

シウトやシリルは長い得物を活かして胴体を狙うが、片手剣や双剣はそうはいかない。

一点に集中して連続攻撃を叩き込むこの二つの武器。パーティーでフルフルを狩るに向く組み合わせではなかった。

「私が左をやります。

イネアは右を！」

「それしかないってわけね……！」

フルフルがイネアの方を向き、身体をバネにして跳躍する。

通常なら予備動作を見てから回避出来る攻撃であり、危なげなく右に回避すると

フルフルが身体を起こす隙にイネアがドスバイトダガーで首に飛びかかり、

キョンファがオーダーレイピアで突きかかった。

キョンファのオーダーレイピアは水属性の双剣であるが、フルフルの弱点は火属性なのでほとんど効果は見られない。

しかし、ハンター達ですら忘れがちなのだが属性というのは付加効果の一つに過ぎない。

例えば火属性が弱点のフルフルを効率よく狩る為にわざわざリオレウスを狩りに行き火属性のリオレウス武器を作ると

いった

回り道はハンターなら誰もが経験するであろう。

そうすると属性が戦闘の決め手に見えるが、そうではない。

属性の相性を考えなくても、

武器自体の威力が高ければ最終的にモンスターは狩れるのだ。

キョンファはほぼ効果が無い水属性の双剣で

フルフルの首を斬りつけたが、

それでフルフルの首に傷をつける事に成功した。

オーダーレイピアが属性の問題以前に持つ威力であり、

その武器を扱えるだけの技術があったならば

十分モンスターに太刀打ちできる。

「リーベツ！エエフネエンツ！」

例によって、雷属性のフルフルに

同じく雷属性のフルフル素材を使った武器で

傷をつける事も可能である。

勿論水属性以上に効果は薄い。

まったく無いと言っていいだろう。

だというのに、シリルは

何やら訳の分からない言葉を叫びつつフルフルを薙ぎ払い、
奴の胴体を切り裂く。

「ウント、ウムケールング！」

身体全体を使って左から振り抜いた大剣を反転させ、フルフルの脚から身体を切り上げる。

フルフルはよろめいたかと思うと、そのまま横に倒れこんだ。

「なんとというゴリ押し……！」

シュウトが呆れると同時に、

硬い部位でも躊躇無くぶつた斬るその戦法に感心する。

シュウトは属性や部位の弱点を突くタイプのハンターであり、シリルの乱暴とも言えるやり方には憧れているのだ。

もちろん、それを可能にする技量にという意味だが。

フルフルを斬り倒したシリルは首や胴体の攻撃にかかる他メンバーを無視し、

奴の身体に飛び乗るとそこから軽くジャンプする。

そのまま身体をハンマー使いの様に一回転させ、

叫び声を上げつつ全力でフルフルの背中を叩き潰した。

「ウボウウツ」

フルフルが鳴き声を上げて身体を起こして

白く息を荒げた。

怒りの合図であるが、

その身体はだいぶロボロだ。

弱点属性を受けなくとも、

四人から囲まれて攻撃を受ければ

そうなるのに大して時間はかからない。

シリルの武器が上位武器であるフルミナントブレイドだったのも
功を奏したのだろう。

（それにしてもフルフルの消耗が早い気がする。

四人での狩りってこんなもんだったか）

シュウトが疑問を感じるが、

久しぶりに四人で狩りをしたせいで

感覚が鈍っただけと思う事にする。

フルフルは怒ると、通常の体当たりや跳びかかりでも

電気を身体に纏うようになる。

もちろん、他のモンスター同様攻撃力や行動の速さが増す為、

動きの鈍さを攻める事も出来なくなつた。

フルフルは近くで大剣を振るうシリルを振り払う為、

電撃を纏いつつ体当たりを仕掛ける。

それをまともに喰らつたシリルは吹き飛んで雪の上を二転三転する。

「ああつ、変態！」

イネアが叫んで助けに向かうが、

フルフルはほんの一瞬だけ首を反らすと

バインドボイスを放つ。

反射神経の良い者でなければ、

盾を構えて音を防ぐ暇もないだろう。

三人が耳を塞いでいる隙に、

フルフルは先程よりも首を大きく振りかぶって

三人が立ち直るギリギリのタイミングで電気ブレスを放つ。
正面と斜めの三方向へ走る電気の球は、
正面にシュウトを捕らえていた。

装備にもよるが、このブレスを喰らってはただではすまない。
それだけでなく、電気による麻痺でさらに追撃を貰う事にも繋がる。

「どきなさい！」

ネコタクシー行きを覚悟したシュウトだったが、
突如横から風圧を感じ、
気が付くとバチツとした痛みと共に空中へ吹き飛ばされていた。

またかよ！

雪に叩きつけられ、そこに突っ込んだ顔を上げて痛みを堪え起き上がる
と、
ぐったりと倒れるピンク色の物体が見えた。

それが、シリルがフルミナントで自分を吹き飛ばし
身代わりに電気ブレスを受けた姿だと気付くのにさほど時間はか
からない。

「シリル！」

叫びつつ、状況を確認し駆け寄り寄るシュウト。
フルフルはキョコンファとイネアが辛うじて押さえている状態であっ
た。

「おい……」

シユウトはその先にどの言葉を紡ぐか迷う。大丈夫か。すまない。ありがとう。いくらでも言う事はある。

「どMですか」

「ただしフルフルに限る」

結果、口に出たのはそんな言葉であったが、冗談を返せるのなら大丈夫だろう。まあ、彼女にとっては冗談で無いのかも知れないが、シユウトは一部の親友を除き素直に礼を言える様な人物で無かった。シリルは自分の水浴びを見られても平気な程度の仲である団員であったが、やはり咄嗟の状況とはいえ礼を言うのは……恥ずかしいのだ。

「それよりも、フルフルはまだよ。いくら私がいるからって……」

そう言つて大剣を杖に立ち上がるうとするシリル。

しかし、キヨンファ達と戦闘していたフルフルは突然動きを止め、棒立ちになった。

「えっ……！？」

しばらくキヨンファとイネアの攻撃をまったく動かずに受けていたフルフルは、

先程の個体と同じく巢へと飛んで逃げて行った。

キヨンファは双剣を納め、イネアは雪の上に座り込み足を投げ出す。バトルシリリーズは太ももなど素肌が露出している部分もあり冷たいはずだが、それよりも疲れの方が多かったのだろう。

「あれは弱ってるので合ってますよね？」

キヨンファの問いにシリルは回復薬を飲んでから答える。

「ええ。棒立ちになったら捕獲出来るほど弱った証拠。まあ、動きを見てからすぐにシビレ罨や落とし穴を足元に仕掛けないと飛んでっちゃうからその場ですぐに捕獲は出来ないけどね」

「まー、四人いれば捕獲しなくてもいけるだろ」

「ええ。でも……」

シリルが何故か失敗でも犯した様な表情をする。

何かあったのかと聞こうとする前に、イネアが立ち上がってこちらにやって来る。

「ねー、なんか痛みが急に引いてっただけだ」

イネアもいつの間にか攻撃を受けていたらしい。それに対しシリルが得意気に返す。

「そりゃあ、フルフルUシリーズの『広域化』スキルよ。」

「これがあれば、回復薬とかを飲んだ時に周りの皆も回復するのよ。」

「ま、フルフルマニアの特権って奴ね。」

「いや、広域化はフルフル防具以外にもあった気が……。」

というより、その効果が起こる原理が気になるキョンファ。

何の疑問も持たずに「へえー」と納得しているのがイネアである。

「そんな事より、なんかフルフル弱るの早いわね。」

ファンクラブ第一人者の私ともなれば、

大体余力がどの位残ってるかぐらい分かるもんなんだけど。」

「そのファンクラブとやらには何人が所属してるんです……?。」

「んー、1000人くらい?。」

「多いでしょオイ!。」

女三人組が騒ぐ中で、シュウトは一人太刀に砥石をかけつつ居場所を探す。

自分あまり社交的で無いし女が得意でも無いのだと、無理やり結論付ける事にした。

それは結構悲しい事実であったのだが。

「で、フルフルよ。」

ノゾキはオーダレイピアでしょ。

ツンデレはドスバイトダガーで、

シュウトは黒刀【弐の型】で

「せめて、その呼び方は止めてくれませんか……？」

キヨンファが恥ずかしそうに目を泳がせる。

一方イネアは、何の事も無いかのように返した。

「ああ。これ『ドスバイトダガー改』よ」

「はっ？」

他の三人は一斉に驚く。

ドスバイトダガー改は下位武器ながら、
貴重な素材の一つである『ドスランポスの頭』と、
強力なモンスターが居る故に低ランクハンターの狩猟が禁止されて
いる

『火山』や『塔』といった狩り場に多く生息する
小型飛竜『ガブラス』の素材が必要な武器である。

その威力は上位武器並みであり、
かつてシュウトが下位ハンターであった頃に使っていたほど有能で
ある。

つまるところ、この武器は今のイネアに不釣合な武器なのだ。

「フルフルが早く弱った様に見えたのはそういう事だったのね」
シリルはやっと納得する。

通常のドスバイトダガーよりも高威力な武器だからして、

それが効いていたのだろう。

この武器ならば、使い手にもよるが
リオレウスの様な強力な飛竜も単独で狩猟出来る。

シユウトもそれは理解出来た。

しかし、問題はもう一つ存在する。

「でもお前のランクじゃあ、火山や塔入れないだろう。
どこでガブラス狩ったんだ」

「え？ちよつと前にここに居たわよ」

「ここお？雪山にか」

ガブラスは災厄を呼ぶ飛竜と呼ばれ、
ガブラスが現れる事は古龍等の強力な飛竜が現れる前兆と言われている。

だから例えば、火山ならば『テオ・テスカトル』。
塔ならば『ナナ・テスカトリ』やリオレウスやリオレイアの『稀少種』と

呼ばれる発見すら珍しい竜が現れる場所に
ガブラスは生息しているのだ。

平時にガブラスを雪山で見かけたといった例は無い。
とすれば、それは雪山で何かしらの異変が起こっているに他ならな
かった。

「レックスがまた来るんじゃないだろうなあ……」

シユウトにとって、それは出来れば遠慮願いたいものであった。

今まで数多くのモンスターを狩ってきたという自負はあったが、ティガレックスは恐らく自分の苦手なタイプだろうとも予想していた。

とにかく突撃してくる力バカのクセして、あれはあれで隙も少ないのだ。

「少なくとも、今の装備で勝てる気はしませんね。

……それより、フルフルが回復しないうちに」

キヨンファ達は喋りつつも準備を終えていた様子だった。

改めてフルフルに止めを刺すべくエリア3へ向かう。

到達すると、必然的にフルフルは巣である洞窟で眠っていた。

「さて、爆弾も麻酔玉も無いとしたら、

まずシリルの溜め斬りで」

モンスターとて睡眠中は無防備な状態である。

攻撃を一発でも当ててやれば起きてしまうが、

完全な睡眠状態である時の最初の一発は

特に効果があると言われている。

とすれば、ここは一撃の重い大剣を初手にするべきであろう。

そう考えて振り返るシュウトであったが、

向いた先にシリルは居ない。

もう一度首を巡らすと、

眠ったフルフルの首にすりすり抱きつくシリルの姿があった。

お前何やってんだ。

「うふふ……ぶよぶよぐによんぐによーん」

「って、何やってんのー!？」

三人は異口同音に叫んだ。

当然の事ながら、フルフルは目を覚まして身体を起こす。人間なら、さぞかし不機嫌な表情なんだろうなとシュウトは思った。

「ああ！大声出すから！」

「どう見てもあんたのせいでしょう!？」

シリルの行動がキョンファの突っ込みに反応したらしいフルフルはのしのしと数歩歩くと寝ぼけた頭を振り払うように首を振った。その際、寝ている時に口の端に溜まっていたよだれが飛び散る。

「さ、先走り」

「コアアアアアウツ!!」

シリルが色々とアウトなセリフを言おうとした時、フルフルがバインドボイスを放ちそれを遮った。

「フルフル。空気読んでくれてありがとう」

シュウト達は耳から手を離すと、それぞれを得物を構える。

シリルも、フルフルの叫びをすぐ傍で聴けた事が嬉しいのか、高揚した様子でフルミナントを抜き放った。

「ラストいくよ！」

シュウトの言葉をきっかけに、全員が飛びかかる。

キヨンファとイネアが首。

シュウトとシリルが胴体を狙うのは変わらない。

全員が斬りかかると、すぐにフルフルは

歯を剥き出しに白い息を吐き、怒り状態となる。

モンスターが怒りやすくなるのは、

大抵が弱っている時でもあるのだ。

群がる人間をまとめて振り払おうとしたのか、

フルフルは地に身体をくっつけて発電を行う。

身体全体を覆う電撃をシュウトとキヨンファはかわしたが、

イネアとシリルは避けきれなかった。

イネアは盾でガードするが大きく吹き飛ばされ、

シリルは大剣を振っている途中だったので

防御する暇も無くまともに喰らってしまった。

壁際まで吹き飛ばされたシリルは辛くも起き上がると、

回復薬グレートを一気に飲み干した。

「アンタ、大丈夫なの！？」

「この防具を何だと思ってるのよ！」

ちょうどハートにビビッとくる感じ!」

シリルは口に残ったツバを吐きつつイネアにそう返してみせる。

さすがに何度も喰らえばダメージはかなり大きいが、

電撃を使うフルフルの素材で出来た防具は

当然電気への耐性も高い。

あれだけプレスや電撃を直撃して気を失っていない事からも、耐電性能の高さがうかがえる。

しかし、フルフルは元々攻撃力の高いモンスターである。

さすがにこれ以上喰らえば危険だ。

そろそろ仕留めなければいけないと思ったシュウトは

強引に気刃斬りを当てに行く。

足を力ずくで斬りつけると、

フルフルは横倒しになった。

「やるかい?」

声を上げつつ後ろを見やる。

シリルが助走をつけて剣を振り下ろすところであった。

「言われなくたってえ!」

シリルはフルフルの首を縦に斬りつけ、

そのまま回転しつつ薙ぎ払いに繋げる。

「フルフルへのこの気持ち、まさしく愛!

その様な会話を聞きつつ、
シュウトはフルフルに寄りかかって
水筒の水を三口ほど飲んだ。

今日も、何とか仕事を終えたのだ。

フルフルの剥ぎ取りをしていると、
いつの間にか居なくなっていたクーが
他のエリアから採取してきたらしいマタタビを持って現れる。

「なんだ、終わったのか」と

スポーツの試合でも観戦しようとしていたかの様な態度を取ったの
を受け

四人は無言でマタタビを取り上げた。

それからベースキャンプへ戻ったが、
ジェイドの姿は無い。

先に帰ったか、まだ事後処理をしているのか分からないが、
ジェイドなら大丈夫だろうと言うシュウトの弁により
四人は村に帰る事にした。
ポツケ村の三人は帰り支度を始め、
シリルは別の拠点に置いてある荷物を取りに行く。

恐らく、雪山に来てから今までに狩った数多くのフルフル素材があ
るのだろう。

キヨンファはそんな数の素材をどうするのかと気にはなったが、

シュウトが獵団内の彼女の部屋はフルフルグッズで埋め尽くされている事を明かすと
それ以上続きを聞くことは思わなかった。

狩りから村へ帰還後の打ち上げというものは
ハンター業界では暗黙の常識である。
固定パーティーだろうが、一度限りのパーティーだろうが関係は無い。

集会所は酒場代わりでもあり、
適当な料理を頼んで談笑しながら待つ。

キッチンアイルのシズカはシュウト個人の契約者であるが、
暇な時はこの集会所に顔を出して
厨房に入っているらしい。

それと、アルスト先輩も帰りを待っていたようで
相変わらずビールを片手にしていた。

シュウトがポポのステーキをパクついていると、
ジェイドが帰って来た。

彼は表情豊かな方ではないが、
どこことなく満足気な顔に見えた。

各地を回って尻拭いをしていたと言ったジェイドは
さほど問題なさげに席に着き、

会話には積極的に加わる事無く傍観の立場を取った。
いつものジェイドだと、シュウトは安心して食事へと向き直った。

なお、この食事はジェイドの奢りという事になっていたので

イネアは『クヨクヨーグルトのパフェ』を追加に頼みつつフルフルを倒した事に満足していた様子だし、シリルはフルフルとのデートが終了して名残惜しそうにしつつも素材の『ブヨブヨした皮』を手で弄くり回したり口元に当てて感触を楽しんだりしている。

しかし、解決されていない問題が一つあった。

キヨンファは狩り場ではいつも通りの働きを見せた。

だが帰ってくると、また意気消沈とも見える雰囲気に戻る。いったい何がそこまでさせるのか。

そう考えている内に、

自分はキヨンファを過大に期待し過ぎているのではないかとも思う。いくらハンターとしてパーティーを組む相方だからといって、プライベートに踏み込むべきではないのではないかと。しかし、そうすると彼女は

(こいつは、ダメだったのか……?)

そう疑問付けるシュウトであったが、ジエイドが宿に忘れ物をしたと言って集会所を出ようとする前、彼はシュウトの肩に腕を置いた。

特に決めた合図でもないが、ついてこい、と言われた気がしてシュウトも後を追った。

あからさまに二人で内緒話がありますよと言わんばかりの行為であったが、

それは嘘を吐かず常に真っ直ぐ行動するシュウトにとっては周りからの不思議そうな視線など気にするまでも無かった。

ポツケ村とて、宿屋はある。

その一室に入った二人は、
どちらともなく視線を交わしベッドに腰掛けた。

「で、どうだった」

シュウトが聞くと、

ジェイドは無表情というには少し人生に疲れた様な、
それでいて何かが気に入らない様な敵意や殺意が見える表情で返した。

これは彼の普段通りであり、別に本当に殺意を持っているわけではない。
普段はいつつこんな顔をしているはずだと、シュウトは思った。

「西シュレイド王国。東シュレイド共和国。ベノム帝国。

各ギルドからの回し者。何でもござれだったよ」

という事は、各国家のエージェントとドンパチドンとやっていたのだらう。

まったく、そういうのが専門の奴とはいえ、

この俺の知らない所でこたごたが起こるのは面白くない。
自分は当事者であるのだ。

「今回の件は」

「ナストだよ」

あっさりと答えを出したジェイドに、

シュウトは目を丸くしてそれを反応として返す。

「大体ねえ」とジェイドは愛銃の

ジエイドストームを精神安定剤代わりに身体へ引き寄せる。

「ナストはシュウトの何たるかを分かっているいなね。表ばかり見て正当化を進めて。」

深層心理なんざと言いたく無いけど、

裏の本質には見ず知らずを通してるつもりなんだろ。

そもそもそれが間違いなんだよ。

自分が一番分かっているふりして、それで優越感に浸って。だったら僕の方がシュウトを良く分かっているとと思うよ。

いや、ウォルトの方と言ってもいいね。

あいつもスポークスマンを通じてシュウトを愛している。

未だナストが何を考えてるのなんて分かったもんじゃない」

少なくともこの言葉で分かるのは、

ジエイドは副団長であるナストを良く思っていない事だった。

そして、シュウトに対し普通以上の感情を持っている事。

「シリルの乱獲を許可すれば、諸々が動き出す。

それと僕をかち合わせて……嫌がらせにもならないね。

僕はそういうのは得意とするところだから。

でも、それしか無かったんだらうよ。

今回動くべき人材は、フレンズでありギルドナイトである僕が前に出なければ事が解決しないとナストは思ってたはずだ。

手紙の一つでも送ってやろうと思うよ。

多分嫉妬の一つや二つを増やす程度だらうけどね」

珍しく長文を喋るジエイドに

シュウトは黙って聞き入っていたが、

彼には内部問題よりも、もっと気にするべき事柄があった。

フレンズはこの程度で瓦解する組織ではない余裕があったのだ。

「大体事情は分かった。

そっちはそっちで上手くやっているんだろうよ。でも」

前置きの後、

身体を反らせて伸びをしつつ溜息に近い声を上げた。

「キョンファが何かぼけっとしてるんだけど、どう思うっ？」

それを聞いたジェイドは

何を言っているんだと言わんばかりに即答した。

「シユウトが好きなんじゃないかな」

その言葉は、シユウトの内心を揺るがすのに十分なものであった。しかし、薄々感じていたわけでもある。

「シユウトが好きで、僕らが来たのが気に入らないんだろうよ。

連れて帰るって言ったら面白い顔が見れるだろ。

あの子はシユウトと離れたくなくて、

この現状が揺らぐのが怖いんだろう」

その言葉を聞いても、

シユウトは曖昧に「いやあ、それでは……」を

返事を濁らせるだけ。

ジェイドは埒が明かないと言いたげに銃を振った。

「あのねえ。少し考え過ぎやしない？」

もう答えは出てたと思ってたんだけどな。

とはいえ、確証が無いならしょうがない」

ところで、さつき会ったんだけどさ、と話を『変えない』ジエイドは部屋の中央を指差した。

何事かとシユウトが見やると、

何やら紫色の光が部屋の中央に現れるのが見えた。

光は人間数人分の円を成し、まるで魔方陣の様な文字を含むその光の輪は回転しつつその光を維持する。

しばらくすると光は収まり、

その中から一体の人型をした物体が現れた。

シユウトは久しぶりに旧友に会った様な表情をした後、その人型に対して手を軽く上げて挨拶とした。

「よう、久しぶり」

シユウトとジエイドが集会所に戻る頃には、食いかけの料理はすっかり冷めているはずであった。

それでも、ハンター稼業などやっていれば冷めていてもちゃんと調理された料理はご馳走の部類に入る。続きを楽しもうとした二人に対し、クーが

「冷めたり腐らせるのは文字通りマズイからな」と言って空の食器を指差したのを見て

まずシユウトがクーを抱き上げ外へ連れて行き、

集会所近くにある温泉の湯汲み場に全力で投擲した。

ザッパアンツ！

という派手な音と共に湯へ叩き付けられたクーは

浮かび上がるなり慥然とした表情をし、

周辺に居た住民も飲み水にも使う場所へ

アイルーを投入した事への批難の目を向けるが、

食事を大事とする主義のシュウトには無駄な事であり

ジェイドは「おー」といつも通りで安心したと言いたげな声を上げた。

「あー。くそ。家帰って何か食うか。

じゃ、俺は帰るわ」

ふて腐れた様子でシュウトが帰ると、

イネアとアルストも自分の家へ。

シリルとジェイドも宿へ戻る事となった。

キヨンファもそれにならない家に帰ろうとしたのだが、

集会所を出たところで誰かに呼び止められた。

集会所の中からではなく、外の壁に寄り掛かっていた人物からだつた。

「キヨンファさんですかね」

不遜な態度から、何かシュウトに近い雰囲気の子であった。

金髪の黒目で、顔は結構良い部類に入る。

しかし何だか軽い感じというか、

シュウトやジェイドに近い何でもかんでも達観しているような雰囲気
気を

うつすらと感じたのは気のせいであろうか。

「ちよつと話したい事があるんですが、

付いて来て下さいって言っても……どうせ無理なんだろうな」

何やら言い回しが気に食わないのはキヨンファにも分かった。

生理的に否定的な反応をしかけたのだが、

次に言った言葉はキヨンファにとって

さすがに看過出来る事では無かった。

「俺はシュウトの友人なんだが、

これからあいつがどうするか……つてのを話したくてね。

もしかしたら、相方のお役御免ってところだ」

そのセリフにホイホイ釣られるキヨンファもキヨンファであるが、

今の彼女にとってそれは正体不明の胡散臭い男に

付いていく価値のある事情であった。

すぐそこだ。と男は言い、

集会所のすぐそばの坂を少し下った所で足を止める。

ここでもいいだろ。という口調に

シュウトと似たものを感じながら、

キヨンファは動揺など微塵も無いように装って会話に入る。

「で、シュウトがどうなるっていうんです？」

その言葉を聞いたはずの男は、

まず何から話そうか、と声に出してから崖に寄り掛かって話し始めた。

「いいか。要点だけ言う。

あんたは自分に素直になれ。

それがフレンズへの鍵だ」

「は？」

キヨンファが理解する暇も与えずに

男は話を続ける。

「というか、既にあんたは素質は持っているんだ。

まず一つ、シュウトを理解出来ている。

二つ、シュウトを愛している。

なら、お前はフレンズになれる」

「な、何を言っているのか分かりません」

いきなり理解だの愛だのという理屈も分からなければ、

フレンズという言葉も知らない。

だが、男はキヨンファの返答など無用と言いたげに続ける。

「それと、お前は今までハンターをやってきた。

だが、それでおかしいと思うべき事実にぶち当たらなかったか？

モドリ玉は何故あんな効力を持つ？

原理が不明なスキルは？

モンスターの生態については？

それらについて疑問を持たなかったのか？」

いきなり話を変えたこの男は、
いったい何がしたいのだろうか？

確かに、スキルやアイテム等に関して疑問を持たなかった事が無い
わけでは無い。

しかしそういう物だと言われればそれまでである。

例えばシリルはフルフルUシリーズの防具を身にまとっていた為、
電撃を受けても生き残る事が出来た。

それは単純にフルフルシリーズが耐電性に優れているからに過ぎな
い。

それを男に伝えると、

男は首を振った。

「違う。違うんだ。事実を事実として感じるだけじゃ世界は見えな
い。

そもそもフルフル……それだけじゃない。

モンスターなんてものがこの世界に存在すること事態がおかしい
って発想は！」

「そんな事を言われても、

私が暮らしているこの世界は『そういうもの』でしょう」

至極当然な返答をすると、

男は諦めた様な顔をした後に

次は仕方ないといった表情で唸った。

キヨンファにとって、

第一印象もその次も、何だか失礼な奴だとしか感じられなかった。

「じゃあ、仕方ないね。

でもこれだけは言っておく。

『世界は一つではない』ってね。

じゃ、良い夢を」

そつ男が言つと、突如彼の足元に紫色の魔方陣の様な物が現れ、回転する魔方陣の上で手を上げて別れを示した男は
魔方陣と共にシュンツと消え去つた。

しばらく呆然としていたキヨンフアは、
気を取り戻すとまず冷や汗が出そうな額を拭つた。

「な、何だつたの、あれ」

あんなアイテムは見た事が無い。

あれを言葉で表すなら、『魔法』と言うしかなかった。
この世にあるはずのないものを見たキヨンフアは、
しばらくその場に立ち尽くした後
混乱した頭のまま家へ戻つた。

さすがに、魔法を見たとは言えず

キヨンフアは先程の事は無かつた様に振舞つた。

シュウトは何やらかが不審そうな視線を送つてきたが、
自分だつて頭の整理が追いついていないのだ。

夜、睡眠すべき時間になつて

ベッドに潜り込んだキヨンフアは

冷静さを駆使して先程起こつた事柄を整理した。

まず、あの金髪黒目の男が言うには
自分はシュウトを理解し、愛している様に見えるらしい。

それは自分でも直視したくない事実ではあった。

いきなり知らない男から指摘されても

はいそうですかとなるわけがない。

とはいえ、そういった部分が完全に無いわけでも無い。

そこまで自分は自分に嘘を吐くタイプではなかった。

シュウトに直接聞かれたら殴っていたかも知れないが、

それでも「どうなんだ！」と詰め寄られたら

顔を真っ赤にして肯定してしまいそうな自分が居て、

それはそれで何やら複雑な気持ちであった。

決して嫌っているわけではない。

ただ、何か決定付けるきっかけが足りないのだ。

そしてそれよりも驚くべき事が、

スキルやアイテムその他に対して男が疑問を持っている事だ。

正直、自分とておかしいと思うべきところがあった。

モドリ玉もスキルも、この業界には不思議な面が多々あるのは理解
していた。

だが、この世界に暮らしている人間はほとんどがそれを

当たり前のものだと感じている。

自然的に信じているのだろうか。

今更竜は何故ブレスを吐くのかを

疑問視する声など、無いに等しい。

体内にそういう器官があるという事で説明がつくのだ。

では、自動マーキングなど原理不明のものはどうだろう。
これもハンター業界ではただの便利な効力としてしか捕らえられていない。

それが当たり前だからだ。

しかし、彼はそれを疑問に感じたのだろう。

そしてそれは自分も同じである。

キヨンファ・ヤンは

「自動マーキングは自動マーキングだから自動マーキングである」
などという思考停止をする人間ではない。

そういうもの、と返してはいたが、

内心は心揺さぶられた感が無いわけではなかった。

しかし、次にいった『世界は一つではない』というのはどういう意味だろう。

そしてあの魔方陣の様な物の事もだ。

まさか、空想物語でネタにされるような

『並行世界』とやらが存在するのじゃないでしょうね、と

そこまで考えたが、それは仮定に過ぎず

これ以上仮定を重ねてもそれは予測に過ぎないと理解したキヨンファは

早々に寝る事にした。

じゃ、良い夢を。

その言葉に、何か気味の悪さを感じながら。

自分の居場所が火山の奥地だというのに
初めて気がついたかのように、自分は汗を拭った。

暑さと緊張で頭がぼやける。

緊張が過ぎると自分が今何をしているのかすら
自覚するのが危くなる事を、自分はこれまでの人生経験で理解して
いた。

ここはどこだ？

火山の奥地、『決戦場』と言われる場所だ。

大きく開けた場所であり、古龍などがこの場所に降り立ち
ハンターと戦闘を行ったという情報がいくつか寄せられている。

自分は何をしている？

これも覚えている。

何の目的を持ち、この決戦場へ踏み入ったのか。

不意に、竜の咆哮と思われるものが大気を震わせる。

咆哮の方向を見やると、

一頭の黒き竜がこちらを睨みつけていた。

圧倒的であった。

離れているのに感じるその存在感も、
放たれる殺気も。

それに対する自分の恐怖も。

竜が首を反らす。

この決戦場に居る数十人のハンターの一人が、
「逃げろ！」と叫んだ。

真横に走り、間に合わないと思った自分は身体を投げ出す様に跳んだ。

それでかわせた自分は運が良かったのだろう。

回避が間に合わなかったレウスシリーズのハンターが
プレスに巻き込まれて吹き飛ばされ、
溶岩の中へ落下した。

叫び声は聞こえなかった。

もしかしたら混乱のあまり声すら出せなかったのかも知れない。

もがくようにしたレウスシリーズのハンターは、
そのまま溶岩に飲まれていった。

溶岩というものは、単純に高温で人を溶かすものではない。

大量の火山灰を含む為、溶岩に飲まれた人物は

身体を焼かれながらも飲み込んだ溶岩で内蔵も焼かれ、

火山灰により窒息するのだ。

ましてや耐火性の強いレウスシリーズならば、

今落ちた彼は焼死ではなく窒息死となるであろう。

今ならまだ生きているはずだが、

溶岩に入れる装備など存在せず見殺しとなる。

もう一人、ブレスの犠牲者はいた。

逃げる暇もなく直撃を喰らい、
バサルシリーズの防具ごと身体をずたずたにされて
壁に叩きつけられ絶命した。

あの竜にしてみれば息を吐いただけ。

それで二人のハンターがあっけなく死んでいく。

あまりにも圧倒的な状況に、自分とて。

いくつものモンスターを狩ってきたこの

シュウト・オオサワでさえも震えを隠せなかった。

「撃ちなさい！ガンナー！」

とある女ハンターの絶叫により、

我に返ったハンター達が攻撃を開始する。

その女ハンターはこちらに駆け寄って来ると、

俺の腕を掴んで上目遣いに泣き出しそうな声を出した。

「勝てるよねえ……！？」

俺はそいつの。イネアの頭を撫でてやって返した。

「俺だぞ」

そう言っつて、俺は着ているギザミメール以上の重みを感じながら
オンスロートを両手に走り出した

その日から、十数年が経っていた。

イネア・オオサワはあの時の戦いで利き腕を失った。

シュウトは辛くもあの竜を討伐したものの、

左目の上から右頬にかけて傷跡を残した。

イネアを守れなかった事に責任を感じたシュウトは彼女に付き添い続け、

それはしばらくすれば愛と呼べる感情を生み出した。ただの恋愛ではない。

シュウトにとって絶対的な、愛だ。

ほどなく子供も二人出来たのだ。

男の子一人と女の子一人。

どちらもシュウト似なのが問題だと、イネアは笑って言ったものだ。

二度とイネアの傍を離れないと誓ったシュウトは

すぐにハンターを引退。

伝説級の竜を狩った、伝説のハンターとして

子供に武勇伝を語ってみせたのだが、

いまいち信じてもらえず苦笑いしていた。

まあそれもそうだろう。

今はただの一般市民。

妻といちゃつくしか能のないぐうたらな親父だ。

もはや武勇伝と『なんちゃって哲学』を語るのみのシュウトであっ

たが、

予想外かつ望んでいた事が起きたのは子供が13歳になってからのある日だ。

彼らが住むポツケ村に、突如リオレウスが飛来した。

村は混乱状態に陥る。

村付きのハンターは街に出ていて偶然その場に居合わせなかった。

「母さん、早く！」

オオサワ家長男であるキヨウ・オオサワが叫ぶ。

長女であるハルヒ・オオサワも今にも泣き出しそんな顔でイネアを見上げていた。

だが、イネアは倉庫から一振りの片手剣を取り出す。

感慨深げにそれを見つめた後、子供達に「逃げてなさい」と言い残しリオレウスへと向かっていった。

「母さん！」

イネアが片手でレウスに切り込む。

利き手でないからか、まともにダメージが通らない。そうでなくとも、十数年のブランクがあるのだ。

レウスが飛び上がり、ブレスを吐く。

直撃はしなかったものの、

火球の炸裂に巻き込まれたイネアは吹き飛ばされる。

止めを刺そうと降りてきたレウス。

しかしイネアの前に一人の男が立ちはだかり、両手を広げた。

息子の、キョウ・オオサワだ。

キョウは全力で視線に怒りと殺気を籠めてレウスを見据えた。それを意に介した様子もなくイネア達に向けて突進するレウスであったが、突如横からの衝撃にレウスは大きく吹き飛ばされた。

どん、と地にハンマーを下ろしたのは、ギザミメールをまとったシュートである。

「キョウ、よくやった。俺の息子だよ」

「お、親父……何で……!？」

武勇伝を完全な与太話だと思われてたのに気付いたシュートは、苦笑いするとハンマーをくるりと回転させて上段に構えた。

「俺を誰だと思ってる……俺だぞ!!」

「キヨンファ。キヨンファ!」

自分を呼ぶ声に、ヤン・キヨンファは我に返った。

まれに、今自分が何をやっているのか。

自分が何者であるのかが分からなくなる事がある。

この時もそうだった。
自分の存在自体が不明瞭に感じて、
必死にその不思議な感覚を振り払う。

今この艦は、戦闘中だったはずだ。

場所は惑星ダイダロスに近い宇宙空間。

自分の役割はこの駆逐艦『朝比奈』のオペレーター。

第零艦隊特別部団『フレンズ』の

団長である大沢修斗中将付きの少尉である。

「状況！」

修斗が叫ぶ。

それに対しキヨンファはコンソールを操作して
数秒で敵の情報を獲得した。

「敵艦三隻。ギリウヴ級駆逐艦二隻とフィリウス級巡洋艦一隻。

どちらもランツ製で特に改造は見当たりません。

射程圏内まで後一分」

「ランツ製なあ？

自分達が対処出来るからって、

高性能機をばら撒くんじゃねー」

「海賊にしては豪華だな」

冷静に不平と分析をする修斗とナスト。

それに対し操舵手のウォルトが投げやりに声を上げた。

「で、逃げ切れんがどうする」

「やるしかないでしょ」

砲雷長のジエイドが微笑しながら返す。

修斗はテンションを徐々に上げながら手を前にかざした。

「対艦戦用意！まず指揮艦から落とす。

通信量計れ。機動は任せる。

第一主砲のコントロールは俺に。

魚雷とミサイル先制一斉発射後突貫！」

「だいじょぶかあ？」

適当な戦法に、ウォルトが苦笑いする。

「いつもの事でしょう。」

……通信量から、巡洋艦が指揮艦かと」

キヨンファの報告に満足気な表情をした修斗は、高揚した顔で戦闘命令を下した。

「撃ち方！」

眠りから覚めたキヨンファは
自分が何者か、ここはどこかを考える。

まれに、自分が何をしているのか分からなくなる時がある。

例えば、ドスランポスを狩りに行った時の戦闘中に

「今私は何をしているんだっけ？」となる事もある。

明らかな確定事項でも、まるで自分が世界から取り残された様な感覚に陥る時があるのだ。

ここは自分とシュウトの家である。

昨日はフルフルと戦い、

何やら怪しい人物と会話をした。

彼が言った「良い夢を」という言葉はこういう事なのだろうか？

キヨンファは夢の中で宇宙戦艦のオペレーターとなっていた。

そして、もう一つ。

シュウトやイネアと一緒に正体不明の竜に立ち向かい、

『片腕を失った自分がシュウトと結婚して暮らす』という夢を見た。

夢はただの夢だと、今までの自分なら思っていただろう。

しかし、『世界は一つではない』という言葉を出したキヨンファは

もしかしたら今の夢は並行世界の可能性の一つなのかも知れないと
考えられるまでになった。

しかし、それでもばかばかしい。

仮に並行世界が存在したからといって何だというんだ。

異世界から侵略者が攻めて来るとでもいうのか。

妙に寝起きのすっきりしている今日の朝。

シュウト達も起きている事だろう。

着替えを済ませて、リビングへ向かった。

シュウトとクーはテーブルの椅子に腰掛けて本を読んでいる。シズカが朝食を作り終わるのを待っているようだ。

「おはー」

しばらく一緒に暮らしていれば、シュウトの挨拶を聞くのも慣れたものである。

「キヨンファさあ、夢って見るほう？」

突然核心を突かれてキヨンファは表情を凍らせる。

夢、夢か。あの夢はやはり何かしらの影響を受けたものなのか？

「どうでしょうね」

とりあえず、はぐらかしておく。

まったく不思議な事が多くて自分とて困っているのだ。

シュウトは本をぱたりと閉じた。

「俺も今日変な夢を見てね。」

竜と戦って片腕無くしたイネアと結婚する夢。

……それで」

キヨンファが驚く暇も与えず、

シュウトは立ち上がり声を張り上げた。

「気をつけ！お前は誰だ。所属は！」

キヨンファはビクリと身体を跳ねさせると、完全に覚醒している頭を回転させるまでもなく反射的に答えた。

「は……はっ！ 第零艦隊司令付きオペレーター、ヤン・キヨンファ中尉です！」

思わず言ってしまったから、キヨンファは自分が何を言っているのかを考える。これは夢の話だ。しかし……

「どうしたキヨンファ。寝ぼけたか」

そんなはずは無い。

夢見は悪いものではなかった。頭の中はさっぱりと透き通るように冴えている。

シュートはキヨンファに向けて手を差し出す。握手を求めていると分かるまでに、そう時間はかからなかった。

「フレンズへ、ようこそ」

4章『不安と安心』（後書き）

5月4日更新予定が何故こんなにも遅れたか。

小説を書いた事がある人は分かると思うが、ぼんやりしている時ほどネタは浮かぶ。

何故ならばぼんやりしている時は大抵なにがしかの妄想に浸っているからだ。

ならそれを書けばいいのだが、PCを前にすると

一気に頭の中がぐだぐだとした感覚になり

今まで妄想していた事などすっかり忘れてしまう。

これはPCに向かう行為に何らかのそういった作用が加わっているか、

PCから人間へ与えられる電波は予想以上に強力な物なのかも知れない。

おそらくこれは改善される事なく、

自分はずっとこの調子で小説を書き続けるのだろう。

言い訳はともかく、一応このにじファンとやらでは初の更新。

とくれば、後書き機能を使わざるを得ない。

展開は強引。突飛。行き当りばったり。

だがそれでいい。この小説は前書きの通り娯楽では無いんですよ。

もし娯楽目的だとすれば、キョンファとの出会いからここまで経過した時間。

それに起こった事を逐一描写すべきなんです。

でもそれをしなかった。何故か。俺の頭が悪いから。

先にぶっちゃけますと、書き始めのこの段階で既に

この作品をリメイクする気まんまんです。

完結したらすぐリメイクに入るんじゃないかっていうぐらいに。それほど、過去の自分と今の自分には変化　　というか齟齬に近いものがあります。出来れば、大幅な修正は避けたいのですがどうなる事やら。

今回の最後辺りから Friends 本編とのリンクが垣間見えます。世界だの宇宙戦艦だの魔法だのモンハンにあるまじき展開ですが、あくまで本編とリンクする為のものであって

このモンハン編にSFや魔法要素を持ち込む事はおそらくありません。混乱させたでしょうが、これからも普通にモンハン世界を書いて行きます。

では、

また後ほど……

5章 『友人と世界』

「説明を要求します」

何やら謝罪と賠償まで要求されそうな口調でキヨンファが言う。

どうしたものかと考えるまでもなく、

シュウトは一つ息を吐いてから席に座り直した。

シズカが朝食を運んでくるのを

まるでア리가地に落ちた飴に列を成す事ぐらい当然に思いながら、シュウトは脱力した様子で背もたれに寄りかかった。

「まあ、なんだ。まず異世界の話からいこうか」

「異世界なんてものがあるっても？」

キヨンファが聞くが、

シュウトは思わず微笑になりかける。

「そういう物言いをするって事は、

薄々感付いてるって事だろ」

さすがにこれに気付かないわけがないか、とキヨンファは思う。

こいつは頭が良いわけではないが、部分によってはバカではないのだ。

ある意味では、シユウトは私が考えているのと同様の評価を私に見出しているのかも知れない。

普通の人なら異世界の単語を聞いた時点で「ありえない」と思考停止するのだが、

私がそのような頭の悪い人間ではないと理解してくれているのだろうか。

「異世界や並行世界ってのは実在する。

世界ってのは無限的に存在するもんだからな。

例えばSFでロボットや宇宙戦艦に乗ってる俺達もいるだろうし、魔法が実在する世界でファンタジックな事をしている俺達もいるだろう。

問題はそれを証明し、行き来出来る様にする事が出来るかだが……

お前は会ってるだろ。昨日の男に」

「あれはあなたの友人だつて言っていましたか」

「ああそうさあ。俺の友人の一人であり、

異世界から来た。

ちなみあれは純粋な人間ではなく、いわゆる機械人間だよ」

頭が痛くなってきたので、

キョンファは表情をジト目にさせた。

いきなり異世界からの機械人間がやってくるなど、まるで本の中の物語だからだ。

「どう見ても人間でしたが」

「そりゃあ、機械人間がうるちよろしてたら目立つだろ。

人間に化けるぐらいの事はするさ」

奴がこの世界に来た目的だが、と言いながら
シユウトは食事に手を付け始める。

「簡潔に言うと、あいつは世界間の自警団みたいなものでな。
色んな世界に行つて、その世界を調律しているみたいなんだ。
そして異世界での俺とフレンズは世界と世界を自由に行き来出来
るらしくてな。」

そういつた世界間のバランスを崩しかねない奴を追っているんだ
と」

「フレンズとは？」

「俺が親友を集めて創つた団体。
この世界では獵団アークス内の上層部つてなってる。」

お前が知ってるのはジエイドだな。あいつもフレンズ団員だ。
今の俺は世界移動能力を持たないけど、

別世界の俺は異世界を転々として好き勝手やってるらしい。
だから昨日の男みたいな奴が俺を監視にやってくる……と、大ま
かな話だよ」

「ちよ、ちよつと待って下さい。」

獵団アークスつて、あのアークスですか……！？」

獵団という組織に興味がある者なら大抵は知っているだろう、
有名かつ高名な獵団である。

ダルタロスという街に本拠を構えているものの、
ドンドルマやミナガルデといった大都市ならば耳にする事はある。
規模の大きい組織だけに良い噂から悪い噂までピンキリではあるが、

一般的には評判の良い優良な猟団だという話だ。

「あのも何も」

シユウトはあっけらかんとした表情で言う。

「俺がアークスの団長だよ」

キョンファはしばし絶句した後、

まずシユウトを疑い、自分の耳を疑い、

そもそもアークスという組織自体の存在が実在する物なのか疑い、最後にはこの世界が非実在の世界なのではないかと疑ってから

「俺、嘔吐かない」と言いたげな堂々としたシユウトの顔を見て十数秒後にやっと観念する。

「だったら、何でこんなところ居るんですか」

「そりゃあ、前にも言った通り

色々問題起こしてハンターランクを降格されたんだよ。

ここへ来たのも左遷みたいなものだ。

いや、自粛と言った方がいいか。

ウチの団は色々不穏な噂を受けてるから、

あまり大きな行動は起こせなかったんだよ。

しばらく猟団としてはおとなしくするつもりだった。

まあ、予定は早まりそうだけど」

微妙に理解しにくい部分もあるが、

一応理由としては筋が通っている。

フルフルを乱獲したシリルの様な存在も居る事であるし、

アークスも実際良い面ばかりでは無かったのだろう。

「要約するとだな。」

俺はフレンズという団体を元に創ったアークスの団長で、異世界や並行世界というものは実在して、

昨日の夢は並行世界の可能性の一つで、

昨日の男は異世界から来た世界の監視者ってこった」

「ファンタジック極まりない」

そうキョンファが言うと、

シュウトは少し捻ったジョークに気づいた様に笑う。

「別世界で同じ様な事を言った奴が居てな……」

まあ、異世界の話はここまでだ。

仮に、この俺達のやりとりが異世界では小説やアニメになってたとしたら、

モンスターハンターの二次創作を読みに来た読者が混乱するだろ。

これはオリ小説の Friends 本編じゃなくてモンハン小説なんだから」

「そうしたらこの会話はメタ発言に　　って、ちょっと待って下さい」

呆れた表情で話していたキョンファがふと違和感に気づいた。

シュウトの台詞をもう一度反芻してみる。

「今、アニメって言いましたよね。」

この世界にはアニメなんて無いのに、何故私は

アニメってという言葉を理解出来てるんです？」

「それが、並行世界の記憶だよ。

宇宙戦艦のオペレーターになった夢も見ただろ？

SFやらファンタジーやら21世紀やらの記憶が断片的に流れてきたんだよ」

なるほど。

そう言われてみれば、この世界には無いアニメとやらを自分は見た事がある気がするし、

SF世界では自分はオペレーターをやっていたのでコンピュータ関係も上手く扱えるのだらう。

「不思議……では無いですね。

何故か自然な感じですよ」

頭がパンクする様な感覚に陥るわけでもなく、

自然に並行世界の記憶がフツと湧いてくる。

それはごく当たり前の事に感じられた。

「それで、だ」

シユウトはガタツと席を立ちテーブルを回り込んでキヨンファの隣に立つ。

そしてキヨンファの手を両手で握ると、

高揚と真面目の混ざった真剣な表情でズイツと詰め寄った。

「キヨンファ、好きだ……！」

「はっ!?!」

突然の台詞に一瞬理解が遅れたが、
数秒後にはキヨンファは「あ……う……」と言葉にならない声を上げて赤面した。

「何でとは言わせねえ。」

お前が夢で見たように、異世界の俺達はそういう関係か
そうでなくともフレンズに入ってた。

お前も、フレンズになれ」

フレンズ。

この世界では獵団アークスの上層部であるが、
それ以前にシュウト個人の『親友達』であるのだ。

シュウトの基準でいう親友とは、

一生を共にする事が前提の
いわゆる愛にあたる。

しかし、このシュウトの言葉が

単なる友情を求めたもので無い事にキヨンファは気づいていた。
恐らく、友情という意味の愛情以外にも
恋愛的な愛も含まれているのだろうと。

それに気づいた時、キヨンファはふるふると震えまでしながら
心臓を高鳴らせ顔を赤くさせてしまった。

「で、でも、シュウトだってイネアとくっついた世界もあるわけだ
し……」

「それでも!」

シュウトはキヨンファの肩をガシツと掴むと、
お互いの吐息がかかる位置まで引き寄せた。

「それでも、お前がいい」

別にシュウトは顔が良いわけでもなければ、
取り立ててモテる要素があるわけでもない。

しかし、キヨンファは何故か自分がシュウトに惹かれるのを止める
事が出来なかった。

目の前に居る彼の変人的な性格もだ。
出会ってからしばらく、あらかた彼を理解したつもりではあるが、
それにしてもまだ怪しい部分が多いこの人物の言葉に
何故か首を縦に振りたくなる衝動を抑えられなくて、
首をカクリと動かしかけた時に
意外な方向からの声を聞いた。

「そうか。私はダメなのか」

シュウトとキヨンファが声の方向に同時に首を向ける。

見ると、クーが食事に一切手をつけずに視線を宙へ向けていた。

「……………あー」

シュウトが言葉に困った様子で、
キヨンファの肩にかかる手を少し緩ませた。

「私もテイナもアヤもユリも、ラトウ……………いや、これは特別か。
まあ、それらは結局有象無象だったという事か」

「いや、それはフレンズであって……」

「なるほど。今まで私やフレンズ団員にしてきた事は全て友情の範疇に過ぎなかったのか」

いつの間にかキヨンファから手を離していたシュウトは、キヨンファと目が合うと両手を軽く広げておどけた仕草をして見せた。

キヨンファは視線を逸らして冷静さを取り戻そうとしつつ、「考えておきます」と返しておく。

シュウトはキヨンファの頭を軽く抱きしめて撫でてやると、いつもより優しそうな雰囲気を漂わせつつ食事に戻った。

うつむ。どうなのだろう。

シュウトは食事を再開し、向かい側に座るキヨンファをちらりと見やりつつ悩む。

多分、この気持ちは恋愛感情なのだ。

フレンズという親友達の中には女も居たし、その女の親友とそういう関係になった事も 無いわけではない。

しかし、キヨンファ・ヤンという人物に対しての感情は今までのフレンズとは違う感覚なのだ。

少なくとも、俺が今一番特別扱いしている人物はキヨンファなのだ。

何故彼女なのかは分からない。

だが友情にしろ恋愛にしろ、

自分が彼女と一生来の付き合いをする事は決定している。

それは自信を持って言う事が出来た。

そうでなければ、告白などするものか。

今のシュウトには、国や世界など関係無しに

キヨンファの事しか考える事が出来なかった。

朝食を終えた面々は、さてどうしたものかと予定を考える。
ハンターというのは普段の生活において暇人であるからだ。

農場の手入れは村のアイルー達がやってくれるし、

家事はシズカの仕事だ。

道具の買い出しなど数分で済む。

とすれば、後は村人と同じ様な仕事しか残っていない。

だがそれはハンターとしての仕事ではなく、

村の護衛も兼ねている身としては

素振りでもしていたほうが有意義である。

「そういえば、ジェイド達がどうするのか聞いてなかったな」

暇つぶしの理由を見つけたシュウトは

とある構想の為に再度集会所に皆を集める事にし

各メンバーに昼食時に集会所集合との連絡をした。

もちろん、ジェイドのおごりと称して。

ジェイド、シリル、イネアを集めた集会所で
シュウトはまずアークス団員の予定を聞いた。

そして呼んだわけではないが、
アルストもその場で食事をしていたので
同じテーブルへとついた。

別に家で食事していてもよさそうだが、
ハンター稼業が忘れられないのだろうか、
彼は集会所が自分の家かのようにくつろいでいた。
あるいは、シュウト達が集まる事を見越して
ハンターの会話を聴いていたのかも知れないと、
シュウトは漠然と感じていた。

「お前らは帰るのか？」

シュウトが聞くと、ジェイドは「いいや」と返す。
彼が座る椅子には、ジェイドストームが立って掛けられていた。

ハンターは自分の職種や力量を示す為、
また突発的な依頼にも対応出来るように
集会所や酒場等には武装したまま入る事が多い。

ジェイドのレザーライトSは他の装備と比較しても
軽装である事から着る手間も少ないし、
彼は常に銃を傍らに置く銃器オタクである為完全武装となっている。

シュウト達は家が近く田舎である事も相まって普段着である。シリルは当然ながらフルフル装備であり、ハンカチサイズにしたブヨブヨした皮を口元に当てている。

「どうやら僕はナストに使われただけだったみたいだからね」

「使われた？」

シュウトが聞き返すと、ジェイドは無表情のまま答える。

無表情とは彼にとっていつもの表情であるが、恐らく良い気分で話しているのではないとシュウトは文脈で判断した。

「事後処理とか、色々な『処理』をしろって事だよ」

「ああ。そう」

シュウトはそれだけで納得すると、それ以上の追究を止めた。

昨日の今日で、誰がどこで耳を澄ませているか分からないのだ。まあ、知られたならば正面から返り討ちにするだけなのだが。

「シリルも役割は終えたみたいだしね。だとしたら、一旦戻ってもいいし。」

とりあえず僕はここに残るけど、シュウトのパーティに進んで入る気は無いよ。

団の仕事でもしてる」

「そこで提案なんだが」

シュウトが誰にともなく宙を見上げながら言う。
という仕草であっても、発言の相手は決まっているのだが。

「ジエイドとイネアさあ、パーティ組まない？」

常についてわけじゃなくて、気が向いた時でいいんだ。

何かちよっと手に余るものがあつたら、その時は組んで出ようよ」

その言葉を予想していたらしいジエイドは、

特別な反応を起こすわけでもなく「あー、いいよ」と返す。

意外そうな顔をしたのはイネアだった。

「なんで私があんた達と組まなきゃいけないのよ」

そう言ってみせるイネアだが、

彼女の性格上それが本当に本音なのかは疑問だからして、
シュウトはにやりと笑うとちよつとした賭けに出た。

「話は変わらないけど、

俺将来の子供には『キヨウ』って名づけるつもりなんだ」

「なっ……!？」

そう言うと、イネアは驚いた顔をしてから
みるみるうちに顔を赤くさせていった。

それを確認したシュウトは意地悪そうな笑みを浮かべながら
イネアをちらりと見やる。

「どうかした？」

「べ、別に！」

っていうか、どうしても組みたいって言うなら……

その……嫌じゃないけど……」

「なら決まりだ」

イネアの反応を見て、

キヨンファはまずシュウトに対する認識が甘かった事に気付かされた。

イネアもあの夢を見たのだろう事は

この反応を見れば確実であろう。

しかし、シュウトが先程自分に言った

「お前がいい」というセリフに込められた想いは

恐らく本物だと感じた。

だからこそ怖いのだ。

彼の言う「好き」という言葉と感情はキヨンファだけの物ではなく、誰にでもありえるのではないか？

シュウトの事だ。

ハーレムを作って、

「お前ら全員好きだ。まとめて好いてやる。責任は取らないけどな
！」

くらいの無責任な行為をしかねない。

そうすると、キヨンファは複雑な気持ちになる。

私が離れたら、シュウトは代わりにイネアを好きになればいい。自分の代わりなどいくらでも居そうだと思った。

そこでキヨンファはふと新たな疑問を感じた。

シュウトは嘘を吐かない。

そして、「それでも、お前がいい」という言葉。

つまりこの言葉は本音なわけだから、シュウトにとって私は特別な

考える内に昨日の機械人間のセリフや

今までのシュウトの姿がぐるぐると頭の中を巡り、

キヨンファは頭がパンクしそうになった。

頭が良くても、容量や感情の制御はまた別個の話なのだ。

「どうした？」

シュウトがキヨンファの異変に気付く。

ポーカーフェイスを装っていたのだが、

それは失敗したようだ。

「いえ、なんでも……ないです」

シュウトは相変わらずの敬語に不満そうな顔をしたが、

キヨンファはそれにすぐ気付いた。

そして、とある結論に至った。

私は、この変人を。

シュウトを理解出来ている。

ならば、フレンズになれる　！

つまりは、そういう事であった。

ジェイドが受付へ向かうのを見て、アルストはシュウトに世間話を装って話し掛ける。つまり、ちよっとした疑問の探りを入れた。

「ジェイド君、かなり腕が立つみたいだけど付き合いは長いのかい？」

シュウトは普通に返そうとしたが、まるで自分が褒められたかのような雰囲気が見られた。その事から、フレンズを本当に信頼しているのだなと隣に居たキヨンファは察する事が出来た。

「長いつて言っても、俺達あまだ18ですからね。フレンズにゃ絶対的な信頼はありますが、5、6年を長いと思うかは知りやあせんよ」

「なるほ……ど……おお！？
え、彼は18なのか！？」

思いがけない情報にアルストも戸惑う。まったく別のベクトルで驚きの話だ。

「フレンズは大体18くらいですよ。
ジェイドは童顔入ってるんで、15くらいに見えましたでしょ？」

「少なくとも年下だと思ってた……」

キヨンファとイネアもそう驚く。

この大陸の人間としては身長が低い方であるし、顔立ちも幼く見えたのだ。

「ふむ。フレンズはそれほど年齢差が無いのか。ならば団長で居られるのも頷ける」

「まあ、それも微妙に関係するんでしょうかね。

自分としては年の差なんて気にしないと思うんですが、やはり同年代ってのはやりやすいのは事実ですね。

……って、あれ？自分団長だっけ言いましたっけ」

「ん。ああ。何となくそんな感じがしたただけだね」

そこまで話して、シュウトとキヨンファはアルストの洞察力の高さに気がついた。

これは誘導尋問だ。

ジェイドとの付き合いから、

フレンズ内部の状況までを聞き出している。

ジェイドやシリルが言ったのでなければ

シュウトが団長である事すら知るはずがないのだが、それすらも看破している。

ここでシュウトは、ドスガレオスの情報をアルストから聞いた時の事を思い出した。

あの時この人は何と言っただろうか。

うん。油断しないで冷静に行けば大丈夫だ。……シュウト君もいるしな。

あの時からか。

あの時から、アルストはシュウトが
アークスやフレンズの団長だと気付いていたのだろうか。
もしそうなら、それは尋常ではない。

シュウトはアルストにある種の感銘。戦慄とも言える感情を覚えた。
この人は、物凄く『頭の良い』人だと。

(自分より頭の良い人間ってのは、やりにくい)

嫌いではない。

むしろ好きな部類であるが、反応に困るのだ。

フレンズ団員を始めとする人物は、
大抵シュウトと同じくらい頭が良い。

これは暗記の勉強が出来るかではなく、
物事を自分で突き詰めて考えられる思考能力と洞察力の話である。

シュウトとしては、短絡的に思考停止している

『典型的な今時の若者』達に比べれば自分は頭の良い方だと自負している。

しかし、そういった意味で自分より頭の良い人物との会話や議論は自分が全て見透かされている感じがあり得意ではない。

それに加え自分とて感情的な面が無いわけではないし、直感的直情的な部分も多いので

自分を上回る『理屈屋』とは相性がよろしくないのだ。

自分よりも年上の大人。

それを知識で示されるよりも思考能力で表されるのはなるほどと感心出来る部分もあるし、

こういった人間が居るとするのは

世界の未来が明るく見えるので良い事ではある。

ただしシュウトは自分を誰よりも信頼しているし、ぶっちゃけた話自分を神だと思っている節もある。

その神が、そこら辺の一般人に頭の良さで劣るといっものは認めたくない物であったのだ。

シュウトが反撃としてアルストの情報を聞き出す方法を

頭の中でぐるぐると考えていると、

ジェイドが受付から戻って来る。

ジェイドと会話をしていたはずの受付嬢が何やら笑顔で居たが、それが何の意味を持つのかというのはだいたい後の話になる。

「手間が省けるといっつか何といっつか……」

そんな台詞をジェイドが言い出したので、

シュウトは誘導尋問から逃げるかの様にジェイドへ聞き返した。

「何だって？」

「今度は沼地でゲリヨスが大量発生だつてさ」

それを聞いた全員が怪訝そうな顔をする。

フルフルに続きゲリヨスまでもが異常発生するとは、偶然にしても珍しい事だ。

何にせよ、数が増えすぎたなら

適度に狩り取らなければ被害へと繋がる。

今頃各ギルドでは現在のフルフルの様に

ゲリヨス狩猟のクエストが殺到しているであろう。

「で、例によつて今回も……ねえ」

シュウトとシリルが「あー」と声を上げた。

それを見たイネアが聞きたいような聞きたくないような口調で言う。

「まさか、今度はゲリヨスオタクがいるとかじゃないでしょうね」

「ポンピン、そこのうり」

「うっわー」

シュウトの返答に、イネアは言葉も無いといった雰囲気を示す。

「あなたの獵団つてまともなの居ないの？」

「少なくとも俺がまともな部類に入らないんだつたら居ない。

……さて、じゃあ準備するかー」

キヨンファの「行く事が前提になってるんです?」という視線を手で制し、
シュウトは立ち上がって声を挙げた。

「よし、じゃあ一緒に行く人手え上げてっ」

「子供か。僕はカルを帰らせなきゃいけないから行くけど、シリルは?」

「私もどうせ帰らなきゃならないから一緒に行くわ」

「よし、決まりだな。」

「じゃ、イネアはお留守番って事で」

とんとん拍子に進む話に、
イネアが不満の声を挙げる。

「何だよ！私も受けるに決まってるでしょう!」

「えー。でも村の守りが」

「元々私は村付きのハンターじゃないのよ。」

「それはあんた達の役目でしょう」

そう言うイネアにシュウトは困った顔をする。
さすがに村を空けるのはまずい。それは分かる。

となれば、代わりに村を守ってくれるハンターを呼べばいいのだ。

「うーん、じゃあ……出るおおお！シャイニングウォルト！」

カムヒアアアツ！」

唐突にシュウトが叫ぶと、
集会所の窓から誰かが勢いよく飛び込んできた。

鈍い黄色の忍者の様な服を着たその人物は派手な音を立てて受身を
取り、
反動で跳躍して宙返りをしズザアツとこれまた派手に着地しポー
ズを決めた。

「お呼びでなくとも即参上！」

「ま、また変態が……」

イネアとキヨンファが突然の闖入者に驚くのを無視し、
シュウトはその人物の肩に手を回した。

「言ってなかったけど、前から俺に付いてる団員」

「フレンズのウォルト・セル・フェロー。まあよろしく。
後、俺はまともな方だぞ」

そう言う鈍い金髪に黒目の男、ウォルトは
手を上げて見せる。

「今までは本部との連絡役とかやってたけど、
村はウォルトに任せとけば大丈夫だろ」

「んー、まあジェイドか俺かのどっちかが村に居なきゃならないし
な」

「ともあれ、これで問題は無くなったわけだ。
さ、ゲリヨス狩りの準備始めー」

かくして、沼地に向かう事になった一行は
準備の為各自の家に戻る。

集会所を出た所で、ウォルトがシュウトに顔を寄せた。

「多分、フルフルもゲリヨスもベノムが関係してると見ていいな」

「サラディンが音頭取ってんのか。まったく」

その会話を聞いたキヨンファは、

話の内容を詳しく知りたいという欲求があるのに気付いた。
フレンズになれば、彼らの話についていけるのだろうか。

シュウトを始めとする一行は、クルプティオス湿地帯と呼ばれる沼
地へ到着する。

キヨンファがシュウトに聞いた話では、

ウォルトは相当腕の立つ人物なので村の守りは問題ないらしかった。

彼は猟団の中でも諜報員としての役割であるらしく、

驚く事にシュウトの装備が届いた辺りからずっと

家の屋根裏等に潜伏して過ごしていたらしい。

自称忍者であるらしいが、

何故わざわざ屋根裏なんぞに隠れて今まで出てこなかったのか。

彼は色々あるんだと言っていたが、

いったい何がどうなっているのかキヨンファにはさっぱり分からなかった。

第一、彼は今まで自分達の行動を逐一監視していたらしいから気味が悪い。

まるで軍の密偵ではないか。

とは思うものの、そこまでするという事は

シユウトやその周辺は監視が必要なほどの問題を抱えているという事になる。

それがいったい何なのかは今のキヨンファには判断できないが、フレンズに加入すればそれも分かる様になるのだろうかと思悩むものだ。

「しかし、そんな簡単に見つかるんです？」

キャンプで支給品を分配しつつ、キヨンファが言う。

シユウトは自分の分の解毒薬をポーチに入れながら返した。

「んー。まだ狩り場に居るらしいから、

うるついでれば見つかるんじゃない？」

もしすれ違っても街で会えるだろうし」

どうやら探しているアークス団員は現在ドンドルマを拠点にしているらしく、

もしここで会えなくともドンドルマまで行けばいいだけの話だ。

村で待つウォルトには悪いが、彼が居れば大丈夫であろう。

せっかく田舎を出てきたのだ、街を回るのも悪くない。

村付きのハンターとしてはどうかと思う判断ではあるが。

「狩猟が終わり次第落ち合っんですから、信号弾は要らないんじゃないんですか」

「念の為だよ」

シュウトが連絡用の信号弾を荷物に加えながらキヨンファに返した。

このままだと五人の狩りになるだけでなく、探している団員が見つかった場合六人になるのでシュウト、キヨンファ、イネアのチームとジェイド、シリルのチームに分かれていた。分散した方が探しやすいし、ジェイドとシリルは腕の良いハンターなので二人でも問題ない。

「ジェイドは問題ないだろうけど、俺らはそうじゃないからなあ」

「随分信用してるんですね」

「そんなに強かったっけ？」

キヨンファとイネアも、シュウトのジェイドへの信用はかなり大きなものに見えた。前回のフルフル戦では一回しか射撃してないので実力はよく分かっていない。

確かに、あの射撃は正確なものであったが。

「信用？信頼だよ」

キヨンファはふと、複雑な気持ちになった。

信用と信頼の違いは辞書で引けば分かるが、大抵の人物は混同しがちだ。

だからシュウトも例に漏れず言葉遊びの類かと思われた。

そう考えると、まるで無邪気な子供を見てる気がして心が緩んだ。

しかし、もしシュウトが自分の思った以上に頭の良い人物なら、

この信用と信頼という言葉の違いは大きなものであるだろう。

そうした場合、逆に彼は恐ろしい人物なのではないか。

その紙一重の言葉が、シュウトの関係者として微妙な立場であるキヨンファを揺るがせた。

「あれ？ゲリヨスって尻尾切れたっけ？」

「おいこのバカの極みどころにかしろ」

「ちょっと忘れただけじゃない！」

その点では、こんな感じにキヤアキヤア騒いでいるイネアがある種うらやましく思う。

はつきり言ってしまうえば、

キヨンファから見てイネアはバカだと思う。

少なくとも頭の良い人物ではない。

しかし、あの夢をイネアも見たとするならば

彼女もまたフレンズとなる人物なのだろうか？

少なくとも、自分と同列の人間とは思えない。

フレンズは獵団アークスの上層部であり、
シュウトの私的な親友達の総称。それは分かる。

フレンズとはそれだけじゃないはずだ。

彼の友人にあるべき何かが存在する。

だが今の自分はまだそれに気付く事が出来ていない。

私は『達観者』ではないのだ。

そこまで考えて、キヨンファは最後の一欠片が

すぐ傍まで迫っている感覚を覚えた。

しかし、それにどうやって辿り着くのかは分からない。

「キヨンファ……どうした」

呆れた顔でシュウトが声をかけてくる。

どうやら、自分は自分の予想以上に感情表現が豊からしい。

「いえ。探している団員はどんな人なんです？」

「うーん。あいつは時によって装備変えるけど、

多分ゲリヨスUシリーズにヘビィボウガンだと思うよ。

髪と目は青で、歳は23。

名前は『カルケイノ・パス・ト・カルバライト』

通称はカルって呼ばれてる。

まあそんなところ……で、どうした」

適当な答えを言えば話題が逸れるかと思ったがそうではなかったよ
うだ。

シュウトという人物がこれほどの洞察力を持つとは。

「……フレンズというのがよく分からなくて」

キョンファが正直に答えると、

シュウトは少し考える素振りを見せた後に一言。

「俺と付き合えばいいじゃないか」

「だからっ、そういう事じゃなく!」

言葉や事が理解が出来ないのは辛い事。

さらに辛いのは、概念が理解出来ない事。

それを知っているシュウトはなだめる様な目つきで返した。

「恋愛的な意味はもう少し後でもいいから、

俺という人物に近づいて、俺という人物に触れて、

それからじゃない。そういうのは。

習うより慣れろってのは好きじゃないけど、

入ってみなきゃ分かんないもんだってあるよ、そりゃあ」

「そんなもんでしょうか」

「少なくとも、人を知りたいと思うのは当然だと思うよ。

相手が俺ならなおさら。俺と関われる奴は幸せだよ」

そういう事をはっきりと言ってしまったところから、

彼は自分の理解を超えているのだろう。

しかし、理解出来ないものを否定して得する事などない。

それは、分かっている。

「理屈で話せ。感情で動け。」

俺の事、好きだろ」

そう言っつてシュウトはキョンファの頭を片手で自分の胸に引き寄せ
て抱く。

これなのだ。

普通、「好きだろ」とは言わない。

「嫌いか？」と聞いて相手が「ううん、嫌いじゃない」と返すのが
普通だろう。

シュウトはそんな人物だろうか。

どっちにしろ、心を引かれるのだ。

「ねー！山菜ジジイにもえないゴミあげたら特産キノコくれたよー
」！

「なんでゴミ持ってんだお前は！？」

山菜ジジイとは狩場に出没する謎の人物で性格は気まぐれ。

気分が良ければアイテムをくれたり交換してくれたりするのだが、
イネアはそのじいさんと話し込んでいたらしい。

今の会話を聞いていなかったのだろうか？

「……まあ、とりあえず狩りに行くぞ。

ジェイド達ならもう終わっててもいいくらいの時間だ」

「ようし、私のショットボウガンが火を吹くわ！」

今回、イネアはライトボウガンである

『シヨットボウガン・白』を装備していた。

ドスギアノス系の武器であり、

散弾LV1の速射が可能だ。

ゲリヨスには散弾が有効だという話をシューウトがすると、

イネアは意外と素直にこの武器で挑む事にした。

元々イネアは武器を使い分けるタイプなので

この武器も持っていたそうだ。

ただし、散弾は文字通り弾が散らばる為

味方を巻き込みやすい。

「こつちに当てるなよ」

「多分大丈夫！」

自信の無い根拠に不安になりつつ、

三人はゲリヨスと団員を探しに向かった。

聴くまでもなく、銃声が響き渡つたのを聞いた三人は
ゲリヨスが居るはずのエリア4の方を見やった。

「カルかな」

「ペイントの臭いがしませんか？」

銃声は続いているが、ペイント弾の臭いはしない。

自動マーキングには大型モンスター二匹の気配があるのだが。

「行動パターンを読んでもらうんだろ。
慣れればペイント無しでも分かるさ」

別に待つてもいいんだが、とシュウトは頭を掻く。

「ま、行くか」

エリア4に入ると、

一人のハンターがゲリヨス二頭を同時に相手しているのが見えた。

ゲリヨスはイヤクックと同じ鳥竜種であるが、

飛竜の基本的な行動パターンを網羅しているイヤクックに比べ
この竜はトリッキーな動きをする。

翼に細長い尻尾。身体を支える堅い足はイヤクックと同じだ。

しかし身体の皮膚はゴム質であり、

ハンマーなどの打撃攻撃は通りにくいし雷系統の属性も効果が無い。

炎ブレスの代わりに毒液を吐き、

トサカの石を打ち鳴らす事によって閃光を発するという
少々厄介なモンスターである。

しかし、リオレウス等の飛竜に比べると

それほど力も体力も無く、

比較的にはイヤクックの次に狩りやすいモンスターと言える。

だがそれでもモンスターという生物は

人間の身体能力を遥かに上回る。

大型モンスターを同時に二頭相手にするというのは
G級ハンターでも簡単に命を落とすに値する行為だ。

だというのに、あのハンターはそれをやってのけている。

ずんぐりむっくりしたゲリヨスUシリーズのハンターは

片方のゲリヨスに向かって散弾を叩き込む。

どうやら頭のトサカを狙っているらしい。

弾が切れてもすぐにリロードはせず、

ゲリヨスが攻撃してくるのを待つ。

そしてゲリヨスがついばみをしてくるや

へビィボウガンの重さに身を任せる様に懐に転がり込み、リロード。

後は、再び距離を取って散弾を撃ち放す。

すると、片方のゲリヨスが怒りだした。

口からは紫色の息を吐き、目は赤く充血する。

「お、あつちはトサカ壊れてるな」

ゲリヨスが怒り状態になった場合

閃光を発する為のトサカが発光するのだが、

今怒りだしたゲリヨスはトサカが砕けていた。

あれを破壊出来れば、閃光は出せない。

そして頭の破壊に最も適した攻撃方法が散弾だと言われている。

お互い動き回る戦闘中に弱点を狙撃するのは難しいが、

散弾ならその攻撃範囲の広さで簡単に命中させられるからだ。

「ショットボウガン……」

「もう片方居るだろ」

役目を取られて見るからに意気消沈するイネアをなだめ、シュウト達は観戦を続ける。

怒りだした片方のゲリヨスは、ピョンピョン飛び跳ねると、羽ばたいて他のエリアへ飛んでいった。

「よし、加勢するぞ。」

そこら辺に毒沼があるから入るな。

散弾で頭を壊したら俺とキョンファが斬りかかる」

「ええ」

「あいつは？」

イネアがアークス団員を指す。

「俺が話す。」

……カル！こっち来い！」

そう言つて三人は戦線へ飛び出す。

シュウトはアークス団員を手招きして呼び寄せた。

アークス団員のカルケイノ・パス・ト・カルバートは
ヘビィボウガンを畳むとゲリヨスの攻撃をかいくぐりこちらへ向かう。

「シュウトか。別に手を出さなくてもいい」

「そういうわけにもいかんのよ。」

「ゲリヨス一匹っていう契約だからね」

「証拠ならくれてやる。ゲリヨスだぞ」

クエストはモンスターを狩猟し、

その証拠となる素材を持ち帰る事で終わる。

ギルドとしては、基本的にハンター同士での素材のやり取りは認め
ていない。

装備が欲しければ自分で倒せ、

金が欲しければ自分でクエストを達成しろという方針だ。

シュウトが言った通り、カルケイノはゲリヨスを特別視していた。

だからこそ、シリルのフルフルに対する時同様に

他人から邪魔が入る事を嫌っていた。

ここでシュウト達が見ているだけなのは簡単だが、

それではギルドが定めたルールやハンターのマナーに違反する。

戦わなければ自分達も成長しないし、

何よりもシュウトは自分がやりたい事をやる人物であり

彼は好きでハンターをやっているのだ。

「独り占めイクナイ」

それだけ言うと、シュウトは戦列に参加する。

カルケイノもヘビィボウガン、

上位ゲリヨス亜種の素材で作ったバストーンウォーロックに散弾を装
填すると

後続に続いた。

作戦通り、イネアはショットボウガンで
ゲリヨスの頭に向け散弾を連射する。
威力の低い下位武器でも、
速射機能で最終的な攻撃力は補える。

それにカルケイノも加わり、
両者の散弾の雨を受けてゲリヨスのトサカは見る見るうちにボロボ
ロになってゆく。

「クアーツ、カツ、カツ」

ゲリヨスは散弾を受けつつもトサカを打ち鳴らす。
まるで自分の狙われている部位を理解し、
壊される前に役目を果たそうとしているかのよう。

だが、あいにくシュウトはモンスターにそれほどの知性があるとは
信じていなかった。
単純に、壊れる前に偶然そういう行動を取ったのはタイミングが悪
かった。

そうとだけ思って後ろを向き、目を腕で覆った。

「クアーツ！」

ゲリヨスの鳴き声、それとキインという閃光を発する音と共に、
まぶた越しにも眩しい光が辺りを覆った。
もし直に見ていたならば、しばらく視界が利かなかっただろう。

ゲリヨスの閃光は強く、たとえ目をつむっていても

正面から受けければしばらくは視界がチカチカするほどだ。
ゲリヨスが閃光を出そうとしたならば、
地に伏せて丸まり顔を覆うくらいでなければと言われている。

しかしトサカを数回打ち鳴らす動作がある為、
見てからの回避は他の攻撃に比べれば容易である。

そしてカルケイノのゲリヨスシリーズには、
ゲリヨスの閃光を無効化するスキルが付いていた。
ゲリヨスが閃光を放つ行為をしている間は
全て攻撃のチャンスとなっているのだ。

カルケイノは散弾を撃ち続け、
イネアもそれに復帰する。

カルケイノがリロードしている時、
ついにゲリヨスのトサカがイネアの散弾によって破壊された。

「今の私がやった！」

「それ禁句だろ！」

反射的にシュウトが返す。

モンスターの尻尾を斬り落とした時など、
部位破壊や討伐できたのが
全部自分の手柄だというのは寄生と同じく嫌われる行為だ。

仲間が囿になって出来る隙もあるわけであるし、
今回も半分以上カルケイノが上位武器で与えたダメージによるもの

だ。

トドメの一撃が自分だったからというのは誇る理由にならない。しかし、戦闘中は気が高ぶるので錯覚しやすく、ある意味仕方のない事ではあるのだが。

ともあれトサカを失ったゲリヨスは

毒液を吐き散らしながら暴走した様に走り出す。

パニック走りと呼ばれる行動で、

壁にぶつかる寸前まで行くと方向転換する。

方向転換には規則性のある行動だが、

毒液を吐きながら走る為

距離を開かざるを得ない。

「な　んとつ！」

回避にかかっていたイネアが急に立ち止まり、

ゲリヨスの毒液をボウガンで受け止めた。

何をしているのかと

シュートとキヨンファが見やれば、

イネアのすぐ傍は毒沼であった。

回避しようにも、身動きの取れない位置だったらしい。

ゲリヨスは毒沼でも平気で入れるが、人間はそうではない。

咄嗟にボウガンで防ぐという発想が出たのは良いが、

飛沫がいくらかイネアに降りかかってしまったし、

そもそもボウガンは毒液を受け止める物ではない。

イネアは慌てて解毒薬を飲み、残りを身体とボウガンに付いた毒液にぶっかけた。

「あちゃー、大丈夫かなこれ……ちょっと下がるわ！」

イネアがエリアの端まで下がり、
粘着性のある毒液を剥ぎ取りナイフでこそぎ落とそうとする。

しばらく時間が経てば毒成分が分解されるとはいえ、

材質であるギアノスの鱗が紫色に変色していた。

一応マカライト鉱石も使われているが、

ほとんどが竜骨やギアノス系の素材で出来ているので心配は残る。

「こんなこともあるうかと！」

イネアはショットボウガンをそこら辺にあっさり放り出すと、
念の為に持って来て置いたドスバイトダガー改を抜き放つ。

最初からその盾で防げば良かったのだが、

ボウガンを持っていた為に盾を構えられなかったのだ。

しかし、片手剣を持ってきたのは少々間違いであった。

ゲリヨスに斬りかかっていたキヨンファは

オーダーレイピアがまったく通らない感覚を感じた。

それと同時に、硬いゴムという存在を初めて身に体験した。

ゴムというからにはぐにやぐにやしているのを想像していたが、

ゲリヨスの脚部分はまるで氷の塊でも斬っているかの様な感覚であった。

イヤンクックとの戦闘経験からも脚が丈夫な事は分かっていたつもりが、

実際斬ってみるとクック以上の硬さだったのだ。

脚がだめなら他の部位だと
キヨンファは一步下がったが、
ゲリヨスを見上げて思わず唸った。

イヤンクックと違い、身体が大きく
胴体と翼が高い位置にあるゲリヨスには
双剣が上手く届かないのだ。
後、有効な部位は尻尾であるが、
それも上手く後ろを取れてなおかつ動きを止めてぶら下げている時
の話だ。

それに対し、カルケイノのボウガンはどこにでも撃ち込めるし
シュウトの太刀も長い刀身を活かして胴体や翼を斬りつけられる。
ゲリヨス相手に双剣や片手剣を選んだのは
キヨンファ達予想外のミスであった。

「メインは俺がやる！」

シュウトはそう言うと、
ゲリヨスの翼に斬りかかる。

ゲリヨスのゴム質の皮はハンマーなどの打撃には強いが、
斬撃には弱い。
そして翼や胴体は脚に比べて刃が通りやすい。
そうすると、ゲリヨスに最も有効な武器は太刀であった。

次々と斬撃が通り、血しぶきが舞う。

カルケイノの射撃も合わさり、

しばらく二人が主動で攻撃を加えると
ゲリヨスは鳴き声を挙げて地に倒れた。

「やったか!？」

「……イネア。お前わざとやってるだろ」

『やったか!？』は、やってないフラグ。

ゲリヨスは死んだふりをして敵をおびき寄せたところを
奇襲するという特殊な行動を取る。

剣士は下がり、カルケイノがゲリヨスの攻撃範囲ギリギリに近づき
その頭に向けて『L V 1 徹甲榴弾』を装填し連射する。

これは命中してから数拍後に爆発する弾丸だ。
バストンウォーロックには一発ずつしか装填出来ないが、
爆発の威力は通常の攻撃とはまた違った属性を持つ。

するとゲリヨスは突然翼を振って暴れだす。
やはり死にまねであった。

カルケイノは無言で徹甲榴弾を撃ち続ける。
さすがに顔に連続して射撃を受けたのが堪えられなかったのだろう。
起き上がりかけたゲリヨスが再び横倒しに倒れる。

「今なら!」

倒れた事でキヨンフアとイネアにも剣が届く。
今が唯一のチャンスだ。

「クアーツ、クアア」

全員で総攻撃をかけ、ゲリヨスの身体がずたずたに斬り裂かれた。ゲリヨスは声を上げるとそのままぐったりと動かなくなる。

「下がるぞ！」

シュウトの声で剣士三人が距離を取る。

カルケイノがLV1通常弾を叩き込んで様子を見るが、ゲリヨスが起き上がる事はなかった。

シュウト達三人は剥ぎ取りにかかる。

しかしカルケイノはまるで興味が無いといった様子で立ち尽くしていた。

これがフルフル相手のシ ril ならそうはいかない。

手早く、なおかつねっぷりと剥ぎ取りを楽しむであろう。

だがカルケイノは死骸であるゲリヨスにも素材にも興味無さそうであった。

キヨンファは、モンスターファンにも色々な者がいるのだと思う。

カルケイノは死刑執行人が被るようなデザインのゲリヨスUキャップを外す。

青い髪と目をした端正な顔立ちの青年であり、

ずんぐりとしたゲリヨスUレジストがキヨンファとイネアに大きな違和感を抱かせた。

「何故ここにいる」

「召集。一旦集まってくさ」

「お前が団長だろう」

シュウトは後ろ向きに片手を振ってみせる。

「俺もまだまだ頭使えてないってこった」

シュウトが言うとカルケイノは無言で返した。

話をする気が無いと感じたシュウトは剥ぎ取りを続ける。

「そういえばさ、気絶無効のスキルがあるのに何で一匹目からトサカ狙ってたの？」

イネアが尋ねる。

初対面でタメ口を利くのはどうかと思うが、命をかける仕事の同業者という面がある種の共感と呼ぶ為ハンター同士の間には珍しい事ではない。カルケイノは一拍置いてから答える。

「別に。やりたかった事をやっただけだ。

頭の素材も手に入るし、狩りのスタイルでもある」

「ふーん。まあ、私達は助かるからいいけど」

二人の会話を聞いて、シュウトとキヨンファは少し驚く。

イネアがゲリヨスリシリーズのスキルを理解していたのもそうだが、それ以前にカルケイノが一匹目のトサカを狙っていた事から

記憶して連想に繋げるほど頭の良い奴だとは思わなかったからだ。

実際、シユウトとキヨンフアは今言われるまで気付かなかった。

それと同時に、シユウトはカルケイノの態度に納得した。彼は他人と距離を置きたがるが、実力者には敬意を払う。

イネアが一連に気付けた事が、彼女の実力だと判断したのだろう。ただのバカ相手ならば、「別に」の時点で口を閉ざしているはずだ。

では、イネアがただのバカでないとしたら彼女はいったい何者なのだろうか。

シユウトはイネアをある種特別な仲間だと感じていた。そうでなければあんな夢など見ないはずだ。

しかし、自分がイネアの何たるかを語るとなるとあまりにも彼女の事を知らなさ過ぎた。

(こっちはこっちで問題か)

そう思いつつ、シユウトは面白みも感じていた。分からない他人の心があり、それを理解し紐解いてゆく。それは人間が行うべき特権なのだ。

自分は変人だ。

だがそれは他人からそう呼ばれているのが大半で自身で名乗り始めたものではない。

だからこそ自身が他人と触れ合い、話し合い、議論をする事で世界観という概念を広げる事が出来る。

変人の自分が持つ一般的ではない概念と、

一般の概念の両方を理解出来たならば

その先には漠然と感じる大きなものを掴み取れる気がするのだ。

シュウトはイネアもアークスへ。
ゆくゆくはフレンズに勧誘すべきだと結論付けると、
いつの間にか止まっていた剥ぎ取りの手を動かし始めた。

剥ぎ取りを終えたシュウト達は

二匹目のゲリヨスへと向かう前に信号弾を上げる事にした。
今打ち上げておけば、二匹目を狩り終わった後には合流出来るだろう。

エリア4の真ん中で信号弾を打ち上げた後、
ゲリヨスが休息していると思われるエリア2へと向かう。

エリア4にある低めの崖を登って行けば直通なのだが、
あいにくと今は毒沼が周りを塞いでいるので通れない。
雨が降れば毒が薄まり人体に影響無い程度まで中和されるのだが、
比較的雨の降りやすいこの地域でも今日はまだ曇り空に留まっていた。

仕方なく洞窟であるエリア3を経由する。

洞窟の中はホットドリンクが必要なくらいに寒いが、
ただの通り道にわざわざ飲む必要はない。

そもそも、ゲリヨスは洞窟内には入らないので
持って来ていないのだ。

エリア4に入ると、

もう片方のゲリヨスが身体を丸めて眠っていた。

先程の通常種が紺色だとすれば、

この亜種はより赤みの強い紫色の身体をしていた。

「俺がやる。もう手を出すな」

カルケイノはそう言うと

ゲリヨス亜種の顔へ向けてLV3通常弾を放つ。

突然の攻撃に慌てた様子で起き上がるゲリヨス。起き上がるまでに弾倉の弾を撃ち切り、リロード。反撃に備えて回避軌道を取る。

「いいの？」

「手え出すなと言われちゃあ」

シュウト達三人はおとなしく観戦する事にする。

カルケイノの腕ならばわざわざ加勢しなくとも狩猟は可能だ。

ついはみや毒液を巧みに回避しつつ、

カルケイノはゲリヨスの頭に弾丸を浴びせ続ける。

睡眠を取っていたという事は、だいぶ消耗しているのだろう。後はものの数分からずいぶん討伐できるはずだ。

そこでカルケイノは戦法を変える。

頭ではなく翼や胴体。

さらには有効な部位ではない脚までも狙い始めたのだ。それもLV1の通常弾で。

威力の低い弾丸を受け続け怒り状態となるゲリヨス。しかしゲリヨスの攻撃はカルケイノに当たらない。

ギヤアギヤアとわめきつつも
ゲリヨスの傷は目に見えて増えていった。

「楽しんでるんですか？」

キヨンフアはそんな印象を受けた。

カルケイノがわざと戦いを長引かせ、

ゲリヨスをなぶり殺しにしている様に見えたのだ。

ゲリヨスUキヤップを被っているので顔は見えないが、

無言でゲリヨスに弾丸を浴びせ続ける彼は

今どんな表情をしているのだろうか。

少なくともシリルがフルフルと戦うのとはまた違った雰囲気だった。

「あれが趣味なんだよ。

モンスター、特にゲリヨスをいたぶるのが。

同じゲリヨス好きの師匠がいたんだが、

ひたすら虐殺を好んでたから縁を切られたっていう

いわく付きの趣味」

そうなのだ。

ハンターには様々な性格の者が居る。

武器を集める為に狩りに出る者、

仲間と共に狩りをして友情を育む者など。

その中でもカルケイノはモンスターを狩る事自体に快感を覚える者
であった。

装備の為、金の為ではなく

狩りをする事自体が彼にとっての仕事であり趣味でもあるのだ。

それはある意味一番幸せな性格なのかも知れない。

しかし、それは国を守るといふ大義名分のある軍人などよりも、さらに『殺し』に特化した行為である。その相手がモンスターとはいえ、彼の行為は褒められる事の無いのが現状であった。

いくら威力が低いとはいえ、弱ったところに連続で受け続ければゲリヨスとて持たない。ふらふらと足を引きずり今にも倒れそうになると、

カルケイノは弾丸をL V 3通常弾に戻し再び頭への射撃を始める。

「クアア、グアアッ！」

トサカを潰され、鼻っ柱を折られ、止めに目も潰されたゲリヨス亜種はそのまま倒れると動かなくなる。死んだふりをする余裕すらなかったのだろう、奴はそのまま動く事は無かった。

「……………」

カルケイノは無言のまま、ゲリヨスを手で振って示した。もう用済みだと言わんばかりに。

シュウト達はハンターとして。人間としてカルケイノの行為にどのような感情を抱くべきかしばし迷う事になっていた。

ゲリヨス亜種の剥ぎ取りを終えた四人はもう一度洞窟を經由しエリア4に戻っていた。信号弾を打ち上げたのがエリア4であるし、それ以前にイネアがほっぽりだしたショットボウガンがそのままだったのだ。

「武器忘れるか、普通」

「忘れてたくて忘れたんじゃないわよ！」

「それツンデレやない逆ギレや！」

わめきつつエリア4に戻ったが、

まだジェイドとシリルは帰ってきていない。

彼らがゲリヨス相手にそれほど手間取るとは思えなかった。

「また何かあったのか……？」

シュウトがそう言いながら、

何気なく周囲を見渡した。

そして、それに気付けたのは運が良かったのだ。

「逃げるッ！」

宙を舞い近くに落ちた物体をシュウトは咄嗟に蹴り飛ばす。そしてキヨンファを突き飛ばした後、濡れる事も構わず沼地に身を投げ出した。

直後、タァンツ！という破裂音が響く。
それと共に、水しぶきが上がった。

「グ、ガ、ガフツ、ゲフツ……大丈夫か！？
……ゲホツ、くろう！」

ダイブした際、毒沼に突っ込んでしまった。
飲み込んだ毒に喉を焼かれる感覚を感じ、
シュウトは必死に毒を吐き出す。

「シュウト……！？」

「な、なに！何なの！？」

どうやらキヨンファは無事らしい。
イネアもカルケイノが庇ったらしく、
三人とも怪我は無いようだ。

「手榴弾……爆弾だ！」

「え……！？」

あれは確かに、手榴弾。
モンスター用のタル爆弾などではなく、
対人用の杵付き手榴弾であった。

シュウトは崖上を睨みつける。
そこには黒いローブにフードを目深に被っている人物の姿があった。

「ルマーロ……！」

フードの男はローブをひるがえし、
足早にその場を去って行った。

「追うか？」

カルケイノが弾丸を装填しつつ聞く。

「いや、あいつじゃ話にならん。

後でサラディンに　ゲホッ、ガハッ！」

「チッ……！」

カルケイノは舌打ちをすると、
嘔吐を続けるシュウトに解毒薬を差し出す。

「……ッ！」

どうやら薬も飲めないほどの吐き気がするらしい。
どうしたものかと考えていると、
再び崖の上に気配を感じた。

カルケイノはボウガンを向ける。

「おお？シュウト……と、カルケイノじゃねえか。
お前らも来てたのか」

現れた人物はハンターであった。
片手剣使いと弓使いの二人だ。

カルケイノはボウガンを振り声を上げる。

「アレスト！ ジェルジャー！」

ルマーロがそっちへ向かった！

ハンターへの傷害で捕まえておけ！」

そう言う二人のハンターは目を見合わせる。

「くそっ、ルマーロまで来てやがんのか」

「こちらは任せる。……シュウトは大丈夫なのか？」

カルケイノは沼地に手をついて嘔吐を続けるシュウトを見やる。

どう見ても大丈夫そうではないが、

毒を全部吐いてしまうのならば死にはしないと判断した。

「大丈夫だ、問題ない」

「ならいいが、ここ一帯から早めに離れた方がいいぞ」

そう言う二人のハンターは

黒いローブの男を追っていった。

「……シュウト」

シュウトはしばらく呼吸すらままならなかったが、

数分後に落ち着き解毒薬を飲む。

まるで砂漠で水源を見つけたかの様に一気に飲み干した。

「グハアッ！…ハアッ…ハアッ…ハア…」

沼地の毒がどれほどの物かは分からないが、足を踏み入れるだけで毒を受けるのを飲み込んでしまったのだ。即効性の高い解毒薬とはいえ、影響は大きいだろう。

「あいつらに任せる他ないか…… キャンプまで戻るぞ」

「ちょ、ちょっと！ いったい何だつてのよ」

「早く行け。」

それと、肩を貸してやれ。

俺が警戒する」

わけのわからないまま

キヨンファとイネアがシュウトに肩を貸し、四人はベースキャンプまで戻った。

シュウトをベッドに寝かせると、カルケイノは周囲を見張りつつ説明した。

「さつきのはベノム帝国の軍人だ。

『ルマーロ・ルマゴ』。帝国の将軍格だ」

「将軍が、何故？」

唐突な出来事にキヨンファでさえ状況が把握出来なかった。カルケイノがキャンプの入り口に寄り掛かったまま続ける。

「元々アークスは各国家からの受けが悪い。というより、敵対していると言ってもいい。シュウトが自称『正義』の下にやってる獵団の行動が、国には革命に見えるんだろう。いざこざは絶えん」

「アークスが、革命を……？」

アークスについてはキヨンファも大きな獵団だとは知らなかった。まさか、シュウトがその様な大それた行為をしているなどとは微塵も予想出来ていなかったのだ。

「俺は……ゲホツ、俺は、ただ正しい事をやっているだけだ。自分の周りを守る為、仲間を守る為、国を守る為。世界を……守る為に」

シュウトが苦しみにうめきながら、心の底から何かを搾り出す様な声を上げた。

「悪人は、ぶち殺す。俺が信じたものは、徹底的に……」

「そして国を乗っ取り、大陸を支配するか？」

「必要ならさ……!!」

キヨンファは、生まれて初めて戦慄という感覚を覚えた。たった一人のハンターが、これほどの思想を持ち、そして実際に戦い続けている。

その事実を前にして、キヨンファは彼に対しどう反応すればいいか即答はできかねた。

しかし、心が震えた。

その言葉、この状況に会い、普通ならば正気を疑うレベルの話であろう。

しかし、キヨンファのシュウトに対する見方は違った。

彼の話は事実としても精神論としても多重の意味で恐ろしいものだが、それに惹かれている自分もいる。

そして、シュウトを支えたいと思っている自分に気付いたキヨンファはその時、フツと何かが吹っ切れた感じがした。

それに気付いた時、キヨンファは唐突に、漠然とした感覚で理解した。

フレンズ。

そうだ。自分はなるべくしてなるのだ。それ以外など、考えられない。

同時に、自分がシュウトの事をどれだか想っているのかも、今になってやっと気が付いた。そう、信じれる気がした。

キヨンファが何かを決意した顔をしているその傍らで、イネアは人知れず冷たい汗が流れるのを感じていた。

ジェイドとシリルは数分後に戻って来た。話を聞くに、彼らも帝国軍人と交戦したらしい。

シュウト達と違つのは、ジェイドが帝国兵を発見し問い詰めた為相手も反撃せざるを得なかった事だが、少なくとも帝国がこの場で何かを行っているのは確かになった。

「モンスターを軍事利用したいらしいんだ」
帰り道、アプトノスが引く竜車の中でジェイドが言う。

「ベノム皇帝の、サラザード・デリンシュド・サジタリア・ビスラード。」
僕は『サラディン』って呼んでるけど、前からフレンズとの付き合いがあつてね。
でも、あいつが皇帝になってさらに軍備増強し始めて。果てにはモンスターを何とか軍事的に利用出来ないかかっていう。元々ベノムは建国まで色々あつた国だし、今でも西シュレイドと小規模な紛争があるから」

「しかし、どうやってモンスターを利用するといふんです？」
キヨンファの疑問ももつともだ。

ドンドルマではモンスターを訓練用や娯楽用として飼っているし、

金持ち貴族が道楽でモンスターを飼う事もある。

とはいえ、軍事的な面でモンスターを使うとなるとどうだろう。ハンターが捕獲したモンスターを戦場まで引つ張っていくのだろうか。

「雪山のフルフルも、沼地のゲリヨスも

ベノムが繁殖率を人工的に操作しているらしい情報は入ってきてる。

それをどうやっているのかまでは分からないけど、

その内モンスターの縄張りを操作して

敵国にモンスターが向かうよう仕向ける……ってのもあるかもね」

何やら聞けば聞くほど事が大きくなっていく気がして、キヨンファは一瞬追究を躊躇った。

しかし、もう自分は決めたのだ。

フレンズになり、シュウトと同じ道を進むと。

この程度で戸惑うようじゃ、とても彼の仲間などにはなれない。

「それで、一獵団に過ぎないアークスはどう動くんです？」

「ジェイドさんならやれますよ！」

横から声を上げたのは、カルケイノであった。しかし、何やら先程とは様子が違って見える。

「ジェイドさんなら、ギルドナイトとしても

解放軍になっても国の一つくらいどうって事ないです！

できれば、自分も微力ながら　　「！」

今まで無表情であったカルケイノが
目をきらきらと輝かせてジエイドを尊敬するのを見て、
キヨンファとイネアはあまりの変わり様に疑問を持つ。

「カルは実力のある奴……特にジエイドが大好きだからなあ。

……げふっ、ぐう」

解毒薬は効いているようだが、

まだ吐き気が残る様子のシュウトが寝転がりながら言う。

そんなものなのだろうか。

しかし、ジエイドがギルドナイトだったのにも驚きだが、

解放軍という単語が出た今、さすがに危険を感じる。

アークスは本当に帝国に革命を起こすつもりだろうか。

ギルドがその武力を各国家から危険視されているのは承知の事である。

武具を始め、ギルドが持つ技術力は国家を上回っているとされる。

国がモンスターの素材を使い装備を作る事も無いわけではないが、
基本的にその技術はギルドのみが持つものなのだ。

未だ、各国家の主兵装はただの鉄の武器なのである。

ただ、噂ではリオレウスの素材を用いたボウガンや大砲を
実戦投入した国もあるとされているから、

それはギルドが一枚岩でない証拠なのだろう。

という事はだ。

アークスは既に反帝国派とある程度の結託は済んでいるのだろう。

彼らが本拠地に集まり始めているというならば、

決行の時はそれほど遠くないのかも知れない。

そこまで考えて、キヨンファはふと

自分達がポツケ村とは反対の方向へ向かっている事に気付いた。

「そういえば、一旦ドンドルマに寄るんです?。」

「カルとシリルはダルタロスに戻るから。」

街を見るのも悪くないし、あそこなら良い薬もあると思うよ。」

ジエイドの言葉に、シュウトが寝たまま唸る。

確かに元々街には行くつもりであったし、

シュウトの容態が思ったより悪いのもある。

シュウトには休んでもらって、

久しぶりに街へ繰り出すとしようか。

そんな事を考えていたキヨンファが甘いと、

ここに居る誰もが責める事は出来なかった。

いつその事、殺せ。

シュウトが顔面のあらゆる場所から水分を吹き出しながらそう思ったのは、

実に数年ぶりの事であった。

ゲリヨス狩りの後、ドンドルマに着いたキヨンファ達は

シュウトに解毒薬と吐き気止めを買い、

街を見て回った。

キヨンファもドンドルマに居た事はあるが、やはり田舎よりも街の方が色々便利であり、依頼にしても様々な物が揃っている。しばらくここに滞在する事も考えた。

そうすれば、もしかしたら

自分と同じくハンターである同郷の友人にも会えるかもしれないと。

しかし、一時快方に向かっていたはずのシュウトの容態が悪化した。

一日24時間、死にたくなるほどの吐き気が続くらしいのだ。

一応解毒はされているはずなのだが、むしろ悪化の一途を辿る病状に

ジエイドは「結構まずい」と判断。

ドンドルマの医者も、薬を処方しても治らないのでお手上げ。腕の良いアークスの医者に見せる為、

一同はダルタロスへと向かったのである。

げえげえと嘔吐するシュウト。

発狂寸前の彼にかける言葉もなく、

一同は気まずい雰囲気の中ダルタロスへ到着した。

「皇族の屋敷か何かです……?」

キヨンファはダルタロスのアークス獵団本部の門をくぐりつつそう言った。

皇族の屋敷でなければ、木で出来た巨城とすべきか。

それにしても、巨大な建物である。

国家を刺激しないよう屋敷には石と鉄は最低限しか組み込まれていないと言うが、

確かに下手な城より大きいこの屋敷を鉋石で覆えば

真つ先にベノム帝国が総力を挙げて取り潰しにかかるだろう。

それほど脅威的な存在であった。

木材が主とはいえ、ベノム軍に属しているわけでもないアークスに建設が許されたのが不思議なくらいだ。

庭と呼ぶには広すぎる敷地では、

アークス団員が射撃練習や剣術の鍛練を積んでいる。

片手剣の『ポイズンタバルジン』を模った木の斧を持つ男が

5人の団員の攻撃を受け流しつつ返り討ちにしたのを見て、

キヨンフアはアークスが本当に革命を起こす気であると確信する。

ハンターの掟では、人に対して武器を扱う事は固く禁じられている。

それが国家を刺激せぬ為なのかは分からないが、

こうしてアークスが対人戦闘の訓練を行っているという事は

彼らがハンターの掟を守る気など無い事の証でもあった。

射撃練習をしていたボウガン使いの団員達が、

ジェイドを見るなり敬礼を行う。

ジェイドが手を上げると、彼らは何事も無かった様に

射撃へと戻った。

「もしかして、ジェイド偉い？」

「一応、ボウガン隊をまとめる」

イネアの遠慮がちな声に、ジェイドは無表情で返す。

(……軍かつ!?)

呆れた様な、恐れる様な顔でイネアは下を向いた。
彼女にしては珍しく、本当に元気が無さそうにしている。

屋敷内に入って少し歩いていると、
一室から声がしたのを聞いてジエイドは歩みを止めた。

「ああ、だからユクモ村には適当な団員に行ってもらっしかない。」

今はいつ問題が起きるか分からんからな。

先延ばしに出来る訳でもなし……人選はフウカとアヤに任せる。

護衛が欲しければ、他の隊から出してもいい」

扉が開くと、出てきたのは緑髪の男であった。

美形としか言いようのないその男は、

ジエイドを見て一瞬口を引き締めたが、

後ろで今にも倒れそうに壁に手を付いているシュウトを見ると

驚きと焦りが混じった様子でシュウトに駆け寄り、その腕で抱いた。

「シュウト……ああ！今すぐリックを呼ぶからな。」

……ジエイド、お前……!!」

「担架より、直接団室行った方が良いだろう」

それを聞いた緑髪の男は

今にも床に唾でも吐きそうな顔でジエイドを睨むと、

シュウトをお姫様抱っこして

団室へ向かって歩き出した。

「まったく……」

ジェイドはそうとだけ言うと、彼の後に続いて歩き出す。

キヨンファとイネアも後を追いつつ、フレンドは色々複雑そうだと結論付けた。

「大体把握したよ。こちらとしても、ちよつと前倒しする必要があるかなって思ってたところなんだ。正直、帰ってきてくれて助かった」

恐らく東方人だと思われる黒髪黒目の柔和な顔をした男が、ジェイドの大まかな報告を聞いてその表情を崩さずに返した。

「それはいいけど、ユウから言ってくれた方が助かるのはあっち」
ジェイドが指差す先には、ベッドに横たわるシユウトとそれを取り巻く十数名の団員達。まるで今生の別れの様である。

「縁起でもない」

「縁起？はは、ジェイド、変わったね」

ジェイドは髪をさらりといじり微妙そうな表情をすると、

取り巻きの輪に入っていた。

「リック、どのくらいで治る」

フレンズ団員であり、医者でもある金髪金目の女性『リック』はシュウトから顔を上げて少々困った顔をする。

「少しかかるかも」

「お前がそう言うんだったら、重症だ。

……皆」

そして、キヨンファとイネアを手のひらで示した。

「あっち。特に黒い方。

新しいフレンズだつてよ」

ジェイドのその言葉に対する団員達の反応は様々であった。

珍しそうに感心した表情の者、

何故か悲しげな表情の者。

明らかにむっとした表情の者。

まったくの無表情な者。

キヨンファがただ一つ理解したのは、

このフレンズという団体はよほどシュウトを好いているという事だった。

そうでなければ、自分がこれほど歓迎されない理由は無いのだから。

シユウトの状態は、当初の予想以上に悪いらしかった。

解毒はされているが、毒を飲んだ事によって
食道を始めとする消化器官が荒れてしまい、
強い吐き気を起こしていると診断された。

これは薬を飲んでおとなしくしているしかないという事で、
シユウトは再び寝たきりの生活となる。

そうすると、キヨンファとイネアをどうするかが問題となった。

イネアはまだフレンズに入ったわけではないと言い、
とりあえず見学の体を保っている。

何やらいつもの元気が無いようなので、
彼女なりに悩んでいるのだろうか。

キヨンファはポツケ村に帰り村付きのハンターとしての役目を果た
すべきなのだが、

どうやらそうはいかないらしい。

村に待機しているウォルトはダルタロスに呼び戻すが、
代わりにアークスから数名の団員をポツケ村に派遣したとの事で
あちらの安全は保障されたようであった。

キヨンファが気まずいのは、
どうやらフレンズ内に数名、シユウトと関係の深い女性が居る事で
あった。

彼女達からしてみれば、ライバルが増えた事になるのだろうか。

だから、彼女達が共に狩りに出ようと申し出てきた時も
キヨンファはまったく驚かずに身の危険のみを感じたのだった。

「やって来ましたクルプテイオス！」

くるりと一回転しつづつたのは、

『ティナ・アーガイル』という金髪黒目の少女である。

彼女はシュウト第一の彼女を自称しており、
キヨンファを狩りに誘ったのもティナであった。

「ようし、40秒で仕度しな！」

「もう出来てるって」

もう一人の女性、『アヤ・ヴィスター』が支給品を分配しながら言った。

彼女はティナと同じく金髪黒目なのだが、
ティナがその髪を短髪にしているのに反し
アヤのそれは脚の付け根に届く程の長髪である。
そして顔立ちが美女とも美少女とも言える
まったく非の打ち所がない美人であった。

最後の一人はシュウトと同じ国の出身らしい。

『ユリ・ミナツキ』という大人しい女性だ。

彼女らの国の言い方では、大和撫子と表現するのだろうか。
髪をセミロングまで伸ばした彼女は

憂いを帯びた様な表情で両手に太刀を抱えている。

驚くべきは彼女達の装備もそうであろう。

ティナは『ハイニンジャソード』に『クロオビスシリーズ』。
ハイニンジャソードは古龍の素材を多く必要とする片手剣である。
モンスターの素材は自力で狩る事により調達するという
ハンターの掟を守っているならば、
彼女は幾多の古龍と戦っている事になる。

アヤは『インペリアルソード』に『ゴールドルナシリーズ』。
インペリアルソードは強化までに多大な鉱石が必要な太刀であるし、
ゴールドルナシリーズは希少種と呼ばれる
金色のリオレイアの素材で固めた装備だ。
こちらも、希少種を何匹も狩っているという事になる。

ユリは『白猿薙【ドドド】』に『リオハートUシリーズ』。
白猿薙は牙獣『ドドブランゴ』の素材を使った氷属性の太刀。
リオハートUはリオレイア亜種の防具である。

三人とも上位と呼ばれる強力な個体を狩って作られた装備を扱う
上位ハンターである。
さすがに巨大な獵団の幹部ともなれば上位ハンター。
それも上位の中では最高ランクの実力者であるのだろう。

しかし分からないのは、彼女らほど実力があり
なおかつ全員美少女であるというのに、
何故彼女らはシュウトなどを好んでいるのだろうか。

不思議な人物であり、それ故の魅力は確かに存在する。
だが顔立ちは平均的であるし
ついでに言うとデコが後退しかかっている。
フレンズ団員の美少女達とはどうみても釣り合わない。

狩り場に来るまで色々話していたのだが、
どうもフレンズ団員というのは
シュウトに宗教的ともいえる溺愛感情を持っているらしい。

特にあの緑髪の団員は

『ナスト・ラーク・ツヴァイン』というアークス、フレンズの副団
長であり、

シュウトを一番溺愛しているのは彼だそうだ。

「ぶつちやけた話、そっち系じゃないのに関係はあるんだよね」

ティナの言葉にアヤが「ああ……まあ、ねえ。もう当たり前的事だ
けど」と

事実肯定したところでキョンファは反応に困った。
物凄く困った。

関係がある。それはそういう……まあ、アレな意味なのだろう。
しかし、それだったらどっちがアッチでどっちがアッチなのか……！
個人的にはどう考えてもシュウトは受けしか考えられない！

もんもんと妄想を膨らませるキョンファの肩に腕を回し、
ティナは卑しい表情を隠さずに言ったのだ。

「まあ、仲良くやろうやア……、同類」

そんなこんなで、フレンズの全貌は掴めないものの
この団体がシュウトに準ずる変人だらけなのは大体察する事が出来
た。

こんなんで本当にフレンズ団員としてやっていけるのだろうか。

しかしもう決めた事だ。

迷いを振り切り、

キヨンファは三人の自称シュウトの彼女達と沼地の中央へと足を進めた。

沼地に再び戻ってきたのは、

未だゲリヨスが大量発生し続けているからである。

少なくとも前回シュウト達で二頭、

ジエイドとシリルも一頭狩っており、

それから他のハンター達がゲリヨス狩りを続けているはずである。

それでもまだ数が多いこの状況。

さすがにベノム帝国が繁殖率を操作しているというのも信憑性を帯びてきているように思えた。

時に、前回の戦闘でキヨンファの双剣は

ゲリヨス相手には不向きな武器である事が判明した。

それだというのに

（もしかしなくても、殺す気なんです　！？）

キヨンファ達は沼地の中央、

エリア4で一頭のゲリヨスを見つけ攻撃を仕掛けた。

しかし、ティナ、アヤ、ユリの三人は

攻撃に加わると見せかけて離脱。

エリアの隅でキヨンファの孤軍奮闘を見守っているのであった。

「な、何をやってるんですか!？」

ゲリヨスのついでにみをかわしつつキヨンファが叫ぶ。
ティナはひらひらと手を振りながら返した。

「フレンズ団員心得その一い！

基本的に皆強い！」

なるほど。

フレンズとはシュウトの個人的な友人の総称でもあるが、
アークスの幹部でもあるのだ。

下位ゲリヨス一頭ぐらい倒せなければ、

フレンズたる資格は無いという事なのだろうか。

だったら、あんたらは何しに来たのかと言いたい。

「心得そのにツ！退かぬ媚びぬ省みぬ！」

「媚びたくも省みたくもないけど凄く退きたい！」

必死に攻撃を避けつつ攻撃を加える。

しかしやはり硬い脚にしか届かないのだ。

一か八か、ゲリヨスの後ろに回りこみ身体全体を使って切り上げる。

上手く尻尾を斬りつけられたはいいが、

こちらとしても隙の大きい攻撃方法だ。

ゲリヨスの反撃をかわす為に無茶は出来ない。

(だけど、やるしかない)

無茶は出来ないが、攻撃に必要な戦法なら使わざるを得ない。

キヨンファは双剣に力を込めゲリヨスの尻へ潜り込むと、全身の筋肉を引き絞りオーダーレイピアを振るった。鬼人化からの乱舞である。

クツクの時の様な剣を折る失態は犯せない。持ち前の冷静さを活かし、脚には皮一枚切り裂く程度の斬撃を。尻尾や胴体には深い連撃を叩き込んだ。

「見えてるみたいね」

アヤの声が聞こえた気がするが、そんな事には構っていられない。

彼女らがやらぬというならばこのゲリヨスは自分一人で狩るしかないのだ。

乱舞を受けたゲリヨスはいくらかダメージを負ったらしいが、この程度で倒れはしない。

隙を突いて攻撃を繰り返し続けるのが飛竜戦である。

何度か乱舞を叩き込むと、

ゲリヨスは鳴き声を上げて飛び立っていった。

自動マーキングによれば、奴が向かったのは寢床ではない。

まだ余力があるという事なのだろう。

キヨンファは久しぶりに、一人での狩りが

パーティーでの狩りよりもずっと辛い事を思い出した。

応急薬に口を付けていると、

ティナがからからとした顔のまま近づいてくる。

「これなら、ダルタロスのランク2昇格クエストにも受かるんじゃない」

「それはどうも。で、アヤさんとユリさんはどこへ？」

気がつけば、このエリアに居るのはキヨンファとティナのみとなっていた。

ティナはまったく考える素振りもせず返す。

「ちよつとした因縁の対決」

ティナの言葉に、キヨンファは意味が分からず追究しようとした。その時、どこか遠くの方から前に聞いた事がある破裂音があったのだ。

彼が喋ったところは見た事が無い。

喋る事が出来ないとの噂もあった。

だがしかし、もし彼が喋る事さえ出来るのならば

現状を大きく変えるきっかけになるだろう事は予想がついた。

「私がここに来た意味が欲しいの」

アヤはそう言うとインペリアルソードを構え、

黒いローブの男、ルマーロ・ルマゴへと飛び掛った。

切っ先をかすめるような剣撃を、ルマーロは剣で受け流す。

ハンター用の武器ではなく、対人用の剣である。
鈍い灰色、カッターナイフの刃を大型化した様なその剣を返し
ルマーロは体勢を低くして一歩後ずさった。
次の攻撃を読んでいたからだ。

アヤより深く踏み込んできたユリの横薙ぎを跳んでかわす。
脚、それも腰に近い付け根を狙った攻撃だった。
これをしゃがんで避ければ隙になる。
跳躍力が低ければ足首を持っていかれただろう。

身体を捻った跳躍から最低限の動きで体勢を整える。
そして剣を納刀した。

アヤはこれがルマーロの実力だとは思えなかった。
という事は、彼はこちらを舐めているか相手をする暇が無いのだら
う。

彼が本気を出せば、例えリーチの長い太刀相手でも
全て受け止める事が出来るはずだ。

「一つだけ聞かせて。

私の事、どう思ってるの」

アヤはまるでシュウトの様な言葉を吐く。
感化されている事を恥じるつもりは無い。
それほどシュウトを嫌う道理もなければ、
その程度の関係でもなかったからだ。

ルマーロが一言でも反応してくれば御の字。

そう考えての台詞であったが、

ルマーロはしばし無言を貫いた後
ロープの中から何かを取り出した。

五つ六つと取り出したそれをアヤ達に向けて放ると、
ルマーロは脱兎の如く走り出す。

直後、破裂音と共に鉄の破片と白い煙が辺りに振り撒かれた。

対人用の手榴弾と、軍用の煙幕手榴弾。

ハンターでいうところのけむり玉であった。

咄嗟に飛び退いたアヤとユリが態勢を立て直した頃には、
ルマーロの姿は影も形も無くなっていたのだった。

ユリはこの状況で発する台詞もなくアヤを見やっていたが、
彼女が惘然とした表情をしているのを見て
思わず呟いた。

「……………三股？」

「そんなわけないでしょ！」

アヤはシュウト以外にもナストとも最近怪しい関係であるし、
ルマーロとも何度も対峙した間柄である。

アヤがすぐに言葉の意味を理解し否定したのを聞いて、
ユリは小さく溜息を吐いた。

まったく、この親友も面倒な奴だ、と。

キヨンファが一頭目のゲリヨスを倒し剥ぎ取りをしている中、アヤとユリは何事も無かったかの様に帰ってきた。

「何をしてたんです？」

キヨンファが聞くと、

アヤはあっさりと答える。

「ルマーロと戦ってたのよ」

「……はい？」

「ルマーロ・ルマゴ。まだ居たのね。」

多分この繁殖はあいつが関わってるはずだから、色々聞きたい事があったのよ。

相変わらず無口だから何も言わずに逃げて行ったけど」

やはりこの人達は本気で人に武器を向けるのだなとキヨンファは納得する。

帝国の将軍格に剣を向ける時点で、もうこれは組織と国家の戦争であるだろう。

それと同時に、帝国と交戦した事をはっきり言うという事は自分は既にフレンズの一員として組み込まれているのだろう。まさかいきなり対人戦闘に巻き込まれやしないか。

「こっちはゲリヨス一匹、ちゃんと一人で狩ったよ」

ティナがキヨンファを示す。

途中、毒液や閃光などをかいくぐり

不利な相性の中危なげなく討伐を完了したのだ。

「お疲れ様。もう一頭は私達がやるわ」

今回の狩猟目標はゲリヨス二頭であった。

剥ぎ取りを終えると、

キヨンファの自動マーカーキングを頼りに二頭目を探す。

豊富な雨により草原地帯となったエリア8で

二頭目のゲリヨスは見つかった。

「じゃ、やりますか。

情け無用、戦闘開始イ！」

ティナがまずエリアをうるついているブルファンゴへ向かう。

大型モンスターとの戦闘中はこのような小型モンスターが脅威となりえるからだ。

動きの幅が広い片手剣の役割でもある。

アヤとユリはゲリヨスへ突進すると、

ほぼ股下という至近距離まで潜り込み太刀を胴体に向けて振るった。

それからの推移は速いものだ。

アヤとユリはお互いを邪魔しない位置で太刀を振るい続ける。

ティナは片手剣が相性悪く、太刀二人の邪魔になると判断したのか中距離からいつでも支援出来るよう動き続けていた。

ゲリヨスが早々に弱ったのは、

武器の性能だけではないだろう。

彼女らの攻撃、一太刀一太刀が的確にゲリヨスの弱点を突いていた。

下位ゲリヨスは死にまねをするまでもなく、3分もかからずに討伐されたのであった。

「そうか。仲良くやってるならいいんだ」

キヨンファが獵団本部に帰還し、事のあらましを話終えたところでシユウトは本当に安心した様子であった。

リック特製の薬によりだいぶ回復したようだが、まだ吐き気は続いているらしい。吐き気があるだけで身体全体が酷い風邪でも引いたかのように動かなくなるらしいのだ。

「しかし、ここ数日だけでも相当な変人ばかりでした。特にフレンズ団員はそれが顕著ですね」

ティナ達以外の団員にも会ったが、どれもシユウトに準ずる変人が目立った。中には比較的まともな人物がいるにはいるのだが、それでもどこか普通とは違う感覚を覚える。それはシユウトやジェイドに近い、達観的なイメージを受けるものであった。

「これだけの人材とどの様に巡り会ったのか聞いてみたいくらいで

す

それを聞いたシュウトの顔色がいくらか良くなる。その言葉を待っていたと言わんばかりだ。

「聴きたいならしょうがない」

キョンファはちょっとした地雷を踏んだ気がした。この話は相当長くなるだろう。

しかし、フレンズとは不思議な団体だ。

彼らが織り成す物語を見てみたい気もする。

前々から普通ではないとは思っていたが、

どうすれば今のシュウトのような人物が出来上がるのか。

キョンファは漠然と、

フレンズはシュウト一人の人生に集約されているのだろうと感じた。

それは確信ではなかったが、

彼がここまでに至るきっかけは

一つ二つの物や者では無いのだろう。

しかし。しかしだ。

もしシュウトがたった一人で生きていたとしても、

それほど変わらなかったのかも知れない。

そう思わせる可能性が、この人物にはあった。

この時、キョンファにはシュウトの話を聞き流す余裕も軌跡も欠片たりと存在しなかった。

それはこの二人にとって、もっとも望む事の一つだったのかも知れない。

これから自分はフレンズとして、
親友としてシュウトと彼の世界に大きく関わっていくのだろう。
その世界で、自分は

「この世界で、俺は
」

第一部 完

5章 『友人と世界』（後書き）

二次創作にオリジナル要素を多く入れ込むと、大抵読者がついていけない。

自分も他のモンハン小説を読んでわかつちゃあいるのだが、この作品が『Friends』シリーズの一である事を考えるとどうしてもオリ設定はかせない。

じゃあFriendsとか無しに

純粹なモンハン小説書けばいいじゃないと思われるが、実際書いてみると酷くつまらない。

主人公がシュウトでない時点でキャラが立たない。

つまり自分はオリ小説のFriendsシリーズ以外が書けないという事です。

オリ設定はシュウトの要約を素直に見てもらえれば大体分かります。異世界やら魔法やら、そういったモンハンに存在しないものができるだけでしょばらないよう努力はしてみます。

さて、次回よりシュウト及びフレンズ団員の過去編となる予定です。余裕があれば、フレンズ関係無しの外伝を一つ書ければなど。

なお、今更ですがこの小説は公式の様な狩り主体ではなくキャラありきの物語であります。

酷い更新ペースですが、必ず完結させます。よほどの事がない限り。

では、また後ほど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9605s/>

Friends ~ モンスターハンター ~

2011年12月27日00時53分発行